

実践 栃木の文学抄

はじめに

黒磯南高校は2015年総合学科としてスタートした。総合学科は普通科・専門学科のように「学科・コース」で決められた時間割で学ぶのではなく、幅広い選択科目の中から自分の興味・関心や進路の希望に沿って「自分の時間割」を作り、少人数で学ぶことができる学科である。そのため自覚が芽生え自主的な行動ができるようになる。選択科目の時間数は1年次0、2年次19/31、3年次20/31である。

今年初めて選択科目「栃木の文学」を担当することになり、2年生10人の授業に出ることになった。指導書のない教材研究も一味あるものだ。新採の際教科書が変わり間に合わずこういう体験をしたこともある。

本書は、栃木県に限られた掲載作品を、時代を通して時間的にとらえることが出来るという特色がある。

松井・ピ・テ・オ印刷にはPDFをお送りいただき、先生方のお手数を煩わせWordに変換していただいたことをここに深謝する。

上代	1	万葉集―東歌・防人歌	
中古	2	馬船	『今昔物語集』
中世	3	那須与一	『平家物語』
	4	足利の染物	『徒然草』
	5	殺生石	『謡曲』
	6	中世和歌抄	
近世	7	『おくのほそ道』―の室八島	日光 塩谷 黒羽 那須 松尾芭蕉
	8	心をのまるる蛇の形	宇都宮に欲のはなれぬ漆屋 『本朝二十不孝』
	9	庚申山の犬飼現ハ	『南総里見八犬伝』 滝沢馬琴
近代	10	『金色夜叉』	尾崎紅葉
	11	『坑夫』	夏目漱石
	12	『華厳の滝』	大町桂月
	13	『路傍の石』	山本有三

上代

1 万葉集

あづまうた

東歌

しもつけの みかも なら こ た け

3424 下野1 三毳の山のご檜のすまぐはし児ろは誰か2 箭か持たむ

3424 之母都家野 美可母乃夜麻能 許奈良能須麻具波思児呂波 多賀家可母多牟

注 1 三毳の山―佐野市と岩舟町との間にある三毳山。 2 箭―食器。「箭を持つ」とは、妻となること。

語釈

一 読みを現代仮名遣いで記せ。

1 東歌 2 下野 3 三毳の山 4 檜

5 児 6 誰 7 箭 8 万葉仮名の読み 之母都家野

二 辞書で意味を調べよ。

1 のす

2 まぐはし

3 児ろ

三 文法問題に答えよ。

1 か 結びの語 活用形 基本形

2 多用されている語とその効果。

3 誰か箭か持たむ 具体的にどういうことを言っているか。

4 修辞法

四 口語訳 下野の三毳の山の小檜のように可愛らしく美しいあの娘は、いったい誰の妻となつて、その人の腕にご飯を盛るようになるのだろうか。

構成 三毳の山のご檜||あの子―かわいらしい 主題 誰の妻になるのか。

しもつけ あそ いしふ そら き な の

3425 下野3 安蘇の河原よ石踏まず空ゆと来ぬよ汝が心告れ

3425 志母都家努 安素乃河泊良欲 伊之布麻受蘇良由登伎奴与 奈我已許呂能礼

注 3 安蘇の河原―安蘇郡を流れる秋山川（佐野市）、あるいは佐野市赤見町の「東山」と推定されている。

語釈

一 読みを現代仮名遣いで記せ。 1 安蘇の河原 2 来ぬ 3 汝 4 告れ

5 万葉仮名の読み 志母都家野

二 辞書で意味を調べよ。

1 告る

三 文法問題に答えよ。

1 よ

2 ず

3 ゆ

4 来ぬよ 品詞分解 口語訳

5 修辞法

四 質問 1 河原を歩いて来るのに石を踏まないという理由。

2 修辞法

五 口語訳 下野の安蘇の河原を、石を踏まないで、空を飛ぶようにして来たのですよ。だからあなたの本心をはっきり聞かせておくれ。

構成 安蘇の河原に飛んできた。 主題 本心を聞きたい

そうもん

相聞

あかみやまくさねかりそ あ いも

3479 4 赤見山草根刈除け合はすがへ争ふ妹しあやにかなしも

3479 安可見夜麻 久左祢可利會氣 安波須賀倍安良蘇布伊毛之 安夜尔可奈之毛

注 4 赤見山―佐野市赤見町の「東山」と推定されている。

語釈

一 読みを現代仮名遣いで記せ。

1 相聞 2 赤見山 3 草根 4 刈除け 5 妹

6 万葉仮名の読み 安可見夜麻
二 辞書で意味を調べよ。

1 相聞

2 妹

3 あやに

4 かなし

三 文法問題に答えよ。

1 がへ

四 口語訳 赤見山の草を刈り除けて逢ってくれたのに、いざとなると逆らうあなたがな
んとも愛しいよ。

構成 草を刈ってあつてくれた人―逆らう 主題 愛しい

さきもりのうた

防人歌

けふ

かへり

おほきみ

しこ

みたて

われ

4373 今日よりは顧みなくて大君の5 醜の御楯と出で立つ我は

4373 布与利波 可敝里見奈久弓 意富伎美乃之許乃美多弓等 伊多都和例波

右の一首6 火長今奉部与曾布

注 5 醜―醜悪なこと。卑下したりする場合に用いる。6 火長―兵士十人で一火という、
その隊長。

語釈

一 読みを現代仮名遣いで記せ。

1 防人 2 顧み 3 大君 4 醜 5 御楯 6 出で

7 万葉仮名の読み 与利波

二 辞書で意味を調べよ。

1 防人

2 顧み

3 大君

三 文法問題に答えよ。

1 出づ

四 質問

1 今日 どういう日か。

- 2 醜の御楯 どういう意味か。
- 3 修辞法
- 五 口語訳 今日からは自分のことなど振り返らず、微力ではあるが大君の警護として出立するのだ、おれは。

構成 防人として出立 主題 出立の決意

あめつち さつや ぬ つくし

4374 天地の神を祈りて7征箭貫き筑紫の島をさして行く我は

4374 阿米都知乃 可美乎伊乃里弓佐都夜奴伎都久之乃之麻乎 佐之弓伊久和例波

右の一首6火長大田部荒耳

注 7征箭―本来「サツ矢」は狩の矢。戦の矢は「征矢」。ここは矢の総称か。

語釈

一 読みを現代仮名遣いで記せ。

1 天地 2 征箭 3 筑紫 4 万葉仮名の読み 阿米都知乃

二 辞書で意味を調べよ。

1 征箭

2 貫く

三 文法問題に答えよ。

1 祈る

四 質問

1 行く どうへ

2 修辞法

五 口語訳 天地の神に武運を祈り、矢をさした靱ゆぎを背負って、九州の筑紫の島へと行くのだ、おれは。

構成 弓を背負って九州に行く 主題出立の決意

け な いはびと

4375 松の木の並みたる見れば家人の我を見送ると立たりし8もころ

4375 麻都能氣乃 奈美多流美礼波 伊波妣等乃和例乎美於久流等 多々理之母己呂

右の一首 火長物部真嶋

注 8もころ―同じような状態。如ごとし

語釈

一 読みを現代仮名遣いで記せ。

1 木 2 並み 3 家人 4 万葉仮名の読み 麻都能気乃

二 辞書で意味を調べよ。

1 並む

2 家人

三 文法問題に答えよ。

1 たる

2 見れ

四 質問

1 「見れ」は何を何と見たか。

五 口語訳 松の木が並んでいるのを見ると、ふと家族が並んでおれを見送ってくれたの
を思い出す。まるで家族が立ち並んでいるようだ。

構成 松の木の並び⇨家族の見送り 主題 家族との別れの悲しさ

たびゆき ゆ

あもしし こと

くや

4376 旅行に行く→知らず母父に言申さずて今ぞ悔しけ

4376 多妣由岐尔 由久等之良受弓 阿母志々尔 己等麻乎佐受弓 伊麻叙久夜之気

右の一首 9 寒川郡の上丁川上臣老

注 9 寒川郡—小山市寒川

語釈

一 読みを現代仮名遣いで記せ。

1 旅行 2 母父 3 万葉仮名の読み 伊麻叙久夜之気

二 辞書で意味を調べよ。

1 母父

三 文法問題に答えよ。

1 悔しけ

四 質問 何が悔しいのか。

五 口語訳もう二度と会えないかもしれない長旅に出るとも知らずに、両親に別れの言葉
も言わずに来て、今では、それが悔しい。

構成 別離を知らずに分かれた 主題 父母との別れ

あもとじ

いただき

あま

4377 母刀自も玉にもがもや戴きて10 みづらのなかに合へ巻かまくも

4377 阿母刀自母 多麻尔母賀母夜 伊多太伎弓 美都良乃奈可尔 阿敝麻可麻久母

右の一首 津守宿小黑栖

注 10 みづら―髪を左右に分けて耳の所で束ねる男子の髪型。

語釈

一 読みを現代仮名遣いで記せ。

1 母刀自 2 戴きて 3 万葉仮名の読み 阿母刀自母

二 辞書で意味を調べよ。

1 母

2 刀自

3 戴く

4 合ふ

5 巻く

三 文法問題に答えよ。

1 もがも

四 質問

1 玉にもがもや なぜか。

2 みづら 誰の

3 何句切れ

五 口語訳 母上も玉であつて欲しいなあ。そうすれば捧げ持つてみずらの中に巻いてお

こうものを。

構成

母Ⅱ玉 私の髪に巻いておく

主題 母への愛

つくひよ

ゆ

あもしし

4378 月日夜は過ぐは行けども母父が玉の姿は忘れせなふも

4378 都久比夜波 須具波山気等毛 阿母志々可 多麻乃須我多波 和須例西奈布母

右の一首 都賀郡の上丁中臣部足国

語釈

一 読みを現代仮名遣いで記せ。

1 母父 2 万葉仮名の読み 都久比夜波

二 辞書で意味を調べよ。

1 なふ

三 文法問題に答えよ。

1 過ぐ

2 の

四 口語訳 旅に出てから、月日は過ぎて行くけれども、両親の玉のような尊い姿は忘れない。

構成 旅に出て月日は過ぎる。

主題 両親への愛

しらなみ

やたび そで

4379 白波の寄せる浜辺に別れなばいともすべなみ八度袖振る

4379 之良奈美乃 与曾流波麻倍尔 和可例奈婆伊刀毛須倍奈美 夜多妣蘇弓布流

右の一首 足利郡の上丁大舍人部禰麻呂

語釈

一 読みを現代仮名遣いで記せ。

1 白波 2 八度 3 袖 4 万葉仮名の読み 之良奈美乃

二 辞書で意味を調べよ。

1 寄せる

2 いとも

3 すべ

4 八度

三 文法問題に答えよ。

1 なみ

四 質問 別れなば どこで

五 口語訳 白波の寄せては返す浜辺で、見送る人々と別れたならば、何ともする方法もな

構成 白波の浜辺の別れ 何度も袖を振り

主題 別れを悲しむ

なにはと

こ

いこまたかね

4380 11 難波津を漕ぎ出て見れば神さびふる 12 生駒高嶺に雲そたなびく

4380 奈尔波刀乎己岐弓美例婆可美佐夫流 伊古麻多可祢尔 久毛曾多奈妣久
右の一首 梁田郡の上丁大田部二成

注 二 難波津―大阪府の難波の港。12 生駒―奈良県と大阪府の間にある生駒山。
語釈

一 読みを現代仮名遣いで記せ。

1 難波津 2 漕ぎ 3 生駒高嶺

4 万葉仮名の読み 奈尔波刀乎

二 辞書で意味を調べよ。

1 津

2 神さぶ

三 文法問題に答えよ。

1 見れ

2 る

3 ぞ 結びの語 活用形

四 質問 防人はどこに居てどこへ行くか。

五 口語訳 難波の港を漕ぎ出してみると、神々しい生駒山の高い嶺に雲がたなびいてい
るよ。

構成 難波の港の向こうに生駒山 主題 船旅への思い

くにぐに さきもり ふなの

4381 国々の防人つどひ船乗りて別るを見ればいともすべなし

4381 久尔具尔乃 佐岐毛利都度比 布奈能里豆和可流乎美礼婆 伊刀母須敝奈之

右の一首 河内郡の上丁神麻績部嶋麻呂

語釈

一 読みを現代仮名遣いで記せ。

1 防人 2 万葉仮名の読み 久尔具尔乃

二 辞書で意味を調べよ。

1 つどふ

2 すべなし

三 質問 別る どういう別れか

四 口語訳諸国の防人が集合して舟に乗って、別れ別れに出航して行くのを見ると、まっ
たくどうしようもなく悲しい。

構成 国中の防人の集合―船出 主題 防人に行く切なさ

ふたほがみ あ

わ さ

4382 13 布多富我美悪しけ人なり 14 あたゆまひ我がする時に防人に差さす

4383 布多富我美 阿志氣比等奈里 阿多由麻比 和我須流等伎尔 佐伎母里尔佐須

右の一首 那須郡の上丁大伴部広成

注 13 布多富我美―「布多」は下野国府の所在地であつ

14 あたゆまひ―急病の意味か。

語釈

一 読みを現代仮名遣いで記せ。

1 布多富我美 2 万葉仮名の読み 布多富我美

二 辞書で意味を調べよ。

1 悪しけ

2 さす

三 質問

1 わが 誰のことか

2 悪しけ人 なぜか。

3 我 誰か

4 修辞法

四 口語訳 布多の長官は悪い人だ。おれが急病で苦しんでいる時に、防人に指名するとは。

構成 国守は病の自分をさきもりに出す 主題 さきもりの苦痛

つ

ふなよそ た で あも

4383 15 津の国の海のなぎさに船装ひ立し出も時に母が目もがも

4383 都乃久尔乃 宇美能奈伎佐尔 布奈余曾比多志毛等伎尔 阿母我米母我母

右の一種 塩谷郡の上丈丈部足人

二月十四日に 下野国の防人部領使正六位上田口朝臣大戸

が進たてまつる歌の数十八首 ただし 拙劣の歌は取り載せず

注 15 津の国―大阪府と兵庫県の一部。

語釈

一 読みを現代仮名遣いで記せ。

1 船装ひ 2 母 3 万葉仮名の読み 都乃久尔乃

二 辞書で意味を調べよ。

1 船装ひ

2 立し出

3 目

三 文法問題に答えよ。

1 もがも

四 口語訳 摂津の国の海の渚で船出の用意をし、旅立つ時に、母に一目会いたいなあ。

構成 摂津の国 船出 主題 母への慕情

文学史

万葉集

現存する我が国最古の1（ ）。

作者層は天皇・皇族から広く庶民にまでおよび、上代人の素朴で純粹な生活感情が雄大に歌い上げられている。二十卷、約2（ ）首の歌は、3（ ）4（ ）を中心に、旋頭歌、仏足石歌体などを含んでおり、5（ ）と呼ばれる漢字の音と訓とを利用した巧妙な表記法で記されている。6（ ）前半から、編集者とみられる7（ ）の時代まで前後三世紀にわたる歌が集められている。

作品

東歌

遠江とおとうみ国（静岡県）より1（ ）の、東国の農民の歌で、『万葉集』巻十四に二百三十首集められている。2（ ）に配列された地名のはっきりわかる歌と、地名がわからない歌の二部に分けられている。3（ ）の歌としてあるのはわずかに二首だが、三四〇四、三四三四なども明らかに下野の歌であり、他に三四〇六、三四〇九、三四一六、三四一八、三四二〇、三四七三、三五一八などにもその可能性をさぐることができる。

防人歌

東歌の地域とほぼ同じ諸国から徴集され、1（ ）に送られて、外国（主として朝鮮半島）からの侵入に備えて配置された2（ ）（「崎を守る」という意味から3（ ）となった）の歌で、巻二十を中心に約百首集められている。そのうち、下野の歌は十一首である。

解答

実践 栃木の文学抄

はじめに

黒磯南高校は2015年総合学科としてスタートした。総合学科は普通科・専門学科のように「学科・コース」で決められた時間割で学ぶのではなく、幅広い選択科目の中から自分の興味・関心や進路の希望に沿って「自分の時間割」を作り、少人数で学ぶことができる学科である。そのため自覚が芽生え自主的な行動ができるようになる。選択科目の時間数は1年次0、2年次19/31、3年次20/31である。

今年初めて選択科目「栃木の文学」を担当することになり、2年生10人の授業に出ることになった。指導書のない教材研究も一味あるものだ。新採の際教科書が変わり間に合わずこういう体験をしたこともある。

本書は、栃木県に限られた掲載作品を、時代を通して時間的にとらえることが出来るという特色がある。

松井・ピ・テ・オ印刷にはPDFをお送りいただき、先生方のお手数を煩わせWordに変換していただいたことをここに深謝する。

上代	1	万葉集	東歌・防人歌	
中古	2	馬船	『今昔物語集』	
中世	3	那須与一	『平家物語』	
	4	足利の染物	『徒然草』	兼好法師
	5	殺生石	『謡曲』	
	6	中世和歌抄		
近世	7	『おくのほそ道』	一の室八島 日光 塩谷 黒羽 那須	松尾芭蕉
	8	心をのまるる蛇の形	宇都宮に欲のはなれぬ漆屋	『本朝二十不孝』
				井原西鶴
	9	庚申山の犬飼現ハ	『南総里見八犬伝』	滝沢馬琴
近代	10	『金色夜叉』		尾崎紅葉
	11	『坑夫』		夏目漱石
	12	『華厳の滝』		大町桂月
	13	『路傍の石』		山本有三

上代

1 万葉集

あづまうた

東歌

しもつけの みかも

なら

こ

た

け

3424 下野1 三毳の山のご櫓のすまぐはし児ろは誰か2 筥か持たむ

3424 之母都家野 美可母乃夜麻能 許奈良能須麻具波思児呂波 多賀家可母多牟

注 1 三毳の山―佐野市と岩舟町との間にある三毳山。 2 筥―食器。「筥を持つ」とは、

妻となること。

語釈

一 読みを現代仮名遣いで記せ。

1 東歌 2 下野 3 三毳の山 4 櫓

5 児 6 誰 7 筥 8 万葉仮名の読み 之母都家野

二 辞書で意味を調べよ。

1 のす

2 まぐはし

3 児ろ

三 文法問題に答えよ。

1 か 結びの語 活用形 基本形

2 多用されている語とその効果。

3 誰か筥か持たむ 具体的にどういうことを言っているか。

4 修辞法

四 口語訳 下野の三毳の山の小櫓のように可愛らしく美しいあの娘は、いったい誰の妻となつて、その人の腕にご飯を盛るようになるのだろうか。

構成 三毳の山のご櫓Ⅱあの子―かわいらしい 主題 誰の妻になるのか。

3 4 2 4

一 1 あづまうた 2 しもつけ 3 みかものやま 4 なら 5 こ

二 1 上代語 のように 2 きれいだ 3 上代語 東国方言 人

三 1 助動詞 む 推量 連体形 係り結び 2 の 焦点を絞る。 3 誰の妻となるのか

4 連体止め

しもつけ あそ いしふ そら き な の

3425 下野3 安蘇の河原よ石踏まず空ゆと来ぬよ汝が心告れ

3425 志母都家努 安素乃河泊良欲 伊之布麻受蘇良由登伎奴与 奈我已許呂能礼

注 3 安蘇の河原―安蘇郡を流れる秋山川（佐野市）、あるいは佐野市赤見町の「東山」と推定されている。

語釈

一 読みを現代仮名遣いで記せ。 1 安蘇の河原 2 来ぬ 3 汝 4 告れ

5 万葉仮名の読み 志母都家野

二 辞書で意味を調べよ。

1 告る

三 文法問題に答えよ。

1 よ

2 ず

3 ゆ

4 来ぬよ 品詞分解 口語訳

5 修辞法

四 質問 1 河原を歩いて来るのに石を踏まないという理由。

2 修辞法

五 口語訳 下野の安蘇の河原を、石を踏まないで、空を飛ぶようにして来たのですよ。だからあなたの本心をはっきり聞かせておくれ。

構成 安蘇の河原に飛んできた。 主題 本心を聞きたい

3 4 2 5

一 1 あそのかわら 2 き 3 な 4 の 5 しもつけの

二 1 述べる

三 1 上代語 格助詞 を通って 2 2 助動詞ず 連用形 打消し

4 来 か行変格 来 連用形 ぬ 助動詞 ぬ 完了 終止形 よ 間投助詞 詠嘆

来たのだ。 5 四句切れ

四 1 空を飛ぶようにやってきた。

2 四句切れ

そうもん

相聞

あかみやまくさねかりそ あ

いも

3479 4 赤見山草根刈除け合はすがへ争ふ妹しあやにかなしも

3479 安可見夜麻 久左称可利曾氣 安波須賀倍安良蘇布伊毛之 安夜尔可奈之毛

注 4 赤見山―佐野市赤見町の「東山」と推定されている。

語釈

一 読みを現代仮名遣いで記せ。

1 相聞 2 赤見山 3 草根 4 刈除け 5 妹

6 万葉仮名の読み 安可見夜麻

二 辞書で意味を調べよ。

1 相聞

2 妹

3 あやに

4 かなし

三 文法問題に答えよ。

1 がへ

四 口語訳 赤見山の草を刈り除けて逢ってくれたのに、いざとなると逆らうあなたがな
んとも愛しいよ。

構成 草を刈ってあってくれた人―逆らう 主題 愛しい

3479

一 1 そうもん 2 あかみやま 3 くさね 4 かりそ 5 いも 6 あかみやま

二 1 男女・肉親・友人などでないのに消息や親愛の情を述べ合う贈答の歌。

2 女性を親しみを込めて呼ぶ語。3 むしように 4 心にしみて愛しい

三 1 上代語 東国方言 反語 ……かいや……ない

さきもりのうた

防人歌

けふ かへり おほきみ しこ みたて い われ

4373 今日よりは顧みなくて大君の5 醜の御楯と出で立つ我は

4373 布与利波 可敵里見奈久弓 意富伎美乃之許乃美多弓等 伊多都和例波

右の一首6 火長今奉部与曾布

注 5 醜―醜悪なこと。卑下したりする場合に用いる。 6 火長―兵士十人で一火という、その隊長。

語釈

一 読みを現代仮名遣いで記せ。

1 防人 2 顧み 3 大君 4 醜 5 御楯 6 出で

7 万葉仮名の読み 与利波

二 辞書で意味を調べよ。

1 防人

2 顧み

3 大君

三 文法問題に答えよ。

1 出づ

四 質問

1 今日 どういう日か。

2 醜の御楯 どういう意味か。

3 修辞法

五 口語訳 今日からは自分のことなど振り返らず、微力ではあるが大君の警護として出立するのだ、おれは。

構成 防人として出立 主題 出立の決意

4 3 7 3

一 1 さきもり 2 かえり 3 おおきみ 4 しこ 5 みたて 6 い 7 よりは

二 1 上代から平安時代にかけて辺境の防備についた兵士。 2 自分のことを気に掛ける。

3 天皇の敬称

三 1 動詞 ダ行下二段活用 出づ 連用形

四 1 門出の日 2 (武人が自分を卑下して言う語) 天皇めに盾となって警護する意。

3 句割れ 倒置法 出で立つ／我は

あめつち

さつやぬつくし

4374 天地の神を祈りて7征箭貫き筑紫の島をさして行く我は

4374 阿米都知乃 可美乎伊乃里弓佐都夜奴伎都久之乃之麻乎 佐之弓伊久和例波

右の一首6火長大田部荒耳

注 7征箭―本来「サツ矢」は狩の矢。戦の矢は「征矢」。ここは矢の総称か。

語釈

一 読みを現代仮名遣いで記せ。

1 天地 2 征箭 3 筑紫 4 万葉仮名の読み 阿米都知乃

二 辞書で意味を調べよ。

1 征箭

2 貫く

三 文法問題に答えよ。

1 祈る

四 質問

1 行く どこへ

2 修辞法

五 口語訳 天地の神に武運を祈り、矢をさした鞆ゆぎを背負って、九州の筑紫の島へと行くのだ、おれは。

構成 弓を背負って九州に行く

主題出立の決意

4374

一 1あめつち 2さつや 3つくし 4あめつちの

二 1狩獵に用いる矢 2貫く。やなぐいにさす

三 1動詞 ラ行四段活用 祈る 連用形 四 1筑紫の島 2句割れ 倒置法 字余り

け な

いはびと

4375 松の木の並みたる見れば家人の我を見送ると立たりし8 もころ

4375 麻都能気乃 奈美多流美礼波 伊波妣等乃和例乎美於久流等 多々理之母己呂

右の一首 火長物部真嶋

注 8もころ―同じような状態。如ごとし

語釈

一 読みを現代仮名遣いで記せ。

1 木 2 並み 3 家人 4 万葉仮名の読み 麻都能気乃

二 辞書で意味を調べよ。

1 並む

2 家人

三 文法問題に答えよ。

1 たる

2 見れ

四 質問

1 「見れ」は何を何と見たか。松の木の並びを家族と

五 口語訳 松の木が並んでいるのを見ると、ふと家族が並んでおれを見送ってくれたのを思い出す。まるで家族が立ち並んでいるようだ。

構成 松の木の並び⇨家族の見送り

主題 家族との別れの悲しさ

4375

一 1け 上代語 東国方言 2な 3いえびと 4まつのきの

二 1並ぶ 2上代語 東国方言 家の人

三 1 助動詞 たり 連体形 完了 2 助動詞 見る 已然形

たびゆき ゆ

あもしし こと

くや

4376 旅行に行くとき知らず母父に言申さずて今ぞ悔しけ

4376 多岐由岐尔 由久等之良受弓 阿母志々尔 己等麻乎佐受弓 伊麻叙久夜之氣

右の一首9寒川郡の上丁川上臣老

注 9 寒川郡―小山市寒川

語釈

一 読みを現代仮名遣いで記せ。

1 旅行 2 母父 3 万葉仮名の読み 伊麻叙久夜之氣

二 辞書で意味を調べよ。

1 母父

三 文法問題に答えよ。

1 悔しけ

四 質問 何が悔しいのか。別れの挨拶をしなかったこと

五 口語訳もう二度と会えないかもしれない長旅に出るとも知らずに、両親に別れの言葉も言わずに来て、今では、それが悔しい。

構成 別離を知らずに分かれた 主題 父母との別れ

4376

一 1 たびゆき 2 あもしし 3 いまぞびやしけ

二 1 上代語 東国方言 母と父 両親

三 1 「悔しき」の訛り 悔やまれる

あもとし

いただき

あま

4377 母刀自も玉にもがもや戴きて10 みづらのなかに合へ巻かまくも

4377 阿母刀自母 多麻尔母賀母夜 伊多太伎弓 美都良乃奈可尔 阿敵麻可麻久母

右の一首 津守宿小黒栖

注 10 みづら―髪を左右に分けて耳の所で束ねる男子の髪型。

語釈

一 読みを現代仮名遣いで記せ。

1 母刀自 2 戴きて 3 万葉仮名の読み 阿母刀自母

二 辞書で意味を調べよ。

1 母

2 刀自

3 戴く

4 合ふ

5 巻く

三 文法問題に答えよ。

1 もがも

四 質問

1 玉にもがもや なぜか。一緒に連れて行けるから

2 みづら 誰の 防人

3 何句切れ

五 口語訳 母上も玉であつて欲しいなあ。そうすれば捧げ持つてみずらの中に巻いておこうものを。

構成 母||玉 私の髪に巻いておく 主題 母への愛

4377

一 1 あもとし 2 いただ 3 あまとじも

二 1 上代語 東国方言 母 2 女性の敬称 3 頭に乘せる 4 一つになる 5 巻きつける

三 1 終助詞 願望 いいなあ

四 1 二句切れ

つくひよ

ゆ

あもしし

4378 月日夜は過ぐは行けども母父が玉の姿は忘れせなふも

4378 都久比夜波 須具波山氣等毛 阿母志々可 多麻乃須我多波 和須例西奈布母

右の一首 都賀郡の上丁中臣部足国

語釈

一 読みを現代仮名遣いで記せ。

1 母父 2 万葉仮名の読み 都久比夜波

二 辞書で意味を調べよ。

1 なふ

三 文法問題に答えよ。

1 過ぐ

四 口語訳 旅に出ってから、月日は過ぎて行くけれども、両親の玉のような尊い姿は忘れない。

4378

一 1 あもしし 2 つくひよは

二 1 上代語 東国方言 打消し ない

三 1 過ぎの訛り

構成 旅に出て月日は過ぎる

主題 両親への愛

しらなみ

やたび そで

4379 白波の寄せる浜辺に別れなばいともすべなみ八度袖振る

4379 之良奈美乃 与曾流波麻倍尔 和可例奈婆伊刀毛須倍奈美 夜多妣蘇弓布流

右の一首 足利郡の上丁大舎人部禰麻呂

語釈

一 読みを現代仮名遣いで記せ。

1 白波 2 八度 3 袖 4 万葉仮名の読み 之良奈美乃

二 辞書で意味を調べよ。

1 寄せる

2 いとも

3 すべ

4 八度

三 文法問題に答えよ。

1 なみ

四 質問 別れなば どこで 浜辺

五 口語訳 白波の寄せては返す浜辺で、見送る人々と別れたならば、何ともする方法も
な

構成 白波の浜辺の別れⅡ何度も袖を振り 主題 別れを悲しむ

4379

一 1 しらなみ 2 やたび 3 そで 4 しらなみの

二 1 寄せる 2 あまり 3 方法 4 なんども

三 1 な 形容詞 なし 語幹 み 接尾語 形幹 + みⅡ原因理由 ないので

なにはと こ

いこまたかね

4380 11 難波津を漕ぎ出て見れば神さぶる 12 生駒高嶺に雲そたなびく

4380 奈尔波刀乎己岐弓美例婆可美佐夫流 伊古麻多可祢尔 久毛曾多奈妣久

右の一首 梁田郡の上丁大田部三成

注 二 難波津―大阪府の難波の港。 12 生駒―奈良県と大阪府の間にある生駒山。
語釈

一 読みを現代仮名遣いで記せ。

1 難波津 2 漕ぎ 3 生駒高嶺

4 万葉仮名の読み 奈尔波刀乎

二 辞書で意味を調べよ。

1 津

2 神さぶ

三 文法問題に答えよ。

1 見れ

2 る

3 ぞ 結びの語 活用形

四 質問 防人はどこに居てどこへ行くか。

五 口語訳 難波の港を漕ぎ出してみると、神々しい生駒山の高い嶺に雲がたなびいてい
るよ。

構成 難波の港の向こうに生駒山 主題 船旅への思い

4380

一 1 なにわと 2 こ 3 いこまたかね 4 なにわとを

二 1 入口 2 神々しい姿をしている。

三 1 動詞 マ行上一段 見る 已然形 2 助動詞 り 完了 連体形

3 たなびく 四大阪湾 筑紫

くにぐに さきもり ふなの

4381 国々の防人つどひ船乗りて別るを見ればいともすべなし

4381 久尔具尔乃 佐岐毛利都度比 布奈能里弓和可流乎美礼婆 伊刀母須敝奈之

右の一首 河内郡の上丁神麻績部嶋麻呂

語釈

一 読みを現代仮名遣いで記せ。

1 防人 2 万葉仮名の読み 久尔具尔乃

二 辞書で意味を調べよ。

1 つどふ

2 すべなし

三 質問 別る どういう別れか

四 口語訳諸国の防人が集合して舟に乗って、別れ別れに出航して行くのを見ると、まったくどうしようもなく悲しい。

構成 国中の防人の集合―船出 主題 防人に行く切なさ

4381

一 さきもり 2 くにぐにの

二 集まる 2 どうしようもなく困る。三 船と船の

ふたほがみ あ

わ さ

4382 13 布多富我美悪しけ人なり 14 あたゆまひ我がする時に防人に差さす

4382 布多富我美 阿志氣比等奈里 阿多由麻比 和我須流等伎尔 佐伎母里尔佐須

右の一首 那須郡の上丁大伴部広成

注 13 布多富我美―「布多」は下野国府の所在地であつ

14 あたゆまひ―急病の意味か。

語釈

一 読みを現代仮名遣いで記せ。

1 布多富我美 2 万葉仮名の読み 布多富我美

二 辞書で意味を調べよ。

1 悪しけ

2 さす

三 質問

1 わが 誰のことか

2 悪しけ人 なぜか。

3 我 誰か

4 修辞法

四 口語訳 布多の長官は悪い人だ。おれが急病で苦しんでいる時に、防人に指名するとは。

構成 国守は病の自分をさきもりに出す 主題 さきもりの苦痛

4382

一 ふたほがみ 2 ふたほがみ

二 1 上代語 東国方言 「悪しき」悪い 2 指名する。任命する。

三 1 自分 2 急病なのに防人に出すから 3 防人 4 二句切れ

つ

ふなよそ た で

あも

4383 15 津の国の海のなぎさに船装ひ立し出も時に母が目もかも

4383 都乃久尔乃 宇美能奈伎佐尔 布奈余曾比多志毛等伎尔 阿母我米母我母

右の一種 塩谷郡の上丈丈部足人

二月十四日に 下野国の防人部領使正六位上田口朝臣大戸

が進たてまつる歌の数十八首 ただし 拙劣の歌は取り載せず

注 15 津の国―大阪府と兵庫県の一部。

語釈

一 読みを現代仮名遣いで記せ。

1 船装ひ 2 母 3 万葉仮名の読み 都乃久尔乃

二 辞書で意味を調べよ。

1 船装ひ

2 立し出

3 目

三 文法問題に答えよ。

1 もかも

四 口語訳 撰津の国の海の渚で船出の用意をし、旅立つ時に、母に一目会いたいなあ。

構成 撰津の国 船出 主題 母への慕情

4383

一 1 ふなよそ 2 あも 3 つのくにの

二 1 出発の準備。出船の用意をする。2 出発する。

3 (見る対象である顔) 顔

三 1 上代語 終助詞 願望 あればいいなあ

文学史

万葉集

現存する我が国最古の1（ ）。作者層は天皇・皇族から広く庶民にまでおよび、上代人の素朴で純粋な生活感情が雄大に歌い上げられている。二十巻、約2（ ）首の歌は、3（ ）4（ ）を中心に、旋頭歌、仏足石歌体などを含んでおり、5（ ）と呼ばれる漢字の音と訓とを利用した巧妙な表記法で記されている。6（ ）前半から、編集者とみられる7（ ）の時代まで前後三世紀にわたる歌が集められている。

作品

東歌

遠江とおとうみ国（静岡県）より1（ ）の、東国の農民の歌で、『万葉集』巻十四に二百三十首集められている。2（ ）に配列された地名のはっきりわかる歌と、地名がわからない歌の二部に分けられている。3（ ）の歌としてあるのはわずかに二首だが、三四〇四、三四三四なども明らかに下野の歌であり、他に三四〇六、三四〇九、三四一六、三四一八、三四二〇、三四七三、三五一八などにもその可能性をさぐることができる。

防人歌

東歌の地域とほぼ同じ諸国から徴集され、1（ ）に送られて、外国（主として朝鮮半島）からの侵入に備えて配置された2（ ）（「崎を守る」という意味から3（ ）となった）の歌で、巻二十を中心に約百首集められている。そのうち、下野の歌は十一首である。

万葉集 1歌集 2四千五百 3短歌 4長歌 5旋頭歌 6仏足石歌体 7大伴家持の

時代

東歌

1東 2国別 3下野

防人歌 1北九州 2兵 3防人

参考

日本語の表記

万葉仮名 漢字のみで国語を表記した万葉集は、漢字の意味に相当する日本語をあてて読んだり(訓)、漢字の字義を無視して音のみを借りたりするなど、さまざまな工夫をして表記した(例Ⅱ左散難弥乃志我能大和太与杼六友昔人二亦母相目八毛)。この万葉仮名はやがて仮名文字に発展するが、きわめて複雑な用字法のために後世、読み方が分からなくなつた時期もある。

『万葉集』(759年以後) 最も古い歌は500年に作られている。

和歌

主に漢字一字に日本語の一音節をあてて表現したので、五言古詩・七言古詩に倣えば五七のリズムが出来ることになる。

仮名(平仮名、カタカナ) 800年ごろ かなを工夫し、かなで書いた。800年頃。

平仮名 Ⅱ漢字の字体を簡略化したもの。変体仮名

カタカナⅡ漢字の字体の一部を簡略化したもの。

仮名文学

『竹取物語』(900年頃)、『伊勢物語』(900年頃)等。『源氏物語』(1015年頃)を川端康成は、世界の最高傑作と評価している。

漢字仮名交じり文

『今昔物語集』(1100年頃) 漢字・カタカナ交じり 話の数は約1100話で世界最多の物語である。『千一夜物語』は、シェラザードが王様に話をした夜が千一夜で、話数は長短約380話である。

和漢混淆文

『平家物語』(1200年ごろ) 和文体と漢文訓読文体とが、適当に入り混じった文語文体。これは漢字仮名交じり文の完成したものと言える。

以後、漢字かな交じり文は標準的な文章として定着している。

2 馬船

『今昔物語集』卷第三十第十話

*登場人物を全て○で囲み、中心となる語を□で囲め。
語釈

1 今は昔、下野の国1□の郡に住む者1ありけり。年ごろ夫妻相ともに棲みわたりけるほどに、いかなることかありけむ、夫その妻を去りて、1異妻をまうけてければ、夫心替り、その本の妻のもとにありける物どもを、何も残さず、今の妻のもとへ計へ2運び持て行きけるを、本の妻「いと心うし」と思ひけれども、ただ、男のするにまかせて3見けるに、塵ばかりの物も残さず、皆持て行きはて2ぬ。ただわずかに残りたる物は、2馬船一つ3ぞありける。

2 それを、この夫の従者にて、馬飼にて仕へける童ありけり、名をば真梶丸と4ぞいひける。それを使にて、4「取りにおこせたりければ、本の妻5この童を見ていひけるやう、「今はよに6来じな」と。童いはく、「いかでか参り候は5ざらむ。心浅くも仰せらるるかな」とて、馬船持て行かむとするに、本の妻、「7おのれが主に申さむと思ふことのあるをば、申してむや」といひければ、童、「いとよく申し候ひなむ」といひければ、本の妻、「文を奉らむをば、さらに6よも見給はじ。ただことに8かく申せ」とて、

3 ふねもいじまかちもいじ7なけふよりはうき世のなかをいかでわたらむと。

3 童9これを聞きて返り行きて、10主に、「かくなむ仰せられ8つるは」。男これを聞きて、あはれなりと思ひけむ、運び取りたりける物どもを、皆運び返して、本の妻のもとに返り行き、もとのごとくあからめ9せで棲みける。

しかれば情ある心ある者、かくなむありける、となむ語り伝へたとや。

注

1□―郡名を後で調べて記入しようと空白にしておいた箇所が、そのままになって伝わってしまったと考えられる。

2馬船―馬の飼葉桶。

3ふねもこじ…―「ふね」に「馬船」と「船」を、「まかち」に「真梶丸」と船の「梶」を掛けた。また「うき」は「浮き」と「憂き」の掛詞。「船」「梶」「浮き」「渡る」は縁語。

一次の語の読みを現代仮名遣いで記せ。

- | | | | | | | | | | | | |
|----|----|----|------|----|----|----|----|----|-----|----|----|
| 1 | 馬船 | 2 | 下野の国 | 3 | 郡 | 4 | 夫妻 | 5 | 夫 | 6 | 棲み |
| 7 | 妻 | 8 | 異妻 | 9 | 計へ | 10 | 馬飼 | 11 | 真梶丸 | 12 | 候は |
| 13 | 仰せ | 14 | 主 | 15 | 文 | 16 | 奉る | | | | |

二次の語の意味を辞書で調べよ。

1 馬船

2 馬飼

3 年ごろ

4 異妻

5 いと

6 心うし

7 従者

8 童

9 心浅し

10 仰す

11 おのれ

12 文

13 奉る

14 あはれなり

15 あからめ

16 情

17 主

三 傍線部1、10と11の問いに答えよ。

1 どういうことか。

2 妻はどうしたか。

3 主語を記せ。

4 誰が何を取りによこしたのか。

5 誰のことか。

6 主語を記せ。

7 誰のことか。

8 指示内容を記せ。

9 指示内容を記せ。

10 誰のことか。

11 かいばおけで生まれた有名な人は誰か。

四 二重線部1～9の文法問題に答えよ。

- 1 品詞名 終止形 活用形 活用の種類
- 2 品詞名 終止形 活用形 文法的意味
- 3 結びの語 活用形 終止形
- 4 結びの語 活用形 終止形
- 5 品詞名 終止形 活用形 文法的意味
- 6 品詞分解 口語訳
- 7 品詞名 文法的意味
- 8 品詞名 終止形 活用形 文法的意味
- 9 品詞分解 口語訳

五 口語訳

1 今となつては昔のこと、下野の国□郡に住む人があつた。長年、夫婦として連れ添つて暮らしてきたのだが、どういう事情があつたのだろうか、夫はその妻を捨てて別の女を妻にして、すっかり心変わりしてしまった。夫はもとの妻の家にあつた道具類を何一つ残さず、新しい妻の家へすべて数え上げて運んで行った。もとの妻は「とてもつらい」とは思ったが、ただ男のするがままにさせて見ていたところ、塵ほどの物も残さず、みな持つて行つてしまった。わずかに残つた物といえば飼葉桶一つであつた。

2 さて、この夫の従者に、馬飼ひとして使つていた童がいた。名を真梶丸といった。夫はそれを使いとしてその桶を取りによこしたので、もとの妻はこの童に、「お前ももう二度と来ないのだろうね」と言うと、童は、「どうして参上しないことがありますか」と参上しますとも。お考えのないことを仰せられますね」と言つて、飼葉桶を持つて行こうとした。すると、もとの妻は、「お前の主人に申し上げたいと思うことがあるのだが、伝えてくれますか」と言う。童が、「確かにお伝えいたしましょう」と言つたので、もとの妻は、「手紙をさし上げて、よもや御覧くださるまい。ただ口でこう言つておくれ」と言つて、

ふねもこじ：馬船（飼葉桶）ももう戻つては来まい。真梶も二度と来ないだろう。船も舵もなくしたわたしは、今日からこの浮き世をどうして渡つて行つたらよいのだろうと歌をよんだ。

3 童はこれを聞いて帰つて行き、主人に、「このようにおっしゃいました」と言うと、男はこれを聞いて、強く胸を打たれたのであろうか、運び取つた道具類をみな運び返し、もとの妻の所に帰つて行つて、もとのように他の女には目もくれずむつまじく暮らすようになった。

そういうわけで、風雅の心ある者はこのようなことがあるのだ、と語り伝えているということだ。

構成

節	1	2	3
夫	浮気 みな持っていく 夫	童に馬船を取りに行かせる	歌に感動し、みな持って帰る。 ほかの女に目もくれえない。
妻	婦 馬船残す 歌 馬船も真梶丸ももう来ない だろう。どうして生きていった らよいか。		

主題 夫婦愛

文学史 今昔物語集

1 () 初期に編まれた三十一卷(うち三卷欠)の2 () 集。編者は未詳。天竺てんじく3 () 、震旦しんたん4 () 、本朝5 () の三部に分かれ、本朝の部では、貴族、武士のみでなく、庶民の生活がいきいきと書かれている。下野に関する説話は、このほかに、巻第十三に「下野の国の僧古き仙の洞ほらに住すること」、巻第十七に「下野の国の僧地藏の助けによりて死期を知れること」がある。

語釈

約一一〇〇の説話(世界最多)からなる。漢字仮名交じり(カタカナ)で書かれる。

「馬船」は、『今昔物語集』巻第三十第十話「下野国に住みて妻を去りて後返り棲むこと」による。

原文 『今昔物語集』 卷三十第十話 住下野国去妻後返棲語第十

今ハ昔、下野ノ国□□ノ郡ニ住ム者有ケリ。年来、夫妻相共ニ棲渡ケル程ニ、何如ナル事ガ有ケム、夫、其ノ妻ヲ去リテ、異妻ヲ儲テケレバ、夫心替リ畢テ、其ノ本ノ妻ノ許ニ有ケル物共ヲ、何ニモ彼ニモ残サズ、今ノ妻ノ許ヘ計(カゾ)ヘ運ビ持行ケルヲ、本ノ妻、「糸心疎シ」ト思ヒケレドモ、只男ノ為ルニハ任テ見ケルニ、塵許ノ物モ残サズ、皆持行畢テヌ。只纔ニ残タル物ハ、馬船一ツゾ有ケル。

其レヲ、此ノ夫ノ從者ニテ、馬飼ニテ仕ケル童有ケリ。名ヲバ真梶丸トゾ云ケル。其レヲ使ニテ、取ニ遺(オコセ)タリケレバ、本ノ妻、此ノ童ヲ見テ云ケル様、「今ハ世ニ来ジナ」ト。童云ク、「何如デカ参候ハザラム。心浅クモ仰セラルルカナ」トテ、馬船持行カムト為ルニ、本ノ妻、「己ガ主ニ申サムト思フ事ノ有ルヲバ申シテムヤ」ト云ヒケラバ、童、「糸吉ク申シ候ヒナム」ト云ヒケレバ、本ノ妻、「文ヲ奉ラムヲバ、更ニ世モ見給ハジ。只事ニ此ク申セ」トテ、

フネモヨジマカジモヨジナケフヨリハウキ世ノナカライカデワタラム

ト。

童、此レヲ聞テ、返リ行テ、主ニ、「此ナム」仰セラレツルハルハ。」ト。男、此レヲ聞テ、「哀レ也」トヤ思ヒケム、運ビ取タリケル物共ヲ、皆運ビ返シテ、本ノ妻ノ本ニ返行キ、本ノ如(ゴト)ク白地目(アカラメ)モ為デ棲ケル。

然レバ、情有アル心アル者、カクナムアリケル、トナム語り伝エタヘタルトヤ。

解答

2 馬船

『今昔物語集』卷第三十第十話

*登場人物を全て○で囲み、中心となる語を□で囲め。
語釈

1 今は昔、下野の国1□の郡に住む者1ありけり。年ごろ夫妻相ともに棲みわたりけるほどに、いかなることかありけむ、夫その妻を去りて、1異妻をまうけてければ、夫心替り、その本の妻のもとにありける物どもを、何も残さず、今の妻のもとへ計へ2運び持て行きけるを、本の妻「いと心うし」と思ひけれども、ただ、男のするにまかせて3見けるに、塵ばかりの物も残さず、皆持て行きはて2ぬ。ただわずかに残りたる物は、2馬船一つ3ぞありける。

2 それを、この夫の従者にて、馬飼にて仕へける童ありけり、名をば真梶丸と4ぞいひける。それを使にて、4「取りにおこせたりければ、本の妻5この童を見ていひけるやう、「今はよに6来じな」と。童いはく、「いかでか参り候は5ざらむ。心浅くも仰せらるるかな」とて、馬船持て行かむとするに、本の妻、「7おのれが主_にに申さむと思ふことのあるをば、申してむや」といひければ、童、「いとよく申し候ひなむ」といひければ、本の妻、「文を奉らむをば、さらに6よも見給はじ。ただことに8かく申せ」とて、

3 ふねもいじまかちもいじ7なけふよりはうき世のなかをいかでわたらむと。

3 童9これを聞きて返り行きて、10主に、「かくなむ仰せられ8つるは」。男これを聞きて、あはれなりと思ひけむ、運び取りたりける物どもを、皆運び返して、本の妻のもとに返り行き、もとのごとくあからめ9せで棲みける。

しかれば情ある心ある者、かくなむありける、となむ語り伝へたとや。

注

1□―郡名を後で調べて記入しようと空白にしておいた箇所が、そのままになって伝わってしまったと考えられる。

2馬船―馬の飼葉桶。

3ふねもこじ…―「ふね」に「馬船」と「船」を、「まかち」に「真梶丸」と船の「梶」を掛けた。また「うき」は「浮き」と「憂き」の掛詞。「船」「梶」「浮き」「渡る」は縁語。

一次の語の読みを現代仮名遣いで記せ。

- | | | | | | |
|---------|----------|-------|---------|--------|----------|
| 1 馬船 | 2 下野の国 | 3 郡 | 4 夫妻 | 5 夫 | 6 棲み |
| 7 妻 | 8 異妻 | 9 計へ | 10 馬飼 | 11 真梶丸 | 12 候は |
| 13 仰せ | 14 主 | 15 文 | 16 奉る | | |
| 一1うまふね | 2しもつけのくに | 3こおり | 4めおと | 5おうと | 6す |
| 7め | | | | | |
| 8こども | 9かぞ | 10うまい | 11まかじまる | 12そうら | 13おお15ふみ |
| 16たてまつる | | | | | |

二次の語の意味を辞書で調べよ。

- | | |
|----------|----------------|
| 1 馬船 | 1馬の餌を入れるかいばおけ。 |
| 2 馬飼 | 2馬の世話をする人。 |
| 3 年ごろ | 3長年。 |
| 4 異妻 | 4他の女 |
| 5 いと | 5とても |
| 6 心うし | 6つらい |
| 7 従者 | 7家来 |
| 8 童 | 8仕えている子供 |
| 9 心浅し | 9思慮が浅い |
| 10 仰す | 10「言う」の尊敬語 |
| 11 おのれ | 11おまえ |
| 12 文 | 12手紙 |
| 13 奉る | 13さしあげる |
| 14 あはれなり | 14かわい。愛しい。 |
| 15 あからめ | 151目をそらす ②浮気 |
| 16 情 | 151人情 ②風流な心 |
| 17 主 | 17主人 |

三 傍線部1～10の問いに答えよ。

- | | |
|------------------|--------|
| 1 どういうことか。 | 1浮気した |
| 2 妻はどうしたか。 | 2家に残る |
| 3 主語を記せ。 | 3本の妻 |
| 4 誰が何を取りによこしたのか。 | 4主が馬船を |
| 5 誰のことか。 | 5真梶丸 |
| 6 主語を記せ。 | 6真梶丸 |
| 7 誰のことか。 | 7夫 |
| 8 指示内容を記せ。 | 8歌 |

9 指示内容を記せ。 9 歌

10 誰のことか。 10 夫

11 かいばおけで生まれた有名な人は誰か。 イエス・キリスト

四 二重線部1〜9の文法問題に答えよ。

1 品詞名 終止形 活用形 活用の種類 1 動詞 ラ行変格活用 あり 連用形

2 品詞名 終止形 活用形 文法的意味 2 助動詞 ぬ 完了 終止形

3 結びの語 活用形 終止形 3 ける けり 連体形

4 結びの語 活用形 終止形 4 ける けり 連体形

5 品詞名 終止形 活用形 文法的意味 5 助動詞 ず 未然形 打消し

6 品詞分解 口語訳 6 よも 副詞 まさか 見 動詞 見る 連用形 給は 補

助動詞 尊敬 なさる じ 助動詞 打消し推量 終止形 まさかご覧なさるまい

7 品詞名 文法的意味 7 終助詞 禁止 な

8 品詞名 終止形 活用形 文法的意味 8 助動詞 つ 連体形 完了

9 品詞分解 口語訳

9 せ 動詞 サ行変格活用 す 未然形 で 接続助詞 打消し ないで しないで

五 口語訳

1 今となつては昔のこと、下野の国□郡に住む人があった。長年、夫婦として連れ添つて暮らしてきたのだが、どういう事情があったのだろうか、夫はその妻を捨てて別の女を妻にして、すっかり心変わりしてしまった。夫はもとの妻の家にあった道具類を何一つ残さず、新しい妻の家へすべて数え上げて運んで行った。もとの妻は「とてもつらい」とは思ったが、ただ男のするがままにさせて見ていたところ、塵ほどの物も残さず、みな持つて行つてしまった。わずかに残った物といえば飼葉桶一つであった。

2 さて、この夫の従者に、馬飼ひとして使つていた童がいた。名を真梶丸といった。夫はそれを使いとしてその桶を取りによこしたので、もとの妻はこの童に、「お前ももう二度と来ないのだろうね」と言うと、童は、「どうして参上しないことがありますか」と言上しますとも。お考えのないことを仰せられますね」と言つて、飼葉桶を持つて行こうとした。すると、もとの妻は、「お前の主人に申し上げたいと思うことがあるのだが、伝えてくれますか」と言う。童が、「確かにお伝えいたしましょう」と言つたので、もとの妻は、「手紙をさし上げても、よもや御覧くださるまい。ただ口でこう言っておくれ」と言つて、

ふねもこじ：馬船（飼葉桶）ももう戻つては来まい。真梶も二度と来ないだろう。船も舵

もなくしたわたしは、今日からこの浮き世をどうして渡つて行ったらよいのだろうと歌をよんだ。

3 童はこれを聞いて帰って行き、主人に、「このようにおっしゃいました」と言

男はこれを聞いて、強く胸を打たれたのであろうか、運び取った道具類をみな運び返し、もとの妻の所に帰って行つて、もとのように他の女には目もくれずむつまじく暮らすようになった。

そういうわけで、風雅の心ある者はこのようなことがあるのだ、と語り伝えているということだ。

構成

節	夫	妻
1	浮気 みな持つていく 夫	婦 馬船残す
2	童に馬船を取りに行かせる	歌 馬船も真梶丸ももう来ない だろう。どうして生きていったらよいか。
3	歌に感動し、みな持つて帰る。 ほかの女に目もくれえない。	

主題 夫婦愛

文学史 今昔物語集

1 () 初期に編まれた三十一卷(うち三卷欠)の2 () 集。編者は未詳。天竺てんじく3 () 、震旦しんたん4 () 、本朝5 () の三部に分かれ、本朝の部では、貴族、武士のみでなく、庶民の生活がいきいきと書かれている。下野に関する説話は、このほかに、卷第十三に「下野の国の僧古き仙の洞ほらに住すること」、卷第十七に「下野の国の僧地藏の助けによりて死期を知れること」がある。

約一一〇〇の説話(世界最多)からなる。漢字仮名交じり(カタカナ)で書かれる。「馬船」は、『今昔物語集』卷第三十第十話「下野国に住みて妻を去りて後返り棲むこと」による。

1 平安 2 説話 3 インド 4 中国 5 日本

3 那須の与一 平家物語

『平家物語』

『平家物語』卷十一

概要 時
登場人物

場所
事件

*登場人物を全て○で囲み、中心となる語を□で囲め。

あは さぬき

1段 さる程に、1 阿波、讃岐に平家をそむいて源氏を待ちける者ども、あそこの峰こ

ほら

にじつき

はうぐわん

この洞より十四五騎、二十騎、うちつれうちつれ参りければ、3判官ほどなく三百余騎に

ひきしりぞ

1ぞなりにける。「今日は日暮れ2ぬ。勝負を決すべからず」とて引退くところに、おき

じんじやうきう

たん

の方より4尋常に3かざつたる小舟一艘、みぎはへむいてこぎ寄せけり。磯へ5七八段

よいさま

ばかりになりしかば、舟を横様になす。1「あれはいかに」と4見る程に、舟のうちより

いつつきぬ

くれなゐ

はかま

よはひ十八九ばかりなる女房の、まことに優にうつくしきが、6 柳の五衣に紅の袴5着て、

くれない あふぎ

くが

7 みな紅の 扇の日いだしたるを、舟の8 せがいはさみたてて、陸へむいてぞ2まね

ごとうびやうゑさねもと

のたま

いたる。判官、後藤兵衛実基を召して、3「あれはいかに」と宣へば、「6射よとこそ

たいしやうぐん

けいせい

候めれ。ただし4大將軍、矢おもてに7すすんで9傾城を御覽ぜば、10手たれに8ねら

うて射おとせとのほかり事とおぼえ候。さも候へ、扇をば射させらるべうや候らん」と申

じん

のたまへ じやうず

しもつけのくに

す。「射つべき仁はみかたに誰かある」と宣は、「上手どもいくらも候なかに、下野国の

なすのたらうすけたか

よいちむねたか

こひやう

住人、那須太郎資高が子に与一宗孝こそ11小兵で候へども手さきで候へ」5「証拠はい

かに」と宣へば、「12かけ鳥なんどあらがうて、三つに二つは必ず射おとす者で候」。

「さらば召せ」とて6召されたり。

注

381 阿波―今の徳島県。 2 讃岐―今の香川県。 3 判官―ここでは源義経。 4 尋常に―立派に。 5 七八段―一段は約十一メートル。 6 柳の五衣―柳は襲かさねの色目。表白、裏青。五衣は表衣うわぎの下に同じ衣を五枚重ねて着ること。 7 みな紅の扇の日いだしたる―扇の前面を紅色で塗りつぶし、中央に金色の日の丸を描いたもの。 8 せがい―船の両舷に渡した板。 9 傾城―美人。 10 手たれ―熟練した者。弓の名人。 「手きき」と同意。 11 小兵―小柄。 12 かけ鳥―空を翔ける鳥を狙ってすばやく射ること。また、その鳥。

一次の語の読みを現代仮名遣いで記せ。

- | | | | | | | | | | |
|---|----|---|-----|---|----|---|----|----|------|
| 1 | 阿波 | 2 | 讃岐 | 3 | 判官 | 4 | 尋常 | 5 | 一艘 |
| 6 | 袴 | 7 | 宣へば | 8 | 傾城 | 9 | 下野 | 10 | 那須与一 |

二次の語の意味を辞書で調べよ。

- 1 そむく
- 2 優なり
- 3 船端
- 4 召す
- 5 のたまふ
- 6 矢おもて

三 傍線部 1～6 の問いに答えよ。

- 1 誰の言葉か。
- 2 主語を記せ。
- 3 誰の言葉か。
- 4 誰のことか。
- 5 具体的にどういうことを言っているか。
- 6 誰が誰をか。

四 二重線部 1～8 の文法問題に答えよ。

- | | | | | |
|---|-------|-----|-----|-------|
| 1 | 結びの語 | 活用形 | 終止形 | |
| 2 | 品詞名 | 終止形 | 活用形 | 文法的意味 |
| 3 | 音便の種類 | 元の形 | | |
| 4 | 品詞名 | 終止形 | 活用形 | 活用の種類 |
| 5 | 品詞名 | 終止形 | 活用形 | 活用の種類 |
| 6 | 品詞名 | 終止形 | 活用形 | 活用の種類 |
| 7 | 音便の種類 | 元の形 | | |
| 8 | 音便の種類 | 元の形 | | |

五 口語訳

1段 さて、阿波・讃岐で平家に背き、源氏の到着を待っていた者たちが、あそこの峰、ここの洞ほこらから十四、五騎、二十騎と、連れ立ち連れ立ちして参上してきたので、判官義経の軍勢はまもなく三百余騎となったのだった。「今日は日も暮れてしまふ。勝負を決することはできない」と言つて、引き退く際に、沖のほうから立派に飾った小舟が一艘、海岸に向けて漕ぎ寄せてきた。磯まで七、八段ぐらいになったところで舟を横向けにした。「あれはどういうことだろうか」と見るうちに、舟の中から年のころ十八、九ほどの女房で、たいへん優雅で美しい女性が、柳襲の五衣に紅の袴を着けて、紅一色の扇で金の日の丸を描いたのを棹の先につけ、舟のへり板にはさんで立てて、陸に向かって手招きをした。判官は、後藤兵衛実基をお呼びになり、「あれはどういうことか」とおっしゃると、「扇を射よということでございます。ただし、大將軍が矢面に進み出てあの美人をご覧になられたら、弓の上手に、ねらつて射落とせ、という計略だと思われまふ。しかし、それにしても、あの扇を誰かに射させるのがよろしいでしょう」と、申し上げた。判官は、「あれを射ることができる者が味方に誰かいるか」とおっしゃると、実基は「弓の名手はたくさんおりますが、中でも下野の国の住人で、那須太郎資高の子の与一宗高こそが、小兵ではございますが腕利きです」とお答えした。判官が「証拠はどうか」とおっしゃると、「飛ぶ鳥などを射るのを競つて、三羽に二羽は必ず射落とす者です」と申し上げた。判官は「それではその者と呼ば」と言つてお呼びになった。

にじふ

おのこ

あかぢにしき

2段 与一其頃そのころは二十ばかりの男1なり。13 かに、赤地の錦を2もつてお14

ひたたれ

もよぎをどし

よろひ

あしじろ たち

ほくび、15 はた袖16 いろへたる直垂に、17 萌黄威の鎧着て、18 足白の太刀をはき、19 切

かしらたか

きりふ

斑 の矢の、其日のいくさに射て少々のことたりけるを、頭高に負ひなし、うす切斑に鷹

かぶら

しげどい

かぶと

の羽はぎまぜたる20 ぬた目の鎧をぞさしそへたる、21 滋藤の弓脇にはさみ、甲をばぬぎ

たかひも

かしこま

22 高紐にかけ、判官の前に畏る。「いかに崇高、あの扇のまんなか射て、平家に見物せさ

せよかし」。与一畏つて申しけるは、「射おほせ候はむ事、不定に候。射損じ候ひなば、

おん

いちちやうつかまつ じん

ながきみかたの御3 きずにて候べし。1 24 「定仕らんずる仁に仰せ付けらるべうや候らん」

このはち

めい

と申す2 判官大きにいかつて、「鎌倉を3 たつて西国へおもむかん殿原は、義経が命をそ

しさい

これ

のたま

むくべからず。すこしも子細を存ぜん人は、25 とつく是より帰らるべし」と宣ひける。

うぢやう

与一3 かさねて辞せばあしかりなんとや思ひけん、「はづれんは知り候はず、26 御定で候

つかま

おん

まかりた

へば、仕つてこそ見候はめ」とて、御まへを罷立ち、黒き馬の4 ふとうたくましいに、小

しりがい

く

たづな

こぶさの27 鞆かけ、28 まろばやすつたる鞍おいて5 乗つたりける。弓とりなほし、手綱

つはものども

かいくり、みぎはへむいて4 あゆませければ、みかたの兵共5 うしろをはるかに見おくつ

て、「6 この若者一定仕り候ひぬと覚え候ふ」と申しければ、判官もたのもしげにぞ見給

ひける。

注

13 かし—濃い紺色。14 おほくび—前襟。15 はた袖—袖を広くするためつけた下袖。16 いろへたる—彩った。17 萌黄威の鎧—薄緑色の糸で鎧の札さねをつづつたもの。18 足白の太刀—さやの金具を銀で作った太刀。19 切斑の矢—白に数条の黒のまだらが入っている鷹の尾の羽ではいだ矢。20 ぬた目の鎧—鹿の角で作った鎧。鎧は矢の先につける中空球状の具。21 滋藤の弓—幹からを籐でぎっしりと巻いた弓。22 高紐—鎧の胴を通す紐。23 きず41 不名

誉。24一定—確実に。25とうく—すぐに。26御定—御命令。27鞆—鞍から頭、胸、尾にかけるひも。28まろぼや—ほや（海産動物）を丸く模様化して青貝で鞍の前輪、後輪に摺つてあるもの。

一次の語の読みを現代仮名遣いで記せ。

- | | | | | |
|------|-----|------|------|------|
| 1 錦 | 2 鎧 | 3 太刀 | 4 畏る | 5 義経 |
| 6 子細 | 7 鞆 | 8 鞍 | 9 手綱 | 10 兵 |

二次の語の意味を辞書で調べよ。

- 1 不定
- 2 子細
- 3 かさねて
- 4 みぎは

三 傍線部1～6の問いに答えよ。

- 1 どういうことをいつているか。
- 2 なぜ怒ったか。
- 3 どういうことをいつているか。
- 4 何を。
- 5 誰の後ろ姿か。
- 6 誰のことか。

四 二重線部1～5の文法問題に答えよ。

- | | | |
|---------|-----|-------|
| 1 品詞名 | 終止形 | 文法的意味 |
| 2 音便の種類 | 元の形 | |
| 3 音便の種類 | 元の形 | |
| 4 音便の種類 | 元の形 | |
| 5 音便の種類 | 元の形 | |

五 口語訳

2段 与一は、そのときは二十歳ばかりの男である。濃紺色の地に赤地の錦で、前襟と端袖を色どった直垂に、萌黄威の鎧を着けて、足金が銀作りの太刀を差し、切斑の矢で、その日の戦いで射て少々残っていたのを頭の上から高く出るほどに背負い、薄い切斑に鷹の羽を混ぜて作っためた目の鎬矢を添えてさしていた。重簾の弓を脇にはさみ、甲を脱いで高紐にかけ、判官の前にかしこまった。「どうだ宗高、あの扇のまん中を射て、平家に見物させてやれ」与一がかしこまって申し上げたことには、「射とげられるかどうか42分

りません。もし射そこないましたら、長く味方の御恥となりましょう。確実にや²⁸り遂げられる人に仰せつけられるのがようございましょう」と申し上げた。判官はたいそう怒って、「鎌倉を立て西国へ向かうとする殿方は、義経の命令に背いてはならない。少しでもあれこれ文句を言うような者は、とつとどこから帰られるべきだ」とおっしゃった。与一は、重ねて辞退したらきつとよくないことだろうと思つたのだろうか、「はずれるかどうかわかりませんが、ご命令でございませうのでいたしてみましよう」と言つて、御前を下がり、黒い馬で太くたくましいのに、小房のついた鞆をかけ、まろぼやの家紋を摺りこんだ鞍を置いて乗った。そして、弓を持ち直し、手綱を操りながら海へ向かつて歩ませたので、味方の武者たちは、与一の後姿をずっと見送つて、「この若者は、きっとやり遂げると思います」と申し上げたので、判官も頼もしそうにご覧になつていた。

3段

矢ごろすこし1とばかりければ、海へ一段ばかり2うちいれたれども、猶扇のあはひ七段

なほ

とりのこへ

ばかりはあるらむと1こそ見えたりけれ。ころは²⁹二月十八日の酉剋ばかりの事なるに、

をりふし北風はげしくて磯うつ浪も高かりけり。舟は2ゆりあげゆりすゑただよへば、3

くし

くが

扇も串にさだまらずひらめいたり。おきには平家舟を一面にならべて見物す。陸には源氏

くつばみをならべて4是を見る。いづれもいづれも晴ならずといふ事3ぞなき。与一目を

なむはちまんだいぼさつ わがくに しんめい につくわうのごんげん うつのみや なす

ふさいで、「南無八幡大菩薩、我国の神明、30日光権現、31宇都宮、32那須のゆぜん大明
だいまやうじん

神、願はくはあの扇のまんなか射させてたばせ給へ。これを射損ずる物ならば、弓きり折

おもて

り自害して、人に二たび面をむかふべからず。いま一度5本国へむかへんとおぼしめ

さば、この矢はづさせ給ふな」と、心のうちに祈念して、目を見ひらいたれば、風もすこ

かぶら

し吹きよわり、扇も射よげにぞなつたりける。与一鏑をとつてつがひ、よつぴいてひやう

こひやう

そくみつぶせ

ながなり

どはなつ。小兵といふぢやう³³十二束三伏、弓は強し、浦ひびく程長鳴して、あやまた

ず扇のかなめぎは一寸ばかりおいて、ひいふつとぞ射きつたる。鏑は海へ入りければ、扇
こくう

は空へぞあがりける。しばしは虚空にひらめきけるが、春風に一もみ二もみもま

せきじつ

れて、海へさつとぞ4散つたりける。夕日の5かかやいたるにみな紅の扇の日いだしたる
しらなみ

が、白浪のうへにただよひ、6うきぬ沈みぬゆられければ、7沖おきには、平家ふなばた

くが

えびら

をたたいて感じたり。陸には、源氏²⁹をたたたいてどよめきけり。(巻十一)
注

²⁹二月十八日の西剋ばかり――一一八五(元暦二)年二月十八日、午後六時頃。³⁰日光権現
―日光、二荒山神社。³¹宇都宮―宇都宮 二荒山神社。³²那須のゆぜん大明神―那須町湯
本の湯泉神社。³³十二束三伏―「束」は指四本並べた幅、「伏」は指一本の幅。³⁴箆―矢
を入れて背中に追う武器。

一 一次の語の読みを現代仮名遣いで記せ。

1 二月 2 西剋 3 串 4 陸 5 南無八幡大菩薩

6 日光権現 7 鏑 8 小兵 9 虚空 10 箆

二 次の語の意味を辞書で調べよ。

1 矢ごろ

2 をりふし

3 祈念

4 つがひ

5 自害

6 かなめ

三 傍線部1～6の問いに答えよ。

1 何かが。

2 何を何に。

3 具体的にどういうことか。

4 指示内容を記せ。

5 指示内容を記せ。

6 これと似たヨーロッパの話を書け。

- 四 二重線部1の文法問題に答えよ。
- | | | | |
|---|---------|--------|-----|
| 1 | 結びの語 | 活用形 | 終止形 |
| 2 | 口語訳せよ。 | | |
| 3 | 結びの語 | 活用形 | 終止形 |
| 4 | 音便の種類 | 元の形 | |
| 5 | 音便の種類 | 元の形 | |
| 6 | 品詞分解 | 口語訳せよ。 | |
| 7 | 修辭法を記せ。 | | |

五 口語訳

3段 矢を射るには少し遠かったので、与一は馬を海へ一段ばかり乗り入れたが、それでもまだ七段ほどあるだろうと見えた。時は二月十八日の午後六時ごろ、ちょうどその時、北風が激しく、磯に打ち寄せる波も高かった。舟は波で上下に揺れながら漂い、扇も棹の先に定まらずひらひらとしている。沖では平家が船を一面に並べて

見物する。陸では源氏が轡(くつわ)を並べてこれを見ている。どちらを見ても晴れがましくないはずがない。与一は目を閉じ、「南無八幡大菩薩、わが国の神々であらせられる日光権現、宇都宮大明神、那須の湯泉大明神、どうかあの扇のまん中を射させてください。もしこれを射損なうものなら、弓を切り折り自害いたし、人に再び顔を合わせることができません。いま一度郷国へ迎えてやろうとお思いでしたら、この矢をはずさせないでください」と心の中で祈り、目を開くと、風も少し弱まり、扇も射やすそうになった。与一は鎗矢を取ってつがえ、十分に引き絞ってひようと放った。小兵とはいえ、矢の長さは十二束三伏、弓は強く、鎗矢は浦一帯に響くほど長く鳴り渡り、誤ることなく扇の要の際から一寸ばかりぐらい上を、ひい、ふっと射切った。鎗矢が海へ入ると、扇は空に舞い上がった。しばらくは空でひらめいたが、春風に一もみ二もみもまれて、海へさっと散った。夕日が輝いている中、紅一色の扇に日の丸が描かれたのが白波の上に漂い、浮いたり沈んだりして揺られていたので、沖では平家が船ばたをたたいて感嘆した。陸では源氏が、箆をたたいてどよめいた。

構成

段	1	2	3
時・場所	日暮れ 屋島 浜辺		一一八五 年 二月十 八日 18時頃 風波
源氏 旗の色（ ）	三百四騎 「（ ）は明日。」 義経「あれは何だ。」 後藤「（ ）と言っている。」 義経「誰かいなか。」 後藤「（ ）」 義経「上手な（ ）」 後藤「（ ）を落とす。」	与一 十八歳 義経「（ ）を射よ」 与一「他の（ ）に。」 義経「（ ）に従え。」 （ ）へ帰れ。 選ばれたのは（ ）だ。」 与一「二度（ ）するのはいまずい。」	与一 海へ（ ） メートル入る。 （ ）に祈る。 与一（ ）を射る。
平氏 旗の色（ ）	小舟 美人 赤い（ ）を立てる		扇との距離（ ）メートル （弓道 近的28メートル 遠的60メートル） 扇の（ ）を射る。 扇（ ）へ落ちる。 夕日 （ ）をたたいてほめる。

主題 与一の弓の（ ）

文学史

平家物語 1 () の興隆から源平の戦いによって平家一門が2 () () するまでを描いた3 () () 物語。栄枯盛衰の悲劇を仏教的な4 () () 観でとらえている。文章は明快流麗な5 () () 文であり、6 () () よって語られた語り物文学である。7 () () 時代初期の成立。作者は、信濃前司行長(前下野守藤原行長か)が作って8 () () という盲目の法師に語らせたとする『徒然草』二百二十六段にみえる説が有力視されているが、幾度も加筆・改訂が行なわれて成立したと考えられる。なお、他に、栃木県にかかわりのある『平家物語』の章段としては巻四の「橋合戦」がある。

漢字仮名交じり文が完成した。琵琶法師が琵琶を伴奏しながら語った。これを平曲という。

語り物で読み・聞く作品であり、話しやすく聞きやすい文章になっている。

那須与一宗隆。那珂川の東岸、高館の豪族、那須太郎資隆の子。1 () () が奥州平泉から兄2 () () のもとに馳せ参ずる途中、下野国粟野宿(大田原市余瀬)に通りがかったとき、その3 () () となり、西国に赴いたという。時に十五歳。父や兄たちは皆4 () () 方について敗れたが、与一は屋島の戦いの恩賞として武蔵国本田庄ほか四か国に荘園を賜わり、5 () () 惣領となる。京都伏見の即成院において急死し、同寺に葬られた。没年二十四歳。大田原市福原の玄性寺に墓がある。「那須与一」の段は『平家物語』巻十一にある。31宇都宮―宇都宮、二荒山神社。32那須のゆぜん大明神―那須町湯本の温泉ゆぜん神社。33十二束三伏―「束」は指四本並べた幅、「伏」は指一本の幅。34箆―矢を入れて背中に負う武器。

参考 第35回 与一祭り 2015年8月 大田原市

第1回 与一弓道大会 2010年 大田原市

解答

那須の与一 平家物語

『平家物語』

概要 時

場所

登場人物

事件

概要 時 一一八五年二月

場所 屋島

登場人物 那須与一 源義経 事件 与一の命中

*登場人物を全て○で囲み、中心となる語を□で囲め。

あは さぬき

1段 さる程に、1 阿波、讃岐に平家をそむいて源氏を待ちける者ども、あそこの峰こ

ほら

にじつき

はうぐわん

この洞より十四五騎、二十騎、うちつれうちつれ参りければ、3判官ほどなく三百余騎に

ひきしりぞ

1ぞなりにける。「今日は日暮れ2ぬ。勝負を決すべからず」とて引退くところに、おき

じんじやうきう

たん

の方より4尋常に3かざつたる小舟一艘、みぎはへむいてこぎ寄せけり。磯へ5七八段

よいさま

ばかりになりしかば、舟を横様になす。1「あれはいかに」と4見る程に、舟のうちより

いつつきぬ

くれなゐ

はかま

よはひ十八九ばかりなる女房の、まことに優にうつくしきが、6 柳の五衣に紅の袴5着て、

くれなゐ あふぎ

くが

7 みな紅の 扇の日いだしたるを、舟の8 せがいはさみたてて、陸へむいてぞ2まね

ごとうびやうゑさねもと

のたま

いたる。判官、後藤兵衛実基を召して、3「あれはいかに」と宣へば、「6射よとこそ

たいしやうぐん

けいせい

候めれ。ただし4大將軍、矢おもてに7すすんで9傾城を御覽ぜば、10手たれに8ねら

うて射おとせとのほかり事とおぼえ候。さも候へ、扇をば射させらるべうや候らん」と申

じん

のたまへ じやうず

しもつけのくに

す。「射つべき仁はみかたに誰かある」と宣は、「上手どもいくらも候なかに、下野国の

なすのたらうすけたか

よいちむねたか

こひやう

住人、那須太郎資高が子に与一宗孝こそ11小兵で候へども手さきで候へ」5「証拠はい

かに」と宣へば、「12かけ鳥なんどあらがうて、三つに二つは必ず射おとす者で候」。

「さらば召せ」とて6召されたり。

注

301 阿波—今の徳島県。 2 讃岐—今の香川県。 3 判官—ここでは源義経。 4 尋常に—立派に。 5 七八段—一段は約十一メートル。 6 柳の五衣—柳は襲かさねの色目。表白、裏青。五衣は表衣うわぎの下に同じ衣を五枚重ねて着ること。 7 みな紅の扇の日いだしたる—扇の前面を紅色で塗りつぶし、中央に金色の日の丸を描いたもの。 8 せがい—船の両舷に渡した板。 9 傾城—美人。10 手たれ—熟練した者。弓の名人。「手きき」と同意。11 小兵—小柄。12 かけ鳥—空を翔ける鳥を狙ってすばやく射ること。また、その鳥。

一次の語の読みを現代仮名遣いで記せ。

- | | | | | |
|---------|---------|----------|-----------|-------------|
| 1 阿波 | 2 讃岐 | 3 判官 | 4 尋常 | 5 一艘 |
| 6 袴 | 7 宣へば | 8 傾城 | 9 下野 | 10 那須与一 |
| 11 1あわ | 12 2さぬき | 13 3ほうがん | 14 4じんじょう | 15 5いつそう |
| 16 6はかま | 17 7のたま | 18 8けいせい | 19 9しもつけ | 20 10なすのよいち |

二次の語の意味を辞書で調べよ。

- | | |
|--------|----------------|
| 1 そむく | 背を向ける。 |
| 2 優なり | 優雅だ。 |
| 3 船端 | 船の側面。 |
| 4 召す | お呼びになる。「呼ぶ」の尊敬 |
| 5 のたまふ | おっしゃる。「言ふ」の尊敬 |
| 6 矢おもて | 矢の飛んでくる正面。 |

三 傍線部1～6の問いに答えよ。

- | |
|-------------------------------|
| 1 誰の言葉か。源氏の兵士 |
| 2 主語を記せ。女 |
| 3 誰の言葉か。義経 |
| 4 誰のことか。義経 |
| 5 具体的にどういうことを言っているか。名手としての証明。 |
| 6 誰が誰をか。義経が与一を。 |

四 二重線部1～8の文法問題に答えよ。

- | | | | | | |
|---------|-----|-----|-------|-----|-------|
| 1 結びの語 | ける | 活用形 | 連体形 | 終止形 | けり |
| 2 品詞名 | 助動詞 | 終止形 | ぬ | 活用形 | 文法的意味 |
| 3 音便の種類 | 促音便 | 元の形 | かざりたる | | 完了 |
| 4 品詞名 | 動詞 | 終止形 | 見る | 活用形 | 連体形 |
| 5 品詞名 | 動詞 | 終止形 | 着る | 活用形 | 連用形 |
| 6 品詞名 | 動詞 | 終止形 | 射る | 活用形 | 命令系 |
| 7 音便の種類 | 撥音便 | 元の形 | すすみて | | 活用形 |
| 8 音便の種類 | ウ音便 | 元の形 | ねらひて | | 活用形 |

五 口語訳

1段 さて、阿波・讃岐で平家に背き、源氏の到着を待っていた者たちが、あそこの峰、ここの洞ほこらから十四、五騎、二十騎と、連れ立ち連れ立ちして参上してきたので、判官義経の軍勢はまもなく三百余騎となったのだった。「今日は日も暮れてしまふ。勝負を決することはできない」と言つて、引き退く際に、沖のほうから立派に飾った小舟が一艘、海岸に向けて漕ぎ寄せてきた。磯まで七、八段ぐらいになったところで舟を横向けにした。「あれはどういうことだろうか」と見るうちに、舟の中から年のころ十八、九ほどの女房で、たいへん優雅で美しい女性が、柳襲の五衣に紅の袴を着けて、紅一色の扇で金の日の丸を描いたのを棹の先につけ、舟のへり板にはさんで立てて、陸に向かって手招きをした。判官は、後藤兵衛実基をお呼びになり、「あれはどういうことか」とおっしゃると、「扇を射よということでございます。ただし、大將軍が矢面に進み出てあの美人をご覧になられたら、弓の上手に、ねらつて射落とせ、という計略だと思われます。しかし、それにしましても、あの扇を誰かに射させるのがよろしいでしょう」と、申し上げた。判官は、「あれを射ることができる者が味方に誰かいるか」とおっしゃると、実基は「弓の名手はたくさんおりますが、中でも下野の国の住人で、那須太郎資高の子の与一宗高こそが、小兵ではございますが腕利きです」とお答えした。判官が「証拠はどうか」とおっしゃると、「飛ぶ鳥などを射るのを競つて、三羽に二羽は必ず射落とす者です」と申し上げた。判官は「それではその者と呼ばへ」と言つてお呼びになった。

にじふ

おのこ

あかぢにしき

2段 与一其頃そのころは二十ばかりの男1なり。13 かに、赤地の錦を2もつてお14

ひたたれ

もよぎをどし

よろひ

あしじろ たち

ほくび、15 はた袖16 いろへたる直垂に、17 萌黄威の鎧着て、18 足白の太刀をはき、19 切

かしらだか

きりふ

斑 の矢の、其日のいくさに射て少々のことたりけるを、頭高に負ひなし、うす切斑に鷹

かぶら

しげどい

かぶと

の羽はぎまぜたる20 ぬた目の鎧をぞさしそへたる、21 滋藤の弓脇にはさみ、甲をばぬぎ

たかひも

かしこま

22 高紐にかけ、判官の前に畏る。「いかに崇高、あの扇のまんなか射て、平家に見物せさ

せよかし」。与一畏つて申しけるは、「射おほせ候はむ事、不定に候。射損じ候ひなば、

おん

いちちやうつかまつ じん

ながきみかたの御3 きずにて候べし。1 24 「定仕らんずる仁に仰せ付けらるべうや候らん」

このはち

めい

と申す2 判官大きにいかつて、「鎌倉を3 たつて西国へおもむかん殿原は、義経が命をそ

しさい

これ

のたま

むくべからず。すこしも子細を存ぜん人は、25 とうく是より帰らるべし」と宣ひける。

うぢやう

与一3 かさねて辞せばあしかりなんとや思ひけん、「はづれんは知り候はず、26 御定で候

つかま

おん

まかりた

へば、仕つてこそ見候はめ」とて、御まへを罷立ち、黒き馬の4 ふとうたくましいに、小

しりがい

く

たづな

こぶさの27 鞆かけ、28 まろばやすつたる鞍おいて5 乗つたりける。弓とりなほし、手綱

つはものども

かいくり、みぎはへむいて4 あゆませければ、みかたの兵共5 うしろをはるかに見おくつ

て、「6 この若者一定仕り候ひぬと覚え候ふ」と申しければ、判官もたのもしげにぞ見給ひける。

注

13 かし—濃い紺色。14 おほくび—前襟。15 はた袖—袖を広くするためつけた下袖。16 いろへたる—彩った。17 萌黄威の鎧—薄緑色の糸で鎧の札さねをつづつたもの。18 足白の太刀—さやの金具を銀で作った太刀。19 切斑の矢—白に数条の黒のまだらが入っている鷹の尾の羽ではいだ矢。20 ぬた目の鎧—鹿の角で作った鎧。鎧は矢の先につける中空球状の具。21 滋藤の弓—幹からを藤でぎっしりと巻いた弓。22 高紐—鎧の胴を通す紐。23 きず 51 不名

誉。24一定—確実に。25とうく—すぐに。26御定—御命令。27鞆—鞍から頭、胸、尾にかけるひも。28まろぼや—ほや（海産動物）を丸く模様化して青貝で鞍の前輪、後輪に摺つてあるもの。

一次の語の読みを現代仮名遣いで記せ。

- | | | | | |
|--------|-------|-------|---------|--------|
| 1 錦 | 2 鎧 | 3 太刀 | 4 畏る | 5 義経 |
| 6 子細 | 7 鞆 | 8 鞍 | 9 手綱 | 10 兵 |
| 11 にしき | 2 よろい | 3 たち | 4 かしこまる | 5 よしつね |
| 7 しりがい | 8 くら | 9 たづな | 10 つわもの | 6 しさい |

二次の語の意味を辞書で調べよ。

- 1 不定 不確かであてにならないこと。
- 2 子細 1 くわしいわけ。 2 異議。
- 3 かさねて 繰り返し。
- 4 みぎは 水ぎわ。
- 三 傍線部1～6の問いに答えよ。
- 1 どういうことをいつているか。確実に当てられる人に言ってくれ。
- 2 なぜ怒ったか。命令を断ったから。
- 3 どういうことをいつているか。二度断ったらよくない。
- 4 何を。馬。
- 5 誰の後ろ姿か。与一。
- 6 誰のことか。与一。

四 二重線部1～5の文法問題に答えよ。

- | | | | | | | | |
|---------|-----|-----|--------|----------|-----|-------|----|
| 1 品詞名 | 助動詞 | 終止形 | なり | 活用形 | 終止形 | 文法的意味 | 断定 |
| 2 音便の種類 | 促音便 | 元の形 | もちて | | | | |
| 3 音便の種類 | 促音便 | 元の形 | たちて | | | | |
| 4 音便の種類 | ウ音便 | イ音便 | 元の形 | ふとくたくましき | | | |
| 5 音便の種類 | 促音便 | 元の形 | 乗りたりけり | | | | |

五 口語訳

2 与一は、そのときは二十歳ばかりの男である。濃紺色の地に赤地の錦で、前襟と端袖を色どった直垂に、萌黄威の鎧を着けて、足金が銀作りの太刀を差し、切斑の矢で、その日の戦いで射て少々残っていたのを頭の上から高く出るほどに背負い、薄い切斑に鷹の羽を混せて作っためた目の鎬矢を添えてさしていた。重藤の弓を脇にはさみ、甲を脱いで高紐にかけ、判官の前にかしこまった。「どうだ宗高、あの扇のまん中を射て、平家に見物させてやれ」与一がかしこまって申し上げたことには、「射とげられるかどうかは分かり

ません。もし射そこないましたら、長く味方の御恥となりましょう。確実にや29り遂げられる人に仰せつけられるのがようございましょう」と申し上げた。判官はたいそう怒って、「鎌倉を立て西国へ向かうとする殿方は、義経の命令に背いてはならない。少しで

もあれこれ文句を言うような者は、とつとどこから帰られるべきだ」とおっしゃった。与一は、重ねて辞退したらきつとよくないことだろうと思つたのだろうか、「はずれるかどうかわかりませんが、ご命令でございますのでいたしてみましよう」と言つて、御前を下がり、黒い馬で太くたくましいのに、小房のついた鞆をかけ、まろぼやの家紋を摺りこんだ鞍を置いて乗った。そして、弓を持ち直し、手綱を操りながら海へ向かつて歩ませたので、味方の武者たちは、与一の後姿をずっと見送つて、「この若者は、きつとやり遂げると思います」と申し上げたので、判官も頼もしそうにご覧になつていた。

3段

なほ

矢ごろすこし1とほかりければ、海へ一段ばかり2うちいれたれども、猶扇のあはひ七段

とりのこく

ばかりはあるらむと1こそ見えたりけれ。ころは29二月十八日の酉剋ばかりの事なるに、

をりふし北風はげしくて磯うつ浪も高かりけり。舟は2ゆりあげゆりすゑただよへば、3

くし

くが

扇も串にさだまらずひらめいたり。おきには平家舟を一面にならべて見物す。陸には源氏

くつばみをならべて4是を見る。いづれもいづれも晴ならずといふ事3ぞなき。与一目を
なむはちまんだいぼさつ わがくに しんめい につくわうのごんげん うつのみや なす

ふさいで、「南無八幡大菩薩、我国の神明、30日光権現、31宇都宮、32那須のゆぜん大明
だいみやうじん

神、願はくはあの扇のまんなか射させてたばせ給へ。これを射損ずる物ならば、弓きり折

おもて

り自害して、人に二たび面をむかふべからず。いま一度5本国へむかへんとおぼしめ

さば、この矢はづさせ給ふな」と、心のうちに祈念して、目を見ひらいたれば、風もすこ

かぶら

し吹きよわり、扇も射よげにぞなつたりける。与一鏑をとつてつがひ、よつぴいてひやう

こひやう

そくみつぶせ

ながなり

どはなつ。小兵といふぢやう33十二束三伏、弓は強し、浦ひびく程長鳴して、あやまた

53また

ず扇のかなめぎは一寸ばかりおいて、ひいふつとぞ射きつたる。鏑は海へ入りければ、扇
こくう

は空へぞあがりける。しばしは虚空にひらめきけるが、春風に一もみ二もみもま

せきじつ

れて、海へさつとぞ4散つたりける。夕日の5かかやいたるにみな紅の扇の日いだしたる
しらなみ

が、白浪のうへにただよひ、6うきぬ沈みぬゆられければ、7沖には、平家ふなばた

くが

えびら

をたたいて感じたり。陸には、源氏³²箆をたたいてどよめきけり。(巻十一)

注

³²二月十八日の西剋ばかり――一一八五(元暦二)年二月十八日、午後六時頃。³³日光権現――日光、二荒山神社。³⁴宇都宮――宇都宮 二荒山神社。³⁵那須のゆぜん大明神――那須町湯本の湯泉神社。³⁶十二束三伏――「束」は指四本並べた幅、「伏」は指一本の幅。³⁷箆――矢を入れて背中に追う武器。

一次の語の読みを現代仮名遣いで記せ。

1 二月	2 西剋	3 串	4 陸	5 南無八幡大菩薩
6 日光権現	7 鏑	8 小兵	9 虚空	10 箆
1 きざらぎ	2 とりんこく	3 くし	4 くが	5 なむはちまんだいばさつ
6 につこうごんげん	7 かぶら	8 こひよう	9 こくう	10 えびら

二次の語の意味を辞書で調べよ。

1 矢ごろ 矢を射るのにちょうどよい距離。

2 をりふし ちょうどそのとき

3 祈念 神仏に祈ること。

4 つがひ 矢を弓につがえる。

5 自害 自殺。

6 かなめ 扇の骨をまとめるために末端の近くに穴をあけて入れる釘。 要点。

三 傍線部1～6の問いに答えよ。

1 何が。 的

2 何を何に。 馬を海に。

3 具体的にどういうことか。 扇も動いて。

4 指示内容を記せ。 与一

5 指示内容を記せ。 下野

6 これと似たヨーロッパの話を書せ。 ロビン・フット

四 二重線部1) の文法問題に答えよ。

- 1 結びの語 けれ 活用形 已然形 終止形 けり
- 2 口語訳せよ。船は(波が)ゆすつて上げたりゆすつて置いたり
- 3 結びの語 なき 活用形 連体形 終止形 なし
- 4 音便の種類 促音便 元の形 散りたり
- 5 音便の種類 イ音便 元の形 かがやきたる
- 6 品詞分解、口語訳せよ。うき カ四動 うく 連用 ぬ 助動詞 完了 ぬ 止
沈み 動 マ四用 ぬ 助動詞 完了 ぬ ゆられ ラ四動ゆる用
けれ 助動詞 過去 けり ば 接助 原因理由 浮いたり沈んだりして揺れていた

7 修辭法を記せ。 対句

五 口語訳

3 矢を射るには少し遠かったので、与一は馬を海へ一段ばかり乗り入れたが、それでもまだ七段ほどあるだろうと見えた。時は二月十八日の午後六時ごろ、ちょうどその時、北風が激しく、磯に打ち寄せる波も高かった。舟は波で上下に揺れながら漂い、扇も棹の先に定まらずひらひらとしている。沖では平家が船を一面に並べて

見物する。陸では源氏が轡(くつわ)を並べてこれを見ている。どちらを見ても晴れがましくないはずがない。与一は目を閉じ、「南無八幡大菩薩、わが国の神々であらせられる日光権現、宇都宮大明神、那須の湯泉大明神、どうかあの扇のまん中を射させてください。もしこれを射損なうものなら、弓を切り折り自害いたし、人に再び顔を合わせることもできません。いま一度郷国へ迎えてやろうとお思いでしたら、この矢をはずさないでください」と心の中で祈り、目を開くと、風も少し弱まり、扇も射やすそうになった。与一は鎗矢を取ってつがえ、十分に引き絞ってひようと放った。小兵とはいえ、矢の長さは十二束三伏、弓は強く、鎗矢は浦一帯に響くほど長く鳴り渡り、誤ることなく扇の要の際から一寸ばかりぐらい上を、ひい、ふっと射切った。鎗矢が海へ入ると、扇は空に舞い上がった。しばらくは空でひらめいたが、春風に一もみ二もみもまれて、海へさつと散った。夕日が輝いている中、紅一色の扇に日の丸が描かれたのが白波の上に漂い、浮いたり沈んだりして揺られていたので、沖では平家が船ばたをたたいて感嘆した。陸では源氏が、籠をたたいてどよめいた。

段	1	2	3
時・場所	日暮れ 屋島 浜辺		一一八五 年 二月十八 日 18時頃 風波
源氏 旗の色（白）	三百四騎 「（勝負）は明日。」 義経「あれは何だ。」 後藤「（射よ）と言っている。」 義経「誰かいなか。」 後藤「（与一）」 義経「上手な（証拠）」 後藤「（飛ぶ鳥）を三回のうち二回落とす。」	与一 十八歳 義経「（扇）の真ん中を射よ」 与一「他の（人）に。」 義経「（命令）に従え。（鎌倉）へ帰れ。選ばれたのは（名譽）だ。」 与一「二度（辞退）するのはいまずい。」	与一 海へ（10、8）メートル入る。 （神）に祈る。 与一（鏑）を射る。 命中 （箆）をたたいてほめる
平氏 旗の色（赤）	小舟 美人 赤い（扇）を立てる		扇との距離（75、6）メートル （弓道 近的28メートル 遠的60メートル） 扇の（要）を射る。 扇（海）へ落ちる。 夕日 （船端）をたたいてほめる。

文学史

平家物語 1 () の興隆から源平の戦いによって平家一門が2 () () するまでを描いた3 () () 物語。栄枯盛衰の悲劇を仏教的な4 () () 観でとらえている。文章は明快流麗な5 () () 文であり、6 () () よって語られた語り物文学である。7 () () 時代初期の成立。作者は、信濃前司行長(前下野守藤原行長か)が作って8 () () という盲目の法師に語らせたとする『徒然草』二百二十六段にみえる説が有力視されているが、幾度も加筆・改訂が行なわれて成立したと考えられる。なお、他に、栃木県にかかわりのある『平家物語』の章段としては巻四の「橋合戦」がある。

漢字仮名交じり文が完成した。琵琶法師が琵琶を伴奏しながら語った。これを平曲という。

語り物で読み・聞く作品であり、話しやすく聞きやすい文章になっている。

那須与一宗隆。那珂川の東岸、高館の豪族、那須太郎資隆の子。1 () () が奥州平泉から兄2 () () のもとに馳せ参ずる途中、下野国栗野宿(大田原市余瀬)に通りがかったとき、その3 () () となり、西国に赴いたという。時に十五歳。父や兄たちは皆4 () () 方について敗れたが、与一は屋島の戦いの恩賞として武蔵国本田庄ほか四か国に荘園を賜わり、5 () () 惣領となる。京都伏見の即成院において急死し、同寺に葬られた。没年二十四歳。大田原市福原の玄性寺に墓がある。「那須与一」の段は『平家物語』巻十一にある。31宇都宮―宇都宮、二荒山神社。32那須のゆぜん大明神―那須町湯本の温泉ゆぜん神社。33十二束三伏―「束」は指四本並べた幅、「伏」は指一本の幅。34箆―矢を入れて背中に負う武具。

参考 第35回 与一祭り 2015年8月 大田原市

第1回 与一弓道大会 2010年 大田原市

文学史解答

平家物語 1平家 2滅亡 3軍記 4無常 5和漢混淆文 6琵琶法師 7鎌倉 8生
仏

那須与一 1源義経 2源頼朝 3家来 4平家 5那須

4 足利の染物

『徒然草』 第二百十六段

*登場人物を全て○で囲み、中心となる語を□で囲め。

さいみやうじのにふだう

つるがおか

あしかがのさまのにふだう

1 最明寺入道

2 鶴岡の社参のついでに、

3 足利左馬入道

つか

こん

いっ

のもとへまづ使を遣はして1立ちいら1れたりけるに2あるじまうけ2れたりける様一
献に

4 うちあはび、二献にえび、三献に5 かいもちひにてやみぬ。その座には、3亭主夫婦、
りうべんそうじやう としこと そめもの

6 隆弁僧正4あるじ方の人にて座せ3られけり。さてア「年毎に給は4る足利の染物心も
とな

く候ふ」と5申さ6ればイ「用意し7候ふ」とて色々の染物7 三十、5前にて女房ど
もに

こそで てう

小袖に調ぜさせて、後に6つかはさ8れけり。

その時見た9る人の、ちかくまで10侍り11しが、語り侍りしなり。

(第二百十

六段)

(注) 1 最明寺入道―北条時頼。鎌倉幕府第五代の執権。 2 鶴岡―鎌倉の鶴岡八幡宮。 3
足利左馬入道―足利義氏。 4 うちあはび―あわびの肉を薄く切り、打ちのばして干したも
の。祝いの席の酒のさかなに多く用いられる。 5 かいもちひ―ぼたもち。そばがきとも言
われる。 6 隆弁僧正―当時の鶴岡八幡宮の別当。 7 三十―三十疋。一疋は二反。(二反 成
人一人前の衣料に相当する分量。 3 8センチ×11メートル)

語釈

一 次の語の読みを現代仮名遣いで記せ。

1 最明寺入道	2 鶴岡	3 社参	4 足利左馬入道	5 遣はして
6 一献	7 亭主夫婦	8 隆弁僧正	9 年毎	10 給はる
11 染物	12 女房	13 小袖	14 調ぜ	15 侍り

- 二 次の語の意味を辞書で調べよ。
- 1 遣はす
- 2 一献
- 3 あるじ
- 4 心もとなく
- 5 調ず
- 6 つかはす
- 三 傍線部1と6とア・イの問いに答えよ。
- 1 どこに。
- 2 主語を記せ。
- 3 誰のことか。
- 4 誰のことか。
- 5 誰の前か。
- 6 どこへ何を。
- ア、イ それぞれ誰の言葉か。

四	二重線部1と11の文法問題に答えよ。		
1	品詞名	終止形	活用形 文法的意味
2	品詞名	終止形	活用形 文法的意味
3	品詞名	終止形	活用形 文法的意味
4	品詞名	終止形	活用形 文法的意味
5	敬語の種類	誰を敬うか。	活用形 文法的意味
6	品詞名	終止形	活用形 文法的意味
7	敬語の種類	誰を敬うか。	
8	品詞名	終止形	活用形 文法的意味
9	品詞名	終止形	活用形 文法的意味
10	敬語の種類	誰を敬うか。	
11	品詞名	終止形	活用形 文法的意味

五 口語訳

最明寺入道が、鶴岡八幡宮に参拝のついでに、足利左馬入道のもとへ、まずお使いをやつた上で、お立ち寄りになったときに、足利入道がおもてなしをなさった次第は、一献のお膳に打鮑あわび、二献のお膳に海老、三献のお膳にかいもちいで終わった。その席には、主人夫妻と隆弁僧正が主人側の人として、お座りになっていた。もてなしの後、最明寺入

道が「毎年いただく足利の染め織物が待ち遠しいことです」と足利入道に申し上げなされたところ、「用意してございます」と言つて、様々な染物を三十疋びき、最明寺入道の前で、女房達に小袖に仕立てさせて、後からお届けになったという。そのときにこの様子を見ていた人で、近ごろまで存命していました人が語ったことです。

構成

北条時頼1（ ）	足利義氏 妻2（ ） 隆弁僧正 3（ ）
4（ ）する ↓	5（ ）する。三献
「足利の6（ ）がほしい。」	「7（ ）してある。」
	女房ども 8（ ）仕立てる。
	↑贈った。

主題 簡素で同族的同士のな9（ ）の結びつき

文学史

徒然草 ジャンル1（ ）2（ ）年ごろの成立。序段と3（ ）の本文からなる。内容に即して和文体と和漢混淆文とを使い分けている。死・人生・自然への深い省察がうかがえる。4（ ）を描いている。

うらべかねよし

兼好法師一二八三（弘安六）年ごろー一三五〇（正平五）年ごろ俗名は卜部兼好。在俗時代、後二条天皇即位の時に天皇の側近である六位の藏人として出仕し、有職故実の知識を得た。天皇崩御後、三十歳位で官を辞して出家、5（ ）生活を送る。6（ ）としてもよく知られ、二条為世に和歌を学び、和歌四天王と称された。

解答

足利の染物

徒然草 第二百十六段

さいみやうじのにふだう

つるがおか

あしかがのさまのにふだう

1 最明寺入道

2 鶴岡の社参のついでに、 3 足利左馬入道

つか

いっ

こん

のもとへまづ使を遣はして1立ちいら1れたりけるに2あるじまうけ2られたりける様
 一 献に

4 うちあはび、二献にえび、三献に5 かいもちひにてやみぬ。その座には、3亭主夫婦、

りうべんそうじやう

としこと

そのもの

6 隆弁僧正 4 あるじ方の人にて座せ3られけり。さてア「年毎に給は4る足利の染物心も
 とな

く候ふ」と5申さ6ればイ「用意し7候ふ」とて色々の染物7 三十、5前にて女房ど
 もに

こそで てう

小袖に調ぜさせて、後に6つかはさ8れけり。

その時見た9る人の、ちかくまで10侍り11しが、語り侍りしなり。

(第二百十

六段)

(注) 1 最明寺入道―北条時頼。鎌倉幕府第五代の執権。 2 鶴岡―鎌倉の鶴岡八幡宮。 3
 足利左馬入道―足利義氏。 4 うちあはび―あわびの肉を薄く切り、打ちのぼして干したも
 の。祝いの席の酒のさかなに多く用いられる。 5 かいもちひ―ぼたもち。そばがきとも言
 われる。 6 隆弁僧正―当時の鶴岡八幡宮の別当。 7 三十一三十疋。一疋は二反。(二反 成
 人一人前の衣料に相当する分量。 38センチ×11メートル)

一次の語の読みを現代仮名遣いで記せ。

さいみやうじのにゆうじやう	つるがおか	しゃさん	あしかがのさまのにゆうじやう	つか
1 最明寺入道	2 鶴岡	3 社参	4 足利左馬入道	5 遣はして
いっこん	ていしゅふ	りゅうべんそうじやう	としこと	たま
6 一献	7 亭主夫婦	8 隆弁僧正	9 年毎	10 給はる
そのもの	にようぼう	こそづ	ちやう	はべ
1 1 染物	1 2 女房	1 3 小袖	1 4 調ぜ	1 5 侍り

二 次の語の意味を辞書で調べよ。

1 遣はす 派遣なさる。 「遣る」の尊敬。

2 一献 酒席ではじめに出してすすめる酒と料理。 「献」酒杯を進める。

3 あるじ 主人として客をもてなすこと。

4 心もとなく 待ち遠しい。

5 調ず こしらえる。

6 つかはす お与えになる。 「送る」「与ふ」の尊敬。

三 傍線部1～6とア・イの問いに答えよ。

1 どこに。 足利義氏の屋敷。

2 主語を記せ。 足利義氏。

3 誰のことか。 足利義氏夫妻。

4 誰のことか。 足利義氏。

5 誰の前か。 北条時頼。

6 どこへ何を。 北条時頼の屋敷へ染め物を。

ア、 イ それぞれ誰の言葉か。 ア 北条時頼 イ 足利義氏

四 二重線部1～11の文法問題に答えよ。

1 品詞名 助動詞 終止形 る 活用形 連用形 文法的意味 尊敬

2 品詞名 助動詞 終止形 るる 活用形 連用形 文法的意味 尊敬

3 品詞名 助動詞 終止形 るる 活用形 連用形 文法的意味 尊敬

4 品詞名 助動詞 終止形 り 活用形 連体形 文法的意味 完了

5 敬語の種類 謙讓 誰を敬うか。 足利義氏

6 品詞名 助動詞 終止形 る 活用形 連用形 文法的意味 尊敬

7 敬語の種類 丁寧 誰を敬うか。 北条時頼

8 品詞名 助動詞 終止形 る 活用形 連用形 文法的意味 尊敬

9 品詞名 助動詞 終止形 り 活用形 連体形 文法的意味 完了

10 敬語の種類 丁寧 誰を敬うか。 読者

11 品詞名 助動詞 終止形 き 活用形 連体形 文法的意味 過去

五 口語訳

最明寺入道が、鶴岡八幡宮に参拝のついでに、足利左馬入道のもとへ、まずお使いをやった上で、お立ち寄りになったときに、足利入道がおもてなしをなさった次第は、一献のお膳に打鮑あわび、二献のお膳に海老、三献のお膳にかいもちいで終わった。その席は、

主人夫妻と隆弁僧正が主人側の人として、お座りになっていた。もてなしの後、最明寺入道が「毎年いただく足利の染め織物が待ち遠しいことです」と足利入道に申し上げなされたところ、「用意してございます」と言って、様々な染物を三十疋びき、最明寺入道の前で、女房達に小袖に仕立てさせて、後からお届けになったという。そのときにこの様子を見ていた人で、近ごろまで存命していました人が語ったことです。

構成

北条時頼1（客）	足利義氏 妻2（主） 隆弁僧正 3（仲介）
↓ 4（訪問）する 「足利の6（染め物）がほしい。」	5（饗応）する。三献 「7（用意）してある。」 女房ども 8（三十反）仕立てる。 ↑贈った。

主題 簡素で同族の同士のな9（武家）の結びつき

文学史

徒然草 ジャンル1（随筆）2（一三三一）年ごろの成立。序段と3（二百四十三段）の本文からなる。内容に即して和文体と和漢混淆文とを使い分けている。死・人生・自然への深い省察がうかがえる。4（人間）を描いている。

うらべかねよし

兼好法師一二八三（弘安六）年ごろー一三五〇（正平五）年ごろ俗名は卜部兼好。在俗時代、後二条天皇即位の時に天皇の側近である六位の藏人として出仕し、有職故実の知識を得た。天皇崩御後、三十歳位で官を辞して出家、5（隠遁）生活を送る。6（歌人）としてもよく知られ、二条為世に和歌を学び、和歌四天王と称された。

5 殺生石

謡曲

*登場人物を全て○で囲み、中心となる語を□で囲め。

1段

p36

くもみづ

うきよ

い

ワキ心を誘ふ雲水の、心を誘ふ雲水の、浮世うきよの旅に出でうよ。

げんのう

だうにん

ゆか

なげ

いつけ

んしよ つひ

「①これは玄翁といへる道人なり。われ知識の床を立ち去らず、一大事を歎き一見所を開き終

ほつす

まなこ

ほど あうしう

のぼ とうげ

に弘子を打ち振つて世上に眼をさらす。②この程は奥州に候ひしが、都に上り冬夏をも結ばばやと

思ひ候。雲水の、身はいづくとも定めなき、身はいづくとも定めなき、浮世の旅に迷ひゆく、心の

奥を白河の、結びこめたる1下野や、③那須野の原に着きにけり。那須野の原に1着きにけり。

注 1 殺生石―那須湯本温泉付近にある輝石安山岩。石から吹き出す有毒ガスによって、人や動物を殺すほどだったので、「殺生石」の名が付いたとされる。「九尾の狐」の伝説で知られる。

語釈

一 一次の語の意味を現代仮名遣いで記せ。

1 殺生石 2 浮世 3 玄翁 4 一見所 5 弘子 6 奥州

7 冬夏

二 二次の語の意味を辞書で調べよ。

1 道人

2 弘子

三 傍線部1の問いに答えよ。

1 現在の県名を記せ。

四 二重線部1の文法問題に答えよ。

1 品詞分解・口語訳

五 口語訳

p 3 6 口語訳

ワキ「① 私は玄翁という修行僧です。私は常に仏道修行を怠らず、ついに一見識を開き、この悟りを以て諸国を巡り、人々を教導しているのです。② この間中は奥州で修行しておりましたが、都でさらに修行を積もうと思ひまして、旅をしております。今、奥州白河を出て、下野国の③ 那須野に着きました」

2 段

(省略) この間アイとの問答あり。

シテ「④ のうのうあれなるおん僧、1その石のほとりへ1な立ち寄せ給ひぞ。

p 3 7

ワキ「⑤ そもそもこの石のほとりへよるまじき謂はれの候ふか。

せつしやうせき

シテ「それは那須野の1殺生石とて、人間は申すに及ばず、鳥類畜類までもさはるに命なし。⑥ かく

し

おそう

の

恐ろしき殺生石とも、知ろしめされで御僧たちは、求め給へる命かな。⑦そこ立ち退き給へ。

なにゆゑ

ワキ「⑧ さて、2この石は何故かく殺生をばいたすやらん。

とば

うへわらは たまも

しふしん

シテ「⑨ むかし鳥羽の院の2上童に、玉藻の前と申しし人の、執心の石となりたるなり。

(省略) この間、シテとワキの問答があり、シテが玉藻の前に化けた狐の伝説や、都を混乱させた状況そして、安部泰成の調伏によつて、3この地に追われたことなどを説明して、石の中に消える(中入り)。さらに、アイによつて、玉藻の前の伝説がくわしく説明されて、前半が終わる。

注 2 上童―宮中や貴族の家に召し使われる子供。中世では通常少女。

語釈

一 次の語の意味を現代仮名遣いで記せ。

1 謂はれ 2 鳥羽の院 3 上童 4 玉藻の前 5 執心

6 安部泰成

二 次の語の意味を辞書で調べよ。

1 殺生

2 調伏

三 傍線部1の問いに答えよ。

1 何のことか。

四 二重線部1の文法問題に答えよ。

1 品詞分解 口語訳

五 口語訳

p 36 口語訳

従者が大石を見つけ、鳥が落ちる様子を語る。

玄翁が近づこうとする。

シテ「④ もしもしそこのお坊様、その石にお近づきになつてはなりません」

p 37 口語訳

ワキ「⑤ この石に近づいてはならない理由があるのですか」

シテ「それは那須野の殺生石といって、人間は申し上げるまでもなく、鳥やけものまでも、石に触れると命をなくすのです。⑥ そうしたおそろしい殺生石と御存じにならず、わざわざ命を落とそうとなさる。⑦ 早くその石からお離れ下さい」

ワキ「⑧ なぜこの石はそのような殺生をいたすのだろうか」

シテ「⑨ それは、昔、鳥羽の院の上童で、玉藻の前と申した人の執念が、この石になったのです」

3段

語釈

p 38

ぼくせき

さうもくこくどしつかいじやうぶつ

ぐそく

ワキ⑩ 木石心なしとは申せども、⑪ 「3草木国土悉皆成仏と聞く時は、もとより4 仏体

具足せり。

いは えはつ さず

たむ せうかう

況んや衣鉢を授くるならば、成仏疑ひあるべからずと、花を手向け焼香し、石面に向つて仏事をなす。

なんぢ

せきれい いづ

きた こんじやう

⑫ 1 汝元來殺生石、問う石霊、何れの所より来り、今生かくの1ことくなる。急々に去れ去れ。

じこん にい

しんによ

せつしゆ

自今以後汝を成仏せしめ、仏体真如の善心となさん。撰取せよ。

後ジテ⑬ 石に精あり、水に音あり、風は大虚たいきよに渡る。

かたち

せきこん

地形を今ぞ現はす⑭ 石の、二つ割るれば、石魂たちまち現はれ出でたり。恐ろしや。

やかん

ワキ⑮ 不思議やな2この石二つに割れ、光の内をよく見れば、5野干の形はありながら、さも

じんたい

恐ろしき人体なり。

注 3 草木国土悉皆成仏―仏教の考え方のひとつ。すべてのものに仏の心があるというものの。 4 仏体具足―石も仏身そのものだという意。 5 野干―狐。

一次の語の意味を現代仮名遣いで記せ。

1 木石	2 草木国土悉皆成仏	3 具足	4 況んや	5 衣鉢
6 焼香	7 汝	8 今生	9 自今	10 真如

二次の語の意味を辞書で調べよ。

1 況んや

2 衣鉢

3 今生

4 成仏

三 傍線部1の問いに答えよ。

1 誰のことか。

2 何か。

四 二重線部1の文法問題に答えよ。

1 文法的に説明せよ。

五 口語訳

p 36 口語訳

ワキ「⑩ 木や石に感情がないと申しますが、⑪『草木国土悉皆成仏』と仏は教えていますので、石も仏身そのものです。まして、私が祈禱すれば、必ずこの石も成仏するに違いない。⑫お前は元来、殺生石であるのみ、その石霊に問うが、お前は一体どこから来て、この世でなぜこんな殺生をするのか。急いで立ち去れ。今後はお前を成仏させて、悟りを開いた仏体の善心にしてやろう。会得し開悟せよ」

退治せよとの勅を受けて、野干は犬に似たれば犬にて稽古あるべしとて、百日犬をぞ射たりける。こ

いぬおふもの

れ二〇犬追物の始めとかや。

注 6 班足太子―伝説上の人物。天竺の王子で、千人の王を殺してその首を塚の神に供え、大王になろうとしたという。7 幽王の后褒―西周最後の王、幽王の寵妃。幽王は笑わぬ褒を笑わせるために狼煙のろしをあげて諸侯を呼び集めたという。8 優女―舞いや歌にすぐれた美女。9 綸旨―天皇自らの命令書。ここでは勅命に同じ。二〇 犬追物―鎌倉時代以降、武芸として流行した武士の素養のひとつ。馬で犬を追ひ、馬上から射止める。この地で九尾狐を退治するために三浦介、上総介が、犬を射て百日間修練したということが犬追物の起源とされている。

語釈

一次の語の意味を現代仮名遣いで記せ。

1 天竺 2 班足太子 3 幽王 4 后褒姒 5 玉藻の前 6 安倍の泰成

7 調伏 8 幣帛 9 肝胆 10 雲居 11 勅使 12 犬追物

二次の語の意味を辞書で調べよ。

1 玉体 2 御脳

三 傍線部 1・2 の問いに答えよ。
1 どこか。

2 何か。

四 二重線部 1 の文法問題に答えよ。

1 音便の種類 元の形

五 口語訳

p 38 口語訳

シテ「⑬ 今は何を隠そうか。私は天竺では班足太子の祭った塚の神となり、唐では幽王の后

p 39 口語訳

褒姒として現れ、わが日本においては鳥羽院の⑭ 玉藻の前となったものである。私は王道を傾けようと企て、⑮ 仮に美女の姿となって、帝に近づくと、帝はご病氣におなりになった。今にもお命を取ろうと喜んでいたところに、安倍泰成が調伏の祈祷を始め、私⁶¹ 御幣

を持たせて必死に祈ったので」

地 「①9 すぐに身体中が苦しくなり、御幣を捨てて空を飛び海山を越え、この那須野の原に隠れ住んだ」

地 「②0 その後勅命が立って、三浦介・上総介両人は、那須野の原の化生の者を退治せよとの勅命を受けて、狐は犬に似ているので、百日間犬を射て練習した。これが犬追物の起源だとか」

5 段

かりしやうぞく

シテ両介は狩装束にて、

4 0

すまんぎ

わか

地 ② 両介は狩装束にて、数万騎那須野を取りこめて、草を分つて狩りけるに、身を何

かりびと

と那須野の原に、1 現はれ出でしを狩人の、追ふつつまくつつきくりにつけて、矢の下に射伏

そくじ

いたづ

しふしん

せられて、即時に命を徒らに、那須野の原の露と消えても、② なほ執心はこの

あ がた みのり

野に残つて、殺生石となつて、人を取ることも多年なれども、③ 今逢ひ難き御法を受けて、

のち

おんそう

この後悪事をいたすこと、あるべからずと御僧に、④ 約束かたき石となつて、約束かた

きしん

き石となつて、鬼神の姿は失せに1 けり。

語釈

一 次の話の意味を現代仮名遣いで記せ。

1 即時 2 徒らに 3 執心 4 御法 5 鬼神

二 次の話の意味を辞書で調べよ。

1 狩装束

三 傍線部1の問いに答えよ。 1 主語を記せ。

四 二重線部1の文法問題に答えよ。 1 文法的に説明せよ。

五 口語訳

p 4 0 口語訳

地 「② 両人は数万騎を率いて那須野を取り囲んだので、どうしようもなく現れ出たところをとうとう射止められ、命を落とした。③ それでも執念が残って殺生石となり、長年人を殺していたが、④ 今有り難い供養を受けたのだから、この後は決して悪事はい

せんと、玄翁に石のように堅い約束をし、身はもとの石となって、鬼神の姿は消えてしまった」

役割分担 読み合わせ

キャスト

ワキ

シテ

後ジテ

地

5	4	3	略	2 略	1	段
那須野	インド 中国 日本	京	院 京 鳥羽	須野 白河 都 奥州から	時・場所	シテ（主役）地（地謡）
地「兩人は数万騎で那須野をとりかこんだ。出てきたところ」 地「勅命で三浦介・上総介が来て、犬追物で訓練した。」 地「苦しくなって海山を越えてこの地に隠れた。」 「私は天竺では斑足太子の神になり、唐では幽王の後褒姒になり、日本では鳥羽院の玉藻の前になったものだ。安部泰成の成敗にあった。」 「石にも心がある。」 安部泰成が玉藻の前を成敗した。この地に逃げてきた。 「鳥羽院の玉藻の前が石になったからだ。」 「命をなくす殺生石だ。」 「石に近づいてはいけない。」						ワキ（脇役）
						「私は幻翁という。修行僧として諸国を巡る。」 着いた。 「なぜ？」 「なぜ殺生をするのか。」 「私が祈祷してこの石を成仏させる。」 「石が二つに割れ光が出た。中から狐の形をした人間が現れた。」

文学史

殺生石

きようじよもの きちくもの きちくもの むげん

狂女物または鬼畜物に属する。構成は、複式夢幻能と呼ばれるもので、一曲が前半部と後半部に分かれ、演者は同じだが、シテは役柄が変わり、仮面、装束を換える。前半は、ワキ役の僧や旅人の

きことびと

前に里人があらわれ、那須野の伝説や物語の説明をする。後半は、その里人が伝説の主人公として再び登場し、ありし日の自分の姿を舞い、あの世へと去っていく。作者は、日吉佐阿弥安清。なお、殺生石の伝説をもとにした御伽草子に『玉藻の前』がある。この他、栃木県に関わりのある謡曲には、

ゆぎようやなぎ

ほうかぞ

う

西行伝説に取材した『遊行柳』（那須郡那須町）、兄弟の親の仇討ちに取材した『放下僧』

(さくら)

ありう

市)、有宇中将の東下り説話に取材した『日光山』（日光市)がある。

参考

九尾の狐 中国神話の生物。九本の尻尾をもつ狐の妖怪である。九尾の妖狐、九尾狐、九尾とも呼ばれる。稻荷神との習合がある。万単位の年月を生きたとはいわれる。

紀元前2世紀から紀元前3世紀にかけて中国で現された地理書『山海経』の一書「南山経」にある一節が九尾の狐に関する最初の記述であるとされている。九尾の狐は絶世の美女に化身するという話も多い。

殺生石 栃木県那須町にある溶岩。

九尾の狐（玉藻の前）が討伐され毒の石になったという伝説がある。

玉藻稻荷神社 大田原市黒羽

九尾の狐はこの地に逃げ込み蟬に身を変え桜の木の陰に隠れていたが鏡が池に映った真の姿を見つけれられて討たれた

犬追物 大田原市黒羽

鎌倉時代に**武士**が「**九尾の狐**」を退治するため狐に似た犬を使って始められたといわれ、以後、武芸の鍛錬として行われる。当時は獣類を**馬**で追い騎射をする競技を総称して「追物射」（おうものい）といい、牛を追う「牛追物」などもあったが、犬を追う「犬追物」だけが残った。

殺生石 解答

1段

p36

くもみづ

うきよ

い

ワキ心を誘ふ雲水の、心を誘ふ雲水の、浮世よの旅に出でうよ。

げんのう

だうにん

ゆか

なげ

いつけ

んしよ つひ

「②これは玄翁といへる道人なり。われ知識の床を立ち去らず、一大事を歎き一見所を開き終

ほつす

まなこ

ほど あうしう

のぼ とうげ

に松子を打ち振つて世上に眼をさらす。②この程は奥州に候ひしが、都に上り冬夏をも結ばばやと

思ひ候。雲水の、身はいづくとも定めなき、身はいづくとも定めなき、浮世の旅に迷ひゆく、心の

奥を白河の、結びこめたる1下野や、③那須野の原に着きにけり。那須野の原に1着きにけり。

注 1 殺生石―那須湯本温泉付近にある輝石安山岩。石から吹き出す有毒ガスによって、人や動物を殺すほどだったので、「殺生石」の名が付いたとされる。「九尾の狐」の伝説で知られる。

1 せつしようせき 2 うきよ 3 げんのう 4 いっけんしよ 5 ほつす

6 おうしゆゆう 7 とうげ

一次の語の意味を現代仮名遣いで記せ。

1 殺生石 2 浮世 3 玄翁 4 一見所 5 松子 6 奥州

7 冬夏

二次の語の意味を辞書で調べよ。

1 道人 悟りを開こうと修行する人。

2 松子 仏具の一種。獣毛をたばねて柄をつけた仏具。

三 傍線部1の問いに答えよ。

1 現在の県名を記せ。栃木県

四 二重線部1の文法問題に答えよ。

1 品詞分解・口語訳 着き カ四動着く用 に 助動詞 ぬ 完了用 けり 助動詞 けり完了用 着いた。

五 口語訳

p 3 6 口語訳

ワキ「① 私は玄翁という修行僧です。私は常に仏道修行を怠らず、ついに一見識を開き、この悟りを以て諸国を巡り、人々を教導しているのです。② この間中は奥州で修行しておりましたが、都でさらに修行を積もうと思ひまして、旅をしております。今、奥州白河を出て、下野国の③ 那須野に着きました」

2 段

(省略) この間アイとの問答あり。

シテ「④ のうのうあれなるおん僧、1 その石のほとりへ1 な立ち寄せ給ひぞ。

p 3 7

ワキ「⑤ そもそもこの石のほとりへよるまじき謂はれの候ふか。

せつしやうせき

シテ「それは那須野の1 殺生石とて、人間は申すに及ばず、鳥類畜類までもさはるに命なし。⑥ かく

し

おそう

の

恐ろしき殺生石とも、知ろしめされで御僧たちは、求め給へる命かな。「⑦ そこ立ち退き給へ。

なにゆゑ

ワキ「⑧ さて、2 この石は何故かく殺生をばいたすやらん。

とば

うへわらは たまも

しふしん

シテ「⑨ むかし鳥羽の院の2 上童に、玉藻の前と申しし人の、執心の石となりたるなり。

(省略) この間、シテとワキの問答があり、シテが玉藻の前に化けた狐の伝説や、都を混乱させた状況

そして、安部泰成の調伏によつて、3 この地に追われたことなどを説明して、石の中に消える(中入り)。

さらに、アイによつて、玉藻の前の伝説がくわしく説明されて、前半が終わる。

注 2 上童—宮中や貴族の家に召し使われる子供。中世では通常少女。

一 1 い 2 とばのいん 3 うえわらわ 4 たまものまえ 5 しゅうしん 6 あべのやすなり
一次の語の意味を現代仮名遣いで記せ。

1 謂はれ 2 鳥羽の院 3 上童 4 玉藻の前 5 執心

6 安部泰成

二 次の語の意味を辞書で調べよ。

1 殺生 生き物を殺すこと。

2 調伏 仏に祈って邪悪なものを降伏させること。

三 傍線部1の問いに答えよ。

1 何のことか。殺生石

四 二重線部1の文法問題に答えよ。

1 品詞分解 口語訳 な副 立ちタ四動たち寄らラ四動立ち寄る未 せ助動詞尊敬

すよう 給ひハ補助動尊敬給ふ用 そ終助詞 立ちお寄りなさるな

五 口語訳

p36 口語訳

従者が大石を見つけ、鳥が落ちる様子を語る。

玄翁が近づこうとする。

シテ「④ もしもしそこのお坊様、その石にお近づきになってはなりません」

p37 口語訳

ワキ「⑤ この石に近づいてはならない理由があるのですか」

シテ「それは那須野の殺生石といって、人間は申し上げるまでもなく、鳥やけものまでも、

石に触れると命をなくすのです。⑥ そうしたおそろしい殺生石と御存じにならず、わざわざ

命を落とそうとなさる。⑦ 早くその石からお離れ下さい」

ワキ「⑧ なぜこの石はそのような殺生をいたすのだろうか」

シテ「⑨ それは、昔、鳥羽の院の上童で、玉藻の前と申した人の執念が、この石になった

のです」

3段

p38

ぼくせき

さうもくこくどしつかいじやうぶつ

ぐそく

ワキ「⑩ 木石心なしとは申せども、⑪ 「草木国土悉皆成仏と聞く時は、もとより4 仏体

具足せり。

いは えはつ さず

たむ せうかう

況んや衣鉢を授くるならば、成仏疑ひあるべからずと、花を手向け焼香し、石面に向つて

仏事をなす。

なんぢ

せきれい いづ

きた こんじやう

じこん

⑫ 1 汝元来殺生石、問う石霊、何れの所より来り、今生かくの1ごとくなる。急々に去れ去れ。

じこん じこ じんによ せつしゆ
自今以後汝を成仏せしめ、仏体真如の善心となさん。攝取せよ。
後ジテ⑬ 石に精あり、水に音あり、風は大虚たいきよに渡る。

かたち

せきこん

地形を今ぞ現はす⑭ 石の、二つ割るれば、石魂たちまち現はれ出でたり。恐ろしや。

やかん

ワキ⑮ 不思議やな2この石二つに割れ、光の内をよく見れば、5野干の形はありながら、

じんたい

さも恐ろしき人体なり。

注 3草木国土悉皆成仏―仏教の考え方のひとつ。すべてのものに仏の心があるというものの。4仏体具足―石も仏身そのものだという意。5野干―狐。

1 ばくせき 2 そうもくこくどしつかいじようぶつ 3 ぐそく 4 いわ 5
えはつ

6 しょうこ 7 なんじ 8 こんじよう 9 じこん 10 しんによ

一次の語の意味を現代仮名遣いで記せ。

1 木石 2 草木国土悉皆成仏 3 具足 4 況んや 5 衣鉢

6 焼香 7 汝 8 今生 9 自今 10 真如

二 二次の語の意味を辞書で調べよ。

1 況んや まして

2 衣鉢 袈裟と鉢

3 今生 この世 現世

4 成仏 死ぬこと

三 傍線部1の問いに答えよ。

1 誰のことか。九尾の狐

2 何か。殺生石

四 二重線部1の文法問題に答えよ。

1 文法的に説明せよ。助動詞 比況 ごとし 連用形

五 口語訳

p 36 口語訳

ワキ「⑩ 木や石に感情がないと申しますが、⑪『草木国土悉皆成仏』と仏は教えていますので、石も仏身そのものです。まして、私が祈禱すれば、必ずこの石も成仏するに違いない。⑫お前は元来、殺生石であるのみ、その石霊に問うが、お前は一体どこから来て、この世でなぜこんな殺生をするのか。急いで立ち去れ。今後はお前を成仏させて、悟りを開いた仏体の善心にしてやろう。会得し開悟せよ」

大王になろうとしたという。7 幽王の后褒——西周最後の王、幽王の寵妃。幽王は笑わぬ褒を笑わせるために狼煙のろしをあげて諸侯を呼び集めたという。8 優女——舞いや歌にすぐれた美女。9 綸旨——天皇自らの命令書。ここでは勅命に同じ。10 犬追物——鎌倉時代以降、武芸として流行した武士の素養のひとつ。馬で犬を追ひ、馬上から射止める。この地で九尾狐を退治するために三浦介、上総介が、犬を射て百日間修練したということが犬追物の起源とされている。

一次の語の意味を現代仮名遣いで記せ。

1 天竺 2 班足太子 3 幽王 4 后褒姒 5 玉藻の前 6 安倍の泰成

7 調伏 8 幣帛 9 肝胆 10 雲居 11 勅使 12 犬追物

1 てんじく 2 はんそくたいし 3 ゆうおう 4 きさきほうじ 5 たまものまえ
6 あべのやすなり 7 ちょうぶく 8 へいはく 9 かんたん 10 くもい 11 ちよくし

12 いぬおうもの

二次の語の意味を辞書で調べよ。

1 玉体 天皇や上皇の身体の尊称

2 御脳

三 傍線部1・2の問いに答えよ。

1 どこか。 **那須野**

2 何か。 **九尾狐**

四 二重線部1の文法問題に答えよ。

1 音便の種類 元の形 **促音便** 立ちて

五 口語訳

p 38 口語訳

シテ「16 今は何を隠そうか。私は天竺では斑足太子の祭った塚の神となり、唐では幽王の后

p 39 口語訳

褒姒として現れ、わが日本においては鳥羽院の17 玉藻の前となったものである。私は王道を傾けようと企て、18 仮に美女の姿となって、帝に近づくと、帝はご病気におなりになった。今にもお命を取ろ

うと喜んでいたところに、安倍泰成が調伏の祈祷を始め、私に御幣を持たせて必死に祈ったので」

地 「①⑨ すぐに身体中が苦しくなり、御幣を捨てて空を飛び海山を越え、この那須野の原に隠れ住んだ」

地 「②⑩ その後勅命が立って、三浦介・上総介両人は、那須野の原の化生の者を退治せよとの勅命を受けて、狐は犬に似ているので、百日間犬を射て練習した。これが犬追物の起源だとか」

5 段

かりしやうぞく

シテ両介は狩装束にて、

4 0

すまんぎ

わか

地 ⑪ 両介は狩装束にて、数万騎那須野を取りこめて、草を分つて狩りけるに、身を何

かりびと

と那須野の原に、1 現はれ出でしを狩人の、追ふつつまくつつさくりにつけて、矢の下に射伏

そくじ

いたづ

しふしん

せられて、即時に命を徒らに、那須野の原の露と消えても、⑫ なほ執心はこの

あ がた みのり

野に残つて、殺生石となつて、人を取ることも多年なれども、⑬ 今逢ひ難き御法を受けて、

のち

おんそ

この後悪事をいたすこと、あるべからずと御僧に、⑭ 約束かたき石となつて、約束かた

きじん

き石となつて、鬼神の姿は失せに1 けり。

1 そくじ 2 いたづらに 3 しゅうしん 4 みのり 5 きじん

一次の語の意味を現代仮名遣いで記せ。

1 即時 2 徒らに 3 執心 4 御法 5 鬼神

二次の語の意味を辞書で調べよ。

1 狩装束 狩りに行く時の服装

三 傍線部1の問いに答えよ。 1 主語を記せ。 九尾狐

四 二重線部1の文法問題に答えよ。 1 文法的に説明せよ。 助動詞 けり過去終止形

五 口語訳

p 4 0 口語訳

地 「⑮ 両人は数万騎を率いて那須野を取り囲んだので、どうしようもなく現れ出たところをとうとう射止められ、命を落とした。⑯ それでも執念が残って殺生石となり、長年人を殺していたが、⑰ 今有り難い供養を受けたのだから、この後は決して悪事はい

せんと、玄翁に石のように堅い約束をし、身はもとの石となって、鬼神の姿は消えてしまった」

役割分担 読み合わせ

キャスト

ワキ

シテ

後ジテ

地

段	1	2 略	略	3	4	5
時・場所	奥州から 都 白河那 須野		京 鳥羽 院	京	インド 中国 日本	那須野
シテ（主役）地（地謡）	「石に近づいてはいけない。」 「命をなくす殺生石だ。」 「鳥羽院の玉藻の前が石になったからだ。」 安部泰成が玉藻の前を成敗した。この地に逃げてきた。 「石にも心がある。」	「石に近づいてはいけない。」 「命をなくす殺生石だ。」 「鳥羽院の玉藻の前が石になったからだ。」	「鳥羽院の玉藻の前が石になったからだ。」	安部泰成が玉藻の前を成敗した。この地に逃げてきた。 「石にも心がある。」	「私は天竺では斑足太子の神になり、唐では幽王の後褒姒になり、日本では鳥羽院の玉藻の前になったものだ。安部泰成の成敗にあった。」 地「苦しくなって海山を越えてこの地に隠れた。」 地「勅命で三浦介・上総介が来て、犬追物で訓練した。」 地「両人は数万騎で那須野をとりかこんだ。出てきたところ	地「両人は数万騎で那須野をとりかこんだ。出てきたところ
ワキ（脇役）						
	「私は幻翁という。修行僧として諸国を巡る。」 着いた。 「なぜ？」 「なぜ殺生をするのか。」			「私が祈祷してこの石を成仏させる。」 「石が二つに割れ光が出た。中から狐の形をした人間が現れた。」		

文学史

殺生石

きようじよもの きちくもの きちくもの むげん

狂女物または鬼畜物に属する。構成は、複式夢幻能と呼ばれるもので、一曲が前半部と後半部に分かれ、演者は同じだが、シテは役柄が変わり、仮面、装束を換える。前半は、ワキ役の僧や旅人の

きことびと

前に里人があらわれ、那須野の伝説や物語の説明をする。後半は、その里人が伝説の主人公として再び登場し、ありし日の自分の姿を舞い、あの世へと去っていく。作者は、日吉佐阿弥安清。なお、殺生石の伝説をもとにした御伽草子に『玉藻の前』がある。この他、栃木県に関わりのある謡曲には、

ゆぎようやなぎ

ほうかぞ

う

西行伝説に取材した『遊行柳』（那須郡那須町）、兄弟の親の仇討ちに取材した『放下僧』

(さくら)

ありう

市)、有宇中将の東下り説話に取材した『日光山』（日光市)がある。

参考

九尾の狐 中国神話の生物。九本の尻尾をもつ狐の妖怪である。九尾の妖狐、九尾狐、九尾とも呼ばれる。稻荷神との習合がある。万単位の年月を生きたとはいわれる。

紀元前2世紀から紀元前3世紀にかけて中国で現された地理書『山海経』の一書「南山経」にある一節が九尾の狐に関する最初の記述であるとされている。九尾の狐は絶世の美女に化身するという話も多い。

殺生石 栃木県那須町にある溶岩。

九尾の狐（玉藻の前）が討伐され毒の石になったという伝説がある。

玉藻稻荷神社 大田原市黒羽

九尾の狐はこの地に逃げ込み蟬に身を変え桜の木の陰に隠れていたが鏡が池に映った真の姿を見つけれられて討たれた

犬追物 大田原市黒羽

鎌倉時代に**武士**が「**九尾の狐**」を退治するため狐に似た犬を使って始められたといわれ、以後、武芸の鍛錬として行われる。当時は獣類を**馬**で追い騎射をする競技を総称して「追物射」（おうものい）といい、牛を追う「牛追物」などもあったが、犬を追う「犬追物」だけが残った。

6 中世和歌集

しよくこせん

『続後撰和歌集』

いへ

ふちはらのさだ

下野国にまかりける人に

藤原定家

1 立ちそひて1それとも見1ばやおとに聞く室の八島の深き煙を

口語訳 近くに立ち寄って確かに見たいものです。噂に名高い室の八島の濃い煙を

注 1 立ちそひて―「立ち」は煙の縁語。

一次の語の読みを現代仮名遣いで記せ。

1 続後撰和歌集 2 藤原定家 3 室の八島

二次の語の意味を辞書で調べよ。

1 おと

2 詞書き

三 傍線部1の問いに答えよ。

1 指示内容を記せ。

2 作者はどこにいるか。

3 何句切れか。

四 二重線部1の文法問題に答えよ。

1 文法的に説明せよ。

構成 有名な室の八島の煙 行ってみてみたい。

返し

れんしやうほふし
蓮生法師

2 思ひやる室の八島を1それと1見ば聞くに煙の立ち2やまさらむ

口語訳 遠くより想像する室の八島を實際確かに見たならば、聞いた話よりも盛んに煙が立ちのぼっていることでしょう。

注 2思ひやる―「思ひ」に「火」が掛けられ、煙の縁語。

一 次の語の読みを現代仮名遣いで記せ。 1 蓮生法師

二 次の語の意味を辞書で調べよ。

1 返し

2 思ひやる

三 傍線部1の問いに答えよ。

1 指示内容を記せ。

四 二重線部1・2の文法問題に答えよ。

1 品詞分解 口語訳

2 結びの語 終止形 活用形

構成 返歌 有名な室の八島の煙 実際に見たほうが面白い。

『金槐和歌集』

あられ

霰

みなもとのさねとも

源実朝

こて

3 もののふの3 矢並つくろふ4 籠手の上に霰5 たばしる那須の篠原

口語訳 狩り場で一息入れる武士が、背に負った箆えびらの矢の乱れを直そうとして、背後にまわした籠手の上に、高原の霰がたたきつけ飛び散るよ、ここ下野国那須の篠原で。

えびら

注 3 矢並つくろふ―箆にさした（狩り場を馳駆していた名残の）矢の乱れを整える。4 籠手―左右の腕につける小具足。肩口から手先までを防護する。5 たばしる―当たって飛び散る。勢い激しく走り飛ぶ。

一次の語の読みを現代仮名遣いで記せ。

1 金槐和歌集 2 源 実 朝 3 霰 4 箆 5 籠手 6 篠原

二次の語の意味を辞書で調べよ。

1 もののふ

三 傍線部1の問いに答えよ。

1 源実朝はどこにいるか。

2 篠原 修辞法

構成 那須の巻き狩り 厳しい自然

『新和歌集』

6 鎌倉右大臣より梅を折りて賜ふとて

4 7 1 君 1 ならでたれにか見せむ 2 わが宿の軒ばに匂ふ梅の初花

口語訳 あなたでなくてほかのだれに見せましようか。あなたにしか見せません。わたしの家の軒先に匂っている、この梅の初花を。

注 6 鎌倉右大臣家―源実朝。頼朝の次男。第三代将軍。7 君ならで―本歌は「君ならでたれにか見せん梅の花色をも香をも知る人ぞ知る」（古今和歌集）

一次の語の読みを現代仮名遣いで記せ。

1 鎌倉右大臣 2 賜ふ

二次の語の意味を辞書で調べよ。

1 賜ふ

2 宿

3 軒ば

三 傍線部 1、4 の問いに答えよ。

1 誰か。

2 誰の「宿」か。

3 何句切れか。

4 初花 修辞法

四 二重線部 1 の文法問題に答えよ。

1 品詞分解 口語訳

構成 梅の初花 あなたにしか見せない。

みかへりごと

御返事

しんしょほうし
信生法師

5 うれしさも匂ひも袖にあまりあり1けり1わがため折れる梅の初花

口語訳 このうれしさも梅の花の香りもわたしの袖に包みきれず外にあふれるほどです。
わたしのために折ってくださった梅の初花よ。

一 次 of 語 of 読みを現代仮名遣いで記せ。 1 御返事 2 信生法師

二 次 of 語 of 意味を辞書で調べよ。

1 初花

三 傍線部 1～2 の問いに答えよ。

1 誰か。

2 信生法師は梅の枝をどうしているか。

3 何句切れか。

4 初花 修辭法

四 二重線部 1 の文法問題に答えよ。

1 品詞名 基本形 活用形 文法的意味

構成 返歌 梅の初花 うれしさ 香り

8 鶴岳社十首歌に

うつのみやかげつな
宇都宮景綱

6 ありてよの後は憂しとも桜花誘ひ1 なはてそ春の山風

口語訳 たとい散り残った後が醜くてつらかうとも、いま桜の花が全部散ってしまう
ま
で誘わないでください、春の山風よ。

注 8 鶴岳社―鎌倉の鶴岡八幡宮。

一 次 of 語 of の読みを現代仮名遣いで記せ。

1 宇都宮景綱 2 憂し

二 次 of 語 of の意味を辞書で調べよ。

1 憂し

2 はつ

三 次 of の 1、2 の問いに答えよ。

1 何句切れか。

2 山風 修辞法

四 二重線部1の文法問題に答えよ。

1 品詞分解 口語訳

構成 山風に桜の花の落下を心配する。

海辺月

宇都宮泰綱

7 みなとこす入江の浪のひく汐に行くかた遠き月の影かな

口語訳 河口を越えて寄せてきた入江あたりの波も、いまは引き潮になって、遠く引いていくが、その波に映って遠くまで運ばれていく月光よ。

一次の語の読みを現代仮名遣いで記せ。

1 宇都宮泰綱 2 入江 3 汐

二次の語の意味を辞書で調べよ。

1 入江

2 影

構成 引く波に浮かぶ月光

作者

藤原定家一二六二（応保二）年―一二四一（仁治二）年父藤原俊成に和歌を学び、俊成の提唱した理念である幽玄を深め、有心を理想とした。『新古今和歌集』『新勅撰和歌集』の撰者。歌論『毎月抄』、日記『明月記』がある。

蓮生法師一二七八（治承二）年―一二五九（正元元）年宇都宮頼綱。藤原定家と親交が厚く、娘を定家の嫡子為家に嫁がせている。定家に古今の歌人の色紙染筆を依頼したことが小倉百人一首のもととなったといわれる。『新勅撰和歌集』初出。勅撰入集三十九首。

源実朝一二九二（建久三）年―一二一九（建保七）年鎌倉幕府の第三代征夷大將軍。鎌倉幕府を開いた頼朝の子として生まれ、兄頼家が追放されると、十二歳で征夷大將軍に就く。武士としてはじめて右大臣に任ぜられる。歌人としても知られ、小倉百人一首にも選ばれ、『勅撰和歌集』に九十二首入集。家集に『金槐和歌集』がある。

信生法師一二七四（承安四）年―没年未詳塩谷朝業。川崎城主。業綱の二男。蓮生の弟。鎌倉幕府の御家人として仕え、和歌を好んだことから將軍実朝の寵を得るが、実朝の死を機に出家。『新和歌集』に三十三首入集。『新勅撰和歌集』初出。勅撰入集十三首。東国旅行の記録など、一部歌日記風に綴られた家集『信生法師集（宇都宮朝業日記）』がある。

宇都宮景綱一二三五（嘉禎元）年～一二九八（永仁六）年蓮瑜。泰綱の子。蓮生の孫。鎌倉・京で多くの歌会に参加し、特に二条為世・京極為兼・冷泉為相らと活発に交流した。『続古今和歌集』に三十首入集。出家後に自らまとめた家集『沙弥蓮瑜集』がある。

宇都宮泰綱一二〇三（建仁三）年～一二六一（弘長元）年順蓮。蓮生の子。將軍・九条頼経に仕えて上洛し、下野守に叙任された。その後も評定衆の一人に任じられ、美濃の守護職も与えられるなど、幕政に重きをなした。『玉葉和歌集』や『続拾遺和歌集』に入集。

47

宇都宮歌壇鎌倉時代の初頭、宇都宮氏一族には歌をよくする人が多く出て、地方歌壇として隆盛を極め、多くの業績を残した。宇都宮頼綱は、その娘を、中世を代表する歌人である藤原定家の嫡子為家に嫁がせ、京都歌壇と密接な関係が生まれた。また弟の塩谷朝業は源実朝に仕え、若いうちから秀れた歌を作った。宇都宮歌壇の人々の作品は、一二五九（正元元）年ごろに成立の『新和歌集』十卷（百八十六人・八百七十五首）に収められている。他に個人の歌集として塩谷朝業の『信生法師集』、笠間時朝の『前長門守時朝入京田舎打聞集』、宇都宮景綱の『沙弥蓮瑜集』などが現存する。参考〔宇都宮氏略系図〕（宇都宮）宗円 宗綱 朝綱 業綱 頼綱（蓮生）泰綱（順蓮）景綱（蓮瑜）（塩谷）朝業（信生）親朝（笠間）時朝

参考

巻狩り 將軍の權威を誇示するため、また軍事演習として行われた。

1192年	10月	那須野巻狩り	源頼朝	那須野が原（現那須塩原市）
1193年	5月	富士の巻狩り	源頼朝	富士の裾野
1193年		源実朝	那須野に狩りに行く。	
1994年	10月	第一回	那須野巻狩り祭り	

第17回ともなり文芸祭り

しおやともなり

矢板市の初代川崎城主、塩谷朝業は、鎌倉時代の文学史を飾った人でした。朝業公を偲び、ともなり文芸祭りを開催します。

ジャンル 短歌 俳句 川柳 詩（漢詩を除く）

応募期間 平成27年7月13日（月）～10月13日（火） 必着

解答 中世和歌集

しよくごせん

『続後撰和歌集』

下野国にまかりける人に

ふちはらのさだいへ

藤原定家

1 立ちそひて1それとも見1ばやおとに聞く室の八島の深き煙を

口語訳 近くに立ち寄って確かに見たいものです。噂に名高い室の八島の濃い煙を

注 1 立ちそひて―「立ち」は煙の縁語。

一次の語の読みを現代仮名遣いで記せ。

しよくごせんわかしゅう ふじわらのさだいえ むろ やしま

1 続後撰和歌集 2 藤原定家 3 室の八島

二 次の語の意味を辞書で調べよ。

1 おと 噂

2 詞書 和歌や俳句の前書き。作った日時・場所・事情などを述べたもの。

三 傍線部1の問いに答えよ。

1 指示内容を記せ。 室の八島の濃い煙

2 作者はどこにいるか。 京

3 何句切れか。 二句切れ

四 二重線部1の文法問題に答えよ。

1 文法的に説明せよ。 終助詞 自分の願望 たい

構成 有名な室の八島の煙 行ってみてみたい。

返し

れんしやうほふし
蓮生法師

2 思ひやる室の八島を1それと1見は聞くに煙の立ち2やまさらむ

口語訳 遠くより想像する室の八島を實際確かに見たならば、聞いた話よりも盛んに煙が立ちのぼっていることでしょう。

注 2思ひやる―「思ひ」に「火」が掛けられ、煙の縁語。

一 次の語の読みを現代仮名遣いで記せ。 1 蓮生法師

二 次の語の意味を辞書で調べよ。

1 返し 返歌。

2 思ひやる 遠くへ思いをはせる。

三 傍線部1の問いに答えよ。

1 指示内容を記せ。 室の八島

四 二重線部1・2の文法問題に答えよ。

1 品詞分解 口語訳 見 マ行上一 見る 未 ば 接助 順接假定 みたならば

2 結びの語 終止形 活用形 らむ らむ 連体形

構成 返歌 有名な室の八島の煙 実際に見たほうが面白い。

『金槐和歌集』

あられ

霰

みなものさねとも

源 実 朝

こて

3 もののふの3 矢並つくろふ4 籠手の上に霰5たばしる那須の篠原

口語訳 狩り場で一息入れる武士が、背に負った箆えびらの矢の乱れを直そうとして、背後にまわした籠手の上に、高原の霰がたたきつけ飛び散るよ、ここ下野国那須の篠原で。

えびら

注 3 矢並つくろふ―箆にさした(狩り場を馳駆していた名残の)矢の乱れを整える。4 籠手―左右の腕につける小具足。肩口から手先までを防護する。5 たばしる―当たって飛び散る。勢い激しく走り飛ぶ。

一次の語の読みを現代仮名遣いで記せ。

きんかいわかしゅう みなものさねとも あられ えびら こて しのはら

1 金槐和歌集 2 源 実 朝 3 霰 4 箆 5 籠手 6 篠原

二次の語の意味を辞書で調べよ。

1 もののふ 武士

三 傍線部1の問いに答えよ。

1 源実朝はどこにいるか。那須野

2 篠原 修辞法 体言止め

構成 那須の巻き狩り 厳しい自然

『新和歌集』

6 鎌倉右大臣より梅を折りて賜ふとて

4 7 1 君1ならでたれにか見せむ2わが宿の軒ばに匂ふ梅の初花

口語訳 あなたでなくてほかのだれに見せましょうか。あなたにしか見せません。わたしの家の軒先に匂っている、この梅の初花を。

注 6 鎌倉右大臣家―源実朝。頼朝の次男。第三代将軍。 7 君ならで―本歌は「君ならでたれにか見せん梅の花色をも香をも知る人ぞ知る」（古今和歌集）

一次の語の読みを現代仮名遣いで記せ。

かまくらうだいじん たま

1 鎌倉右大臣 2 賜ふ

二次の語の意味を辞書で調べよ。

1 賜ふ お与えになる。 「与ふ」の尊敬

2 宿 いえ

3 軒ば 軒下

三 傍線部1～4の問いに答えよ。

1 誰か。 信生法師

2 誰の「宿」か。 鎌倉右大臣

3 何句切れか。 二句切れ

4 初花 修辞法 体言止め

四 二重線部1の文法問題に答えよ。

1 品詞分解 口語訳 なら 助動詞 断定 なり 未然形で 接続助詞 否定でなくて

構成 梅の初花 あなたにしか見せない。

みかへりごと

御返事

しんしよほうし

信生法師

5 うれしさも匂ひも袖にあまりあり1けり1わがため折れる梅の初花

口語訳 このうれしさも梅の花の香りもわたしの袖に包みきれず外にあふれるほどです。

わたしのために折ってくださいった梅の初花よ。

みかへりごと

しんしよほうし

一 次の語の読みを現代仮名遣いで記せ。

1 御返事

2 信生法師

二 次の語の意味を辞書で調べよ。

1 初花 季節の最初に咲く花。

三 傍線部1ゝ2の問いに答えよ。

1 誰か。信生法師

2 信生法師は梅の枝をどうしているか。 袖につつま香りをかいでいる。

3 何句切れか。 三句切れ

4 初花 修辞法 体言止め

四 二重線部1の文法問題に答えよ。

1 品詞名 基本形 活用形 文法的意味 助動詞 けり 終止形 詠嘆

構成 返歌 梅の初花 うれしさ 香り

8 鶴岳社十首歌に

うつのみやかげつな
宇都宮景綱

6 ありてよの後は憂しとも桜花誘ひ1なはてそ春の山風

口語訳 たとい散り残った後が醜くてつらからうとも、いま桜の花が全部散ってしまう
で誘わないでください、春の山風よ。

注 8 鶴岳社―鎌倉の鶴岡八幡宮。

一 次 of 語 of の読みを現代仮名遣いで記せ。

うつのみやかげつな う

1 宇都宮景綱 2 憂し

二 次 of 語 of の意味を辞書で調べよ。

1 憂し つらい

2 はつ 終わる。果てる。

三 次 of の1、2の問いに答えよ。

1 何句切れか。 四句切れ

2 山風 修辞法 体言止め

四 二重線部1の文法問題に答えよ。

1 品詞分解 口語訳 な 副詞 はて 夕下二 はつ 連用形 そ 終助詞 禁止
果てるな

構成 山風に桜の花の落下を心配する。

うつのみややすつな

海辺月

宇都宮泰綱

7 みなとこす入江の浪のひく汐に行くかた遠き月の影かな

口語訳 河口を越えて寄せてきた入江あたりの波も、いまは引き潮になって、遠く引いていくが、その波に映って遠くまで運ばれていく月光よ。

一次の語の読みを現代仮名遣いで記せ。

1 うつのみややすつな いりえ しお

宇都宮泰綱 2 入江 3 汐

二次の語の意味を辞書で調べよ。

1 入江

2 影 光

構成 引く波に浮かぶ月光

作者

藤原定家一二六二（応保二）年―一二四一（仁治二）年父藤原俊成に和歌を学び、俊成の提唱した理念である幽玄を深め、有心を理想とした。『新古今和歌集』『新勅撰和歌集』の撰者。歌論『毎月抄』、日記『明月記』がある。

蓮生法師一二七八（治承二）年―一二五九（正元元）年宇都宮頼綱。藤原定家と親交が厚く、娘を定家の嫡子為家に嫁がせている。定家に古今の歌人の色紙染筆を依頼したことが小倉百人一首のもととなったといわれる。『新勅撰和歌集』初出。勅撰入集三十九首。

源実朝一二九二（建久三）年―一二一九（建保七）年鎌倉幕府の第三代征夷大將軍。鎌倉幕府を開いた頼朝の子として生まれ、兄頼家が追放されると、十二歳で征夷大將軍に就く。武士としてはじめて右大臣に任ぜられる。歌人としても知られ、小倉百人一首にも選ばれ、『勅撰和歌集』に九十二首入集。家集に『金槐和歌集』がある。

信生法師一二七四（承安四）年―没年未詳塩谷朝業。川崎城主。業綱の二男。蓮生の弟。鎌倉幕府の御家人として仕え、和歌を好んだことから將軍実朝の寵を得るが、実朝の死を機に出家。『新和歌集』に三十三首入集。『新勅撰和歌集』初出。勅撰入集十三首。東国旅行の記録など、一部歌日記風に綴られた家集『信生法師集（宇都宮朝業日記）』がある。

宇都宮景綱一二三五（嘉禎元）年～一二九八（永仁六）年蓮瑜。泰綱の子。蓮生の孫。鎌倉・京で多くの歌会に参加し、特に二条為世・京極為兼・冷泉為相らと活発に交流した。『続古今和歌集』に三十首入集。出家後に自らまとめた家集『沙弥蓮瑜集』がある。

宇都宮泰綱一二〇三（建仁三）年～一二六一（弘長元）年順蓮。蓮生の子。将軍・九条頼経に仕えて上洛し、下野守に叙任された。その後も評定衆の一人に任じられ、美濃の守護職も与えられるなど、幕政に重きをなした。『玉葉和歌集』や『続拾遺和歌集』に入集。

47

宇都宮歌壇鎌倉時代の初頭、宇都宮氏一族には歌をよくする人が多く出て、地方歌壇として隆盛を極め、多くの業績を残した。宇都宮頼綱は、その娘を、中世を代表する歌人である藤原定家の嫡子為家に嫁がせ、京都歌壇と密接な関係が生まれた。また弟の塩谷朝業は源実朝に仕え、若いうちから秀れた歌を作った。宇都宮歌壇の人々の作品は、一二五九（正元元）年ごろに成立の『新和歌集』十卷（百八十六人・八百七十五首）に収められている。

他に個人の歌集として塩谷朝業の『信生法師集』、笠間時朝の『前長門守時朝入京田舎打聞集』、宇都宮景綱の『沙弥蓮瑜集』などが現存する。参考「宇都宮氏略系図」（宇都宮）宗円 宗綱 朝綱 業綱 頼綱（蓮生）泰綱（順蓮）景綱（蓮瑜）（塩谷）朝業（信生）親朝（笠間）時朝

参考

巻狩り 将軍の権威を誇示するため、また軍事演習として行われた。

1192年	10月	那須野巻狩り	源頼朝	那須野が原（現那須塩原市）
1193年	5月	富士の巻狩り	源頼朝	富士の裾野
1193年		源実朝	那須野に狩りに行く。	
1194年	10月	第一回	那須野巻狩り祭り	

第17回ともなり文芸祭り

しおやともなり

矢板市の初代川崎城主、塩谷朝業は、鎌倉時代の文学史を飾った人でした。朝業公を偲び、ともなり文芸祭りを開催します。

ジャンル 短歌 俳句 川柳 詩（漢詩を除く）

応募期間 平成27年7月13日（月）～10月13日（火）必着

7 おくのはそ道

近世

徳川氏の全国平定によって戦国の世が終わり、民心の安定を得た。経済・文化活動が活発化し、街道は整備されて賑わいを見せるようになる。下野国では日光東照宮が造営され、諸大名の御社参をはじめ、参勤交代、庶民の寺社への参詣など人々の往来が繁くなった。中央との交流も盛んとなり、文人墨客の来訪は下野の文化を徐々に高めていった。元禄二年に松尾芭蕉が『おくのはそ道』の旅で下野を訪れると、それに刺激を受けて多くの俳人が下野に来訪するようになった。和歌においては下河辺長流もこうべちよりゆうをはじめ多くの歌人によって下野の風光の美しさが歌われ、また下野国を舞台として描かれた『雨月物語』（上田秋成）、『南総里見八犬伝』（滝沢馬琴）などは郷土の人の興味をひいたことであろう。下野人の中でも創作の気運が高まり、和歌では石塚倉子、奥河内清香おこうちきよか、俳諧では早野巴人、常盤潭北ときわたんぱくらが出た。特に巴人は与謝蕪村を育てるなど、俳諧の興隆に貢献した。

*登場人物を全て○で囲み、中心となる語を□で囲め。

おくのほそ道（室の八嶋）	曾良旅日記 事実
1 室の八嶋に詣す。同行曾良が曰はく、「此の神三月廿九日、辰ノ上尅マヽダヲ出。は、木の花さくや姫の神と申して、富士二体なり。一 小山ヘ一リ半、小山ノヤシキ、2 無戸室に入りて焼け給ふちかひの中に、火々右ノ方ニ有。一 小田（山）ヨリ出見みのみこと生まれ給ひ1しより、室の八嶋と申飯塚ヘ一リ半。木沢ト云所ヨリ左ヘす。又3 煙を読み習はし侍るもこの謂はれなり。切ル。一 此間姿川越ル。飯塚ヨ将、4 このしろといふ魚を禁ず」1縁起の旨、世リ壬生ヘ一リ半。飯塚ノ宿ハヅレヨリ左ヘキレ、（小クラ川）川原ヲ通り、川ヲ越、ソウシヤガシト云船ツキノ上ヘカヽリ、室ノ八嶋ヘ行（乾ノ方五町バカリ）。スグニ壬生ヘ出ル（毛武ト云村アリ）。此間三リト	ト云、代目ナ。

（注）

1 室の八嶋―二十一ページ・注3参照。2 無戸室―扉のない塗りごめの室。『日本書紀』『古事記』に、天孫瓊杵尊ににぎのみことから一夜で懐妊したことを疑われた木花咲耶姫が無戸室を作り、その中に籠もって、もし懐妊した児が瓊瓊杵尊の児でなければ必ず焼け滅びるであろう、瓊瓊杵尊の児であることが真実ならば、火であつてもその児を害することはできないだろうという誓いを立てて、火をつけて室を焼いたところ、その中で火闌降命ほのすそりのみこと、彦火々出見尊ひこほほでみのみこと、火明命ほのあかりのみこととが生まれたという神話がある。3 煙を読み習はし侍る―「いかでかは思ひありとも知らすべき室の八嶋の煙ならでは」（藤原実方・十九ページ参照）など、古歌に多くの例がある。4 このしろ―コノシロ科の魚。別名「ツナシ」「コハダ」。神事に用いるために室の八嶋ではコノシロを食べることを禁忌としている。昔、有馬皇子が零落して下野にくだり、五万長者の元に寄食していたが、長者の娘と恋仲となり娘は懐妊してしまった。娘は常陸の国司から求婚されていたので、長者は一計を案じて、娘は早死にしたとして葬儀を執り行い、棺にツナシを詰めて茶毘にふすと人体の焼ける匂いがした。娘は死んだものと納得され、皇子と娘は結婚することができた。そのことからツナシを「コノシロ（子の代）」と呼ぶようになった、という伝説が『慈元抄』に残されている。

語釈

一 次の語の意味を現代仮名遣いで記せ。

1 室の八嶋 2 詣す 3 曾良 4 無戸室 5 火々出見

6 謂はれ 7 将 8 縁起の旨

二 次の語の意味を辞書で調べよ。

1 詣す

2 同行

3 歌枕

4 縁起

三 傍線部1ゝの問いに答えよ。

1 何の縁起か。

四 二重線部1ゝの文法問題に答えよ。

1 品詞名 基本形 活用形 文法的意味

五 口語訳

室の八嶋に参詣する。同行の曾良がいうことには、「この神社の祭神は木花咲耶姫の神と申しまして、富士山の浅間神社と同じです。木花咲耶姫が無戸室に入って火を放ち、もし自分にやましいところがあるのならその火とともに燃え滅びようという誓いを立てられたそのただ中に彦火々出見尊がお生まれになったことから、竈の神と同じく室の八嶋と申します。また、和歌において室の八嶋といえは『煙』をともに詠み込む慣例がありますのも、このいわれにもとづくものなのです。そしてまた、このしろという魚を焼いて食べるのを禁じています」こうした八嶋明神縁起の趣旨で、世に伝わっているものもありました。

構成

三月二十九日 曾良室の八嶋の縁起を語る。 室の八嶋Ⅱかまどの神

歌枕 室の八嶋

(室の八嶋) 解答

- | | | | | | | | | | | | |
|---|---|-----------|---|----------|----|-----------------|--------|---|------|---|------|
| 一 | 1 | むろのやし | ま | 2 | けい | 3 | そら | 4 | うつむろ | 5 | ほほでみ |
| 6 | い | | | 7 | はた | 8 | えんぎのむね | | | | |
| 二 | 1 | 参詣する。 | 2 | 道連れ。同行者。 | 3 | 和歌によく詠まれる題材や名所。 | 4 | 物 | | | |
| | | 事の起こり。由来。 | | | | | | | | | |
| 三 | 1 | 室の八嶋 | 四 | 助動詞 | き | 連体形 | 過去 | | | | |

おくのほそ道 (日光) 虚構	曾良旅日記 事実
三十日、5 日光山の麓に泊る。あるじの言いひけるやう、「我が名を仏五左衛門と言ふ。万、正直辰上尅、宿ヲ出。を旨とする故に、人1かくは申し侍るまま、一夜の止テハ折々小雨ス。終日曇午ノ尅、草の枕も打ち解けて休み1給へ」と言ふ。いかなる日光へ着。仏の6濁世塵土に7 示現して、かかる8桑門の2 雨止。清水寺ノ書、養源院へ届。乞食順礼ごときの人を3たすけ給ふにやと、4ある大樂院へ使僧ヲ被添。折節大樂院じのなす事に心をとどめてみるに、唯無智無分別に客有之、未ノ下尅迄待テ御宮拝見。して、正直偏固の者なり。9 剛毅木訥の仁に近きた終テ其夜日光上鉢石町五左衛門トぐひ、氣稟の清質尤も尊ぶべし。云者ノ方ニ宿。壱五式四。 卯月朔日、御山に詣拝す。往昔此の5御山を「二荒山」と書きしを、10 空海大師開基の時、「日光」と改め給ふ。千歳未来をさとりに給ふにや、今此の御宿ヲ出。ウラ見ノ滝（一リ程西光一天にかかやきて、恩沢二八荒にあふれ、6四北）・ガンマンガ淵見巡、漸ク及午。民安堵の栖、穏やかなり。猶、憚り多くて筆をさし鉢石ヲ立、奈（那）須・太田原へ趣置き2ぬ。 あらたふと青葉若葉の日の光 12 黒髪山は霞かかりて、雪いまだ3白し。 剃り捨てて黒髪山に衣更 曾良 7 曾良は河合氏にして、惣五郎と言へり。芭蕉の下葉に軒をならべて、8 予が薪水の労をたすく。このたび 13 松島・象潟の眺め共にせん事を9悦び、且つは羈旅の10難をいたはらんと、旅立つ暁あかつき 11 髪を剃りて墨染にさまをかへ、惣五を改めて宗悟とす。仍つて黒髪山の句有り。「12衣更」の二字、力ありてきこゆ。 p22 二十余丁、山を登つて13滝有り。岩洞の頂より飛流して百尺、千岩の碧潭に落ちたり。岩窟に身をひそめ入りて、滝の裏よりみれば、14うらみの滝と申し伝へ侍るなり。 暫時は滝に籠るや 14 夏の初はじめ	一 四月朔日 前夜ヨリ小雨降。

(注)

5 日光山―日光山東照宮。6 濁世塵土―濁り汚れた現世。7 示現―仏が衆生済度のため、この世に姿を現すこと。8 桑門―僧侶。9 剛毅木訥の仁に近き―『論語』子路編第十三「子曰、剛毅木訥近仁」による。10 空海大師―日光山の開山は勝道上人であり、空海は日光山内を歴遊し、菩提寺・四条寺などを建立し、「荒」の名を「日光」に改めた。11 八荒―東西南北の四方とその間の四隅。12 黒髪山―男体山の異名。『万葉集』以来の歌枕でもあった。13 松島・象潟―宮城県宮城郡松島町・秋田県由利郡象潟町。ともに景勝地であり、歌枕であった。14 夏げ―僧が一夏九十日の間、一室に籠もって修行すること。「夏行げぎょう」「夏安居げあんこ」ともいう。

語釈

一 次の語の意味を現代仮名遣いで記せ。

1 麓	2 万	3 濁世塵土	4 示現	5 桑門	6 乞食順礼	7 唯
8 無智無分別	1 0 偏固	1 1 剛毅木訥	1 2 気稟	1 3 清質	1 4 尤も	
1 5 卯月	1 6 朔日	1 7 御山	1 8 詣拝	1 9 往昔	2 0 御光	2 1 恩沢
2 2 八荒	2 3 安堵	2 4 栖	2 5 猶	2 6 憚り	2 8 剃り	2 9 黒髪
山	3 0 衣更	3 1 曾良	3 2 薪水	3 3 象潟	3 4 悦び	3 5 且つ
3 7 墨染	3 8 仍つて	3 9 岩洞の頂	4 0 碧潭	4 1 岩窟	4 2 暫時	3 6 羈旅

二 次の語の意味を辞書で調べよ。

- 1 あるじ
 - 2 草枕
 - 3 示現
 - 4 気稟
 - 5 憚り
 - 6 羈旅
 - 7 墨染
 - 8 夏
- 三 傍線部 1～14 の問いに答えよ。
- 1 指示内容を記せ。
 - 2 誰のことか。
 - 3 具体的にどういうことか。
 - 4 誰のことか。
 - 5 具体的に名を記せ。

- 6 具体的に記せ。
- 7 身分を記せ。
- 8 誰のことか。
- 9 主語を記せ。
- 10 誰が誰をいたわるのか。
- 11 どうしたのか。
- 12 なぜか。
- 13 滝の名を記せ。
- 14 名の由来を抜き出せ。

四 二重線部1～3の文法問題に答えよ。

- 1 敬語の種類 誰が誰を敬うか。
- 2 品詞名 基本形 活用形 文法的意味
- 3 品詞名 基本形 活用形

五 口語訳

三月三十日、日光山の麓に泊まる。宿の主人がいうことには、「私の名を仏五左衛門といいます。万事につけて正直を第一にしているために世間の人がこのように申しているのですから、今宵一夜の旅寝も安心してお休みください」という。どのような仏が濁り乱れたこの世に姿を現されて、こんな僧形の乞食か巡礼のような者をお助けくださるのだろうか。と、主人の振る舞いを注意して見ると、この人はただに無知無分別であり、ひたすら正直一辺倒の人である。『論語』にいう「剛毅木訥であることは仁に近い」というたぐいの人であり、生まれつきの清らかな性質は最も尊ぶべきである。四月一日、日光東照宮を参拝した。昔はこの御山を「二荒山（ふたらさん）」と書き表していたが、空海大師が寺を建立なさった時「日光」とお改めになった。大師は千年後の未来をも予見なさっていらつしやったのであろうか、今、日光東照大権現のご威光は天下に輝き、ご恩恵は国の隅々まであふれ、士農工商みな安穏な生活を営んでいる。この御山について筆を弄することは、やはり恐れ多いので、筆を置く。あらたふと…ああ、尊いこと。青葉若葉に日の光が燦々とふりそそいでいる。黒髪山は霞がかかっていて、雪がまだ白く残っている。髪を剃り捨て…僧形となつてこの旅に臨んだ

p52が、四月一日の今日、髪と縁のある名のついた黒髪山に至り、ここで夏衣に衣替えをすることになったことだ。曾良は河合氏で、名前を惣五郎といった。深川の芭蕉庵の近くに住み、台所仕事の手助けをしてくれていた。このたび松島、象潟の眺めとともにすることを喜び、また私の旅の苦勞をいたわろうとして、旅立つ前の暁、剃髪して僧衣に装束を改め、惣五という俗名を宗悟という法名に改めた。そのことによってこの黒髪山106句が

生まれたのだ。「衣替」の二字は季節を表すだけでなく、出家の感慨も込められていて、力強さを持って響いている。

社殿から二十丁余り登って行くと滝がある。岩洞の頂上から水が飛び流れること百尺、たくさん岩の重なり合う碧の滝壺へと落ちていく。岩窟に身を潜めて入って、滝を裏側から眺めるので、裏見の滝と申し伝えられているということだ。

暫時は…裏見の滝の岩屋に身を潜めて、しばらくを清浄な気持ちで過ごすことだ。仏道修行の夏籠もりの初めとして。

構成

三月三十日 日光山の麓 泊

宿の主人は仏五左衛門正直者 名と人

四月一日 日光東照宮参詣尾

二荒↓日光 空海大師 改名

二荒山 開基 勝道上人(芭蕉の間違い)

二荒山―春秋に暴風が吹いた

あらたふと青葉若葉の日の光

季語 () 季節 ()

◎二つのものの組み合わせ ◎一つの主題

◎青葉 若葉

◎日光山の爽快さ(東照宮敬慕)

◎日の光

黒髪山に登る。

剃り捨てて黒髪山に衣替

曾良(弟子 同行 僧侶) 目的地 松島 象潟

季語 () 季節 ()

◎黒髪山

◎衣替の感動

◎剃髪

山に登る。うらみの滝

暫時は滝に籠るや夏の初

季語 () 季節 ()

◎暫時

◎夏安居の感動

◎滝に籠る

歌枕 黒髪山 松島 象潟

(日光) 解答

—

1 ふもと2よろず 3 じよくせいじんど4 じげん5 そうもん 6 につじきじゅうれい 7
ただ 8 むちむふんべつ 10 へんこ11 こうきばくとう12 きひん13 せいしつ
14 もつとも 15 うづき16 ついたち17 おやま18 けいはい 19 そのかみ 20
みひかり21 おんたく 22 はっこう23 あんど24 すみか 25 なお26 はばかり
28 そり29 くろかみやま 30 ころもがえ 31 そら 32 しんすい 33 きさ
かた 34 ところこび 35 かつ
36 きりよ 37 すみぞめ 38 よつて 39 がんとうのいただき 40 へきたん 4
1 がんくつ 42 しばらく
二 1 主人 2 旅。旅寝。3 神仏が衆生救済のためさまさまに身を変えて現れるこ
と。

4 生まれつき先天的な気質。5 遠慮。6 旅。7 黒く染めた僧衣。8 夏三か
月間僧が一室にこもって修行すること。

三 1 仏五左衛門 2 芭蕉と曾良 3 泊めてくれる。4 仏五左衛門 5 日光山。

6 士農工商 7 武士 8 芭蕉 9 曾良 10 曾良が芭蕉を

11 武士が僧侶になった。12 衣替えに季節と出家の感慨が子守から。13 裏見の

滝

14 滝の裏よりみれば

四 1 尊敬 仏五左衛門が芭蕉と曾良を 2 助動詞 ぬ 終止形 完了

3 形容詞 白し 終止形

俳句

あらたふと青葉若葉の日の光 季語 (若葉) 季節 (夏)

剃り捨てて黒髪山に衣替

曾良(弟子 同行 僧侶) 目的地 松島 象潟

季語 (衣替) 季節 (夏)

暫時は滝に籠るや夏の初

季語 (夏) 季節 (夏)

おくのほそ道（塩谷）	曾良旅日記
虚構 那須の黒羽と言ふ所に知る人あれば、是より野越えにかかりて、直道をゆかんとす。遙かに一村を見かけて行くに、雨降り日1暮る。農夫の家に一夜着。をかりて、明くれば又野中を行く。 1そこに野飼の馬あり。草刈るをのこに2なげきよれば、野夫といへどもさすがに情しら2ぬには非3ず、「いかがすべきや。されども此の野は東西縦立。鷹内へ二リ八丁。鷹内ヨリヤイ横にわかれて、うひうひしき旅人の道ふみたがへタへ壱リ二近シ。ヤイタヨリ沢村へん、あやしう侍れば、3此の馬のとどまる所にて馬壱リを返し給へ。」と、かし4侍りぬ。 ちひさき者ふたり、馬の跡したひてはしる。一人太田原ヨリ黒羽根へ三リト云ドモは小姫にて名を「かさね」と言ふ。聞きなれ5ぬ名ニリ余也。 の6やさしかりければ、 かさねとは八重やへ撫子の名なるべし 曾良 やがて人里に至れば、あたひを「鞍つぽに結び付けて、馬を返し7ぬ。」	事實 四月二日 船入ヨリ玉入へ式リ。未ノ上尅ヨリ雷雨甚強、漸ク玉入へ。一 同晩 玉入泊。宿悪故、無理ニ名主ノ家入テ宿カル。 同三日 快晴。辰上尅、玉入ヲ鷹内へ二リ八丁。鷹内ヨリヤイ横にわかれて、うひうひしき旅人の道ふみたがへタへ壱リ二近シ。ヤイタヨリ沢村へん、あやしう侍れば、3此の馬のとどまる所にて馬壱リを返し給へ。」と、かし4侍りぬ。 沢村ヨリ太田原へ二リ八丁。 ちひさき者ふたり、馬の跡したひてはしる。一人太田原ヨリ黒羽根へ三リト云ドモは小姫にて名を「かさね」と言ふ。聞きなれ5ぬ名ニリ余也。 翠桃宅、ヨゼト云所也トテ、式十丁程アトヘモドル也。

（注）

「鞍つぽ」馬鞍の前輪と後輪の間。人がまたがる部分。
語釈

一 次の語の意味を現代仮名遣いで記せ。

- 1 是 2 野越 3 直道 4 遙かに 5 野飼 6 野夫 7 非ず
8 縦横 9 小姫 10 撫子 11 鞍

二 次の語の意味を辞書で調べよ。

- 1 野飼
2 うひうひし
3 あやし
4 やがて

5 あたひ

三 傍線部1～3の問いに答えよ。

1 指示内容を記せ。

2 具体的にどういうことか。

3 具体的にどういうことか。

四 二重線部1～7の文法問題に答えよ。

1 品詞名 基本形 活用形 活用の種類

2 品詞名 基本形 活用形 文法的意味

3 品詞名 基本形 活用形 文法的意味

4 品詞分解 口語訳

5 品詞名 基本形 活用形 文法的意味

6 品詞名 基本形 活用形 7 品詞名 基本形 活用形 文法的意味

五 (塩谷) 口語訳

那須の黒羽というところに知人がいるので、この日光从那須野越えにかかって、真つ直ぐの近道を行こうとした。遙か遠くに見える村を目当てに歩いていくうちに、雨が降り出し、日が暮れた。農夫の家に一夜の宿を借りて、夜が明けるとまた野原の中を歩き続ける。

そこに放し飼いの馬がいた。草を刈っていた男に泣きつくと、荒くれの野夫とはいえずがに情を知らないわけではなく、「さてどうしたものかなあ。(自分が馬を引いて案内するわけにはいかないし)」といって、この野は道が東西縦横に分かれて、初めて来たような旅の人では迷っちゃまうだろう。心配だから、この馬を貸してやろう。この馬が動かなくなつたところで、馬を追い返しなされや」と、馬を貸してくれた。小さな者が二人、馬の後を慕つてついてくる。ひとりは女の子で名前を「かさね」という。聞き慣れない名が、優雅に感じられたので、

かさねとは…子どものことはよく撫子にたとえるが、とすれば「かさね」という名のこの子は「八重撫子」にちがいない。ほどなく人里に辿りついたので、駄賃を鞍壺に結び付けて馬を返した。

構成

四月二日

玉入泊

日光から黒羽へ 草原 馬に乗っていく。馬は帰る。

かさねとは八重撫子の名なるべし 曾良（曾良に仮託した芭蕉の代作）

季語 （ ） 季節 （ ）

○かさねⅡ少女の名 名と人

◎愛らしい童女

○八重撫子

（塩谷）解答

一 1これ2のぐえ3すぐみち4はるかに5のがひ6やぶ7あらず

8じゆうわう9こひめ10なでしこ11くら

二1 家畜を野原に放し飼育すること。放牧。 2 物慣れていない。うぶだ。

3 心配だ。 4 1そのまま。2 すぐに 3 すなわち 4 まったく7 ⑤まもなく

三 1野中。2 馬に乗せて道案内をしてほしい。 3 馬が止まったら下りて馬を返せ。

四 1 動詞 暮る 連体形 ラ行 下二段

2 助動詞 ず 連体形 打消し

3 助動詞 ず 終止形 打消し

4 侍り 動詞 ラ変 侍り 連用形 ぬ 助動詞 ぬ 終止形 完了

かしました

5 助動詞 ず 連体形 打消し

6 形容詞 やさし ク活用 連用形

7 助動詞 ぬ 終止形 完了

俳句

かさねとは八重撫子の名なるべし 曾良（曾良に仮託した芭蕉の代作）

季語 （撫子） 季節 （夏）

おくのほそ道 (黒羽) 虚構	曾良旅日記 事実
黒羽の1の館代浄坊寺何がしの方に音信る。思ひがけ1ぬ1あるじの悦び、日夜語りつづけて、其の弟2桃翠など言ふが、朝夕勤めとぶらひ、2自らの家にも伴ひて、親族の方にもまねかれ、日を2ふるままに、ひとひ郊外に逍遙して18犬追物の跡を一見し、19那須の篠原をわけて20玉藻の前の古墳をとふ。それより21八幡宮に詣づ。22与市宗高扇の的を3射し時、「別しては我が国の氏神正八幡」とちかひしも、3此の神社にて待ると聞けば、感応殊にしきりに覚えらる。暮るれば桃翠宅に帰る。23修験光明寺と言ふ有り。4そこまねかれて、24行者堂を拝す。 夏山に足駄を拝む首途かな p255当国25雲岸寺のおくに26仏頂和尚山居の跡あり。「堅横の五尺にたらぬ草の庵むすぶもくやし4雨なかりせばと5松の炭して、岩に書き付け侍り。」と、いつぞや聞え給ふ。其の跡みると、雲岸寺に杖を曳けば、人々すすんで共にいざなひ、若き人おほく道のほど打ちさはぎて、おぼえず彼の麓に到る。山はおくあるけしきにて、谷道遙に松杉黒く、苔しただりて、卯月の天、今猶なほ寒し。25十景尽つくる所、橋をわたつて山門に入る。 26やうい、かの跡はいづくのほどにやと、後の山によちのげれば、石上の小庵、岩窟にむすびかけたり。28妙禅師の死関、29法雲法師の石室をみるがごとし。 木啄も庵はやぶらず夏木立 と、とりあへぬ一句を柱に残し侍りし。	四月三日 快晴。辰上尅、玉入ヲ立。鷹内ヘ二リ八丁。鷹内ヨリヤイタヘ壱リニ近シ。ヤイタヨリ沢村ヘ壱リ。沢村ヨリ太田原ヘ二リ八丁。太田原ヨリ黒羽根ヘ三リト云ドモ二リ余也。翠桃宅、ヨゼト云所也。式十丁程アトヘモドル也。 一 四日 浄法寺図書へ被_レ招。 一 五日 雲岩寺見物。朝曇。両日共二天気吉。 一 六日ヨリ九日迄、雨不_レ止。九日、光明寺へ被_レ招。昼ヨリ夜五ツ過迄ニシテ帰ル。 一 十日 雨止。日久シテ照。 一 十一日 小雨降ル。余瀬翠桃へ帰ル。晩方強雨ス。 一 十二日 雨止。図書被二見廻一、篠原被二誘引一。 一 十三日 天気吉。津久井氏 被_レ見廻而*、八幡へ参詣被_レ誘引。 一 十四日 雨降り、図書被二見廻一終日。重之内持参*。 一 十五日 雨止。昼過、翁と鹿助右同道ニテ図書へ被_レ参*。是ハ昨日約束之故也。予ハ少々持病氣故不参。

(注)

15 館代浄坊寺何がし―館代家老浄法寺図書高勝。鹿子畑佐内高明の長男で、浄法寺図書高政の養嗣子となった。当時二十九歳。俳号は秋鴉しゅうあ、あるいは桃雪。16 桃翠―翠桃の誤記。鹿子畑善太夫豊明。鹿子畑佐内高明の次男で、浄法寺高勝の実弟。当時二十八歳。17 犬追物―四十一ページ・注10参照。18 那須の篠原―「もののふの矢並みつくろふ籠手の上に霰たばしる那須の篠原」(四十二ページ参照)を踏まえている。19 玉藻の前の古墳―三国伝来の金毛九尾の妖狐が玉藻の前として鳥羽上皇(一説に近衛天皇)の寵姫となったが、安倍泰成に調伏され那須野に逃げて三浦介義明らに射殺され、その怨霊が殺生石と化した(三十六ページ『殺生石』参照)。大田原市川西の篠原神社(玉藻稲荷)の付近に「狐塚址」があるが、芭蕉の訪ねた古墳がどこであるかは明らかではない。20 八幡宮―大田原市南金丸にある那須神社。那須与一が那須神社に命中を祈願した記事は『源平盛衰記』に見える。21 与市宗高―那須与一宗隆。三十一ページ参照。22 修験光明寺―大田原市余瀬にあった即仏山光明寺。23 行者堂―役行者えんのぎょうじゃの像を安置する堂。24 雲岸寺―大田原市雲巖寺にある東山雲巖寺。臨済宗の古刹。25 仏頂和尚―河南哮吼。一六四二(寛永十九)年―一七一五(正徳五)年。鹿嶋根本寺二十二世、芭蕉参禅の師。雲巖寺とゆかりが深かった。26 十景―雲巖寺十景。霊石之竹林・海岸閣・十梅林・竜雲洞・玉几峰・鉢孟峰・玲瓏岩・千丈岩・飛雪亭・水分石をいう。27 妙禅師の死関―妙禅師とは、中国南宋時代の高僧原妙禅師。杭州天目山の張公洞に入り、「死関」と称し十五年間戸を閉ざして入寂した。28 法雲法師の石室―法雲法師とは中国南宋時代の中峰明本。原妙禅師の法を嗣ぎ、原妙禅師入寂後、死関の傍らに庵を結んだ。

語釈

一次の語の意味を現代仮名遣いで記せ。

1 館代 2 音信る 3 桃翠 4 自ら 5 逍遙 6 犬追物 7 玉藻

8 詣づ 9 感応殊に 10 修験 11 行者堂 12 足駄 13 首途 14 雲岸寺

15 仏頂和尚山居 16 曳け 17 谷道遙か 18 卯月 19 妙禅師の死関

20 木啄 21 夏木立

二次の語の意味を辞書で調べよ。

1 ひとひ

2 逍遙

- 3 庵
- 4 いざなふ
- 5 卯月
- 6 山門

三 傍線部1～5の問いに答えよ。

- 1 誰のことか。
- 2 誰の家か。
- 3 指示内容を記せ。
- 4 指示内容を記せ
- 5 どういう生活がわかるか。

四 二重線部1の文法問題に答えよ。

- 1 品詞名 基本形 活用形 文法的意味
- 2 品詞名 基本形 活用形 活用の種類
- 3 品詞分解 口語訳
- 4 品詞分解 口語訳

五 (黒羽) 口語訳

黒羽藩の館代家老を務める浄坊寺某という人のもとを訪れた。主人は思いがけない訪問に喜んで昼も夜も話が尽きず、さらにはその弟の桃翠などという人が朝な夕なに相手をしに訪ねてくれ、桃翠は私たちを自分の屋敷にも連れて行き、また親族の家にも招かれるという具合で日を送っていたのであるが、ある一日、郊外を散策して犬追物の跡を見物し、那須の篠原を分け入って玉藻御前の古い塚を訪ねた。それから八幡宮に参詣した。那須与一が扇的を射た時、「とりわけ我が郷国の氏神であられる正八幡様」と誓いを捧げたのもこの神社なのだと聞くと神徳のありがたさもひとしお強く感じられる。日が暮れたので桃翠の屋敷に帰った。修験光明寺という寺がある。そこに招かれて行者堂を拝観した。

夏山に：青く幾重にも連なる山並みが望まれる。その夏山への門出に、自分は今、峰々を踏破した役行者にあやかりたいものと、行者の高足駄を拝むことである。

この下野国の雲巖寺の奥に仏頂和尚が山庵住まいをなさった跡がある。

「『豎横の五尺にたらぬ草の庵むすぶもくやし雨なかりせば』(五尺四方にも満たない小さな庵ではあるけれども、そんな小庵を結ぶのも口惜しいことだ。もし雨さえ降らなければなあ)」と松明の燃えさしで岩に書きつけました」と、いつであったか和尚がおっしゃったことがあった。その跡を見ようと雲巖寺に杖について出かけて行くと、人々がす

誘い合ってつき従い、一行には若い人が多く、道中は賑やいで気がつくとも雲巖寺のある山の麓に着いていた。山は奥深い様子で谷沿いの道は遙かに続き、松や杉は暗く茂り、苔を伝って露がしたたり、四月というのに空は今なお寒い。雲巖寺十景を見尽くしたところで橋を渡り、山門をくぐった。

さて、くだんの仏頂和尚の山庵跡はどのあたりだろうかと後ろの山によじ登ってみると、石の上に小さな庵が岩屋に寄り添うように結んである。妙禪師の死関、法雲法師の石室を目の当たりにする思いがした。

木啄も：仏頂和尚の庵の跡は夏木立に囲まれて森閑と静まりかえっている。その静かさの中で啄木鳥の木を叩く音がしきりと聞こえるが、その啄木鳥も仏頂和尚の尊い山庵は突き破らなかつたとみえて、今も往時を偲ばせてくれることだ。と、さしあたって一句を「詠み、柱に書き残した。

構成

四月三日～十五日 黒羽家城代家老浄坊寺宅 弟桃翠宅

見学 犬追物 那須野篠原 玉藻稻荷神社 光明寺 行者堂

夏山に足駄を拝む首途かな 季語（ ）季節（ ）

○夏山

◎奥州路への覚悟

○足駄（役の行者の足駄）

見学 雲岩寺 山門 仏頂和尚の庵の跡

木啄も庵はやぶらず夏木立 季語（ ）季節（ ）

○木啄

◎尊い庵に感動

○庵

歌枕 那須野篠原

(黒羽) 解答

- 一 1 かんたい 2 おとず 3 とうすい 4 みずか 5 しょうよう 6 いぬおうもの
7 たまも
8 もう 9 かんおうこと 10 しゅげん 11 ぎようじゃどう 12 あした 13 かどで 14
うんがんじ
15 ぶつちようおしょうさんきよ 16 ひ 17 たにみちはるか 13 うづき 19 みようぜんじ
のしかん
20 きつつき 21 なつこだち
二 1 1 いちにち 2 一日中 ③ ある日 4 ついたち 2 散策 3 粗末な仮の家。 4 誘う。
5 四月。 6 正門。
三 1 浄坊寺某 2 桃翠 3 八幡宮 4 修験光明寺 5 簡素な生活
四
1 助動詞 ず 連体形 打ち消し 2 動詞 ふ 連体形 八行下二
3 射 動詞 射る 連用形 ヤ行 上二段 し 助動詞 き 連体形 過去 時 名詞
射た時
4 雨 名詞 なかり ク活用 形容詞 なし 連用形 せ 助動詞 き 未然形 過去
ば 接続助詞 仮定 雨が降らなかったなら

俳句

夏山に足駄を拝む首途かな

季語（夏山）（季節）（夏）

木啄も庵はやぶらず夏木立

季語（夏木立）（季節）（夏）

おくのほそ道 (那須) 虚構	曾良旅日記 事実
これより30殺生石に行く。館代より馬にて送らる。こ の口付きのをのこ、1「短冊1得させよ。」と乞ふ。やさ しきことを望みはべるものかなと、 野を横に馬引き向けよほととぎす 殺生石は温泉の2いづる山影にあり、石の毒氣いまだ滅 びず、蜂・蝶のたぐひ、真砂の色の見えぬほど重なり2死す。 又、31清水3流るるの柳は、32蘆野の里にありて、田 の畔に残る。この所の33郡守戸部某の、「この柳見せば や。」など、折々にのたまひ聞こえ給ふを、いづくのほ どにやと思ひしを、今日3此の柳の陰にこそ立寄りはべ りつれ。 田一枚4植ゑて立ち去る柳かな	一四月 十六日(四月) 天氣能。翁、館ヨリ余瀬へ被二立越一。則、同道ニテ余瀬ヲ立。及、昼、圖書・彈藏ヨリ馬人ニテ被二送ル。馬ハ野間ト云所ヨリ戻ス。此間式里余。高久ニ至ル。雨降り出ニ依、滞ル。此間老里半余。宿角左衛門、圖書ヨリ状被二添。 一 十七日 角左衛門方ニ猶宿。雨降。野間は太田原ヨリ三里之鍋かけヨリ五、六丁西。 一 十八日 卯尅、地震ス。辰ノ上尅、雨止。午ノ尅、高久角左衛門宿ヲ立、圖書ヨリ状被二添。

(注)

30 殺生石―四十一ページ・注1参照。31 清水流るるの柳―「道の辺に清水流るる柳陰しばしとしてこそ立ちどまりつれ」(西行・『新古今和歌集』)による。現在も「遊行柳」と称さ

れて柳の木が植えられているが、西行の歌はこの地で詠まれたものではない。32 芦野―那須郡那須町芦野。33 郡主戸部某―芦野民部資俊。

語釈

一 次の語の読みを現代仮名遣いで記せ。

1	殺生石	2	蘆野	3	館代	4	短冊	5	請ふ
6	蜂	7	蝶	8	真砂	9	清水	10	芦野

二 次の語の意味を辞書で調べよ。

- 1 短冊
2 口付
3 やさし
4 真砂

三 傍線部1、3の問いに答えよ。

1 「この言葉に芭蕉は何をあげたか。

2 主語を記せ。

3 指示内容を記せ。

4 主語を記せ。

四 二重線部1、3の文法問題に答えよ。

- | | | | | | |
|---|-----|-----|-----|-----|-----|
| 1 | 品詞名 | 基本形 | 活用形 | 活用形 | 活用形 |
| 2 | 品詞名 | 基本形 | 活用形 | 活用形 | 活用形 |
| 3 | 品詞名 | 基本形 | 活用形 | 活用形 | 活用形 |

五 (那須) 口語訳

これから殺生石に行く。館代より馬で送られる。この口つきの男が、「短冊を欲しい。」と頼む。風情があることを望みますなあと、

野原の中、ほととぎすが鳴いている。鳴いている方に馬を向けよ。

殺生石は温泉の出る山陰にあり、石の毒気はまだほろびないで蜂・蝶のたぐいは小さな砂の色が見えないほどに重なり死んでいる。

また清水流れるという柳は蘆野の里にあって田の畔に残っている。ここの郡代戸辺なにがしが、「この柳を見せたい。」など、そのつどにおっしゃりもうしなざるのを、どのへんだらうと思っていたのを、今日この柳の陰に立ち寄りもうした。

田を一枚植えて立ち去った。そこにあの柳がある。

構成 殺生石への途中 馬に乗る 口つきの男

野を横に馬引き向けよほととぎす 季語 () 季節 () ()

○野原の中 馬

◎ほととぎすへの思い

○ほととぎす

季語 植えて 季節 夏 修辞法 かな 切れ字

蘆野 遊行の柳

田一枚植ゑて立ち去る柳かな 季語 (季節) (かな)

○田植え 農民

◎西行法師の柳への感慨

○柳に関心を持つ 芭蕉

(参考) 遊行の柳

西行法師 (1118～1190)

短歌 「道のべに清水流るる柳陰しばしとてこそ立ち止まりつれ」

清水 柳・・・しばし立ち止まる。

観世信光 (1435～1516)

謡曲 (能の詞章) 「遊行柳」

遊行上人 (一遍上人) の旅

芭蕉 (1689年6月6日)

俳句 「田一枚植ゑて立ち去る柳かな」

柳 田植え・・・田植えをする間 長居した。西行を偲ぶ。

(那須) 解答

一 1 せつしようせき 2 あしの 3 かんだい 4 たんざく 5 こ 6 はち

7 ちよう 8 まさし 9 しみず 10 あしの

二 1 字を書いたり物に結びつけたりする細長い紙。②和歌や俳句などを書く細長い半紙 (江戸時代に始まる。35センチ×6センチ) 2 馬や牛の手綱を取る。3 風流だ。

4 こまかい砂

三 1 「野を横に馬引き向けよほととぎす」の俳句 2 蜂、蝶の類 3 遊行の柳

4 農民

四 1 動得未得ア下二 2 動いづ体ダ下二 3 動流る体ラ下二

文学史

おくのほそ道

一六三七（寛永十四）年～一六九二（元禄五年）。俳号は桃酔。おくのほそ道 俳諧紀行。一六九四（元禄七）年成立。松尾芭蕉が一六八九（元禄二年）三月末に深川を出発して、関東・奥羽・北陸の名所を巡遊し、八月に大垣に至り、さらに伊勢に向かうまでの、日数百五十日、行程六百里に及ぶ旅を、俳諧をまじえて描く。本文は旧暦元禄二年三月二十八日から四月二十日までの二十二日間にわたる栃木県に関する部分の全てである。

松尾芭蕉

一六四四（寛永二十一年）～一六九四（元禄七年）年伊賀生まれ。伊賀上野藩に仕えたが、北村季吟のもとで貞門俳諧を学び、江戸に出て談林派と交流を持ちながら俳諧宗匠として暮らした。「不易流行」・「わび」・「さび」・「しをり」といった独自の句境を切り開き、俳諧を芸術にまで高めた。代表作に句集『猿蓑』『冬の日』、紀行文『野ざらし紀行』など。

参考

第26回 黒羽芭蕉の里全国俳句大会

1915年6月28日

8 心をのまるる蛇の形宇都の宮に欲のはなれぬ漆屋

井原西鶴

『本朝二十不孝』

*登場人物を全て○で囲み、中心となる語を□で囲め。

1 段

○1 極月の十三日の、明け方より、畳を扣きたて、春待つ宿の煤払い、小笹の2当座簾も、塵に埋もれ、人はなほ、埃を被き1ぬれば、水風呂を焼いて、「入り加減、よし」といふ1女のいへば、2男聞きて、「3新湯は、人の身に毒なり。先づ、隠居の親仁を入れよ」と、心にある事を、口に出次第にいひける。

注 ㊦ 注1 極月十三日―歳末の行事として、十二月十三日に煤払いをする習慣があつた。
2 当座簾―使い捨ての簾。

語釈

一次の語の読みを現代仮名遣いで記せ。

1 極月 2 扣き 3 煤 4 小笹 5 当座簾 6 埋もれ 7 埃 8 被き

9 水風呂 10 新湯 11 先づ 12 親仁 13 出次第

二次の語の意味を辞書で調べよ。

1 本朝

2 不孝

3 水風呂

4 新湯

三 傍線部1～3の問いに答えよ。

1 誰のことか。

2 誰のことか。

3 理由を説明せよ。

四 二重線部1の文法問題に答えよ。

1 品詞名 基本形 活用形 文法的意味

五 口語訳

師走十三日の明け方から畳をたたいて新春を迎える家の煤払い、小笹で作った当座簾も塵だらけ、人はなおさらほこりまみれになってしまったので、風呂を沸かして「湯加減もよろしゅうございます」とその名もよしという妻女がいうと、亭主これを聞いて、「新湯は体に毒だ。まず隠居の親父を先に入れろ」と心に思っていることを口にまかせて言い放った。

1 段解答

一 1 ごくげつ 2 たた 3 すす 4 0 ぎや 5 とろぎばはき 6 うず 7 ほこり 8 かづ
9 すいふろ 10 あらゆ 11 ま 1 2 おやじ 13 ほしい

二 1 日本の朝廷。日本。対義語 異朝 2 親に対して子としての道を守らないこと。

対義語 孝行 3 桶の下の竈で火を焚き、自らわかす方式の風呂。対義語 蒸し風呂

4 わかしたままで、まだ誰も入っていない風呂。同義語 さら湯

三 1 妻 2 夫 3 浸透圧で養分が出るから。

四 1 助動詞 ぬ 已然形 完了

2 段

不孝は1これにて、よろずも知れたる人、3陸奥、宇津宮といふ所に住み1し、漆屋武太夫といふ商人なるが、始めはわづかに、硫黄・燈心を、肩に置きて、山家にかよひて、世をわたりけるが、いまだ四五年に2出来分限、人もふしぎ立てける。されども、この男、つねづね子細なき者なれば、さのみ人も疑はず、「大黒天の袋を拾ふか、5狐福ならん」と、沙汰し侍る。人のしあわせは、しれぬ物ぞかし。

注

3 陸奥宇津宮―下野国宇都宮のこと。陸奥も下野も良質の漆を産したことで知られていたための誤記と考えられる。4 出来分限―にわか成金。5 狐福―稲荷の使いである狐から授かった思いがけない福德。

語釈

一 次の語の読みを現代仮名遣いで記せ。

1 陸奥 2 漆屋 3 武太夫 4 商人 5 硫黄 6 燈心 7 山家 8 出来分限
9 子細 10 大黒天 11 沙汰

二 次の語の意味を辞書で調べよ。

1 山家

2 わたる

3 子細

4 沙汰

三 傍線部1・2の問いに答えよ。

1 指示内容を記せ。

2 (1) 同じ意味の箇所を抜き出せ。

(2) その理由を記せ。

四 二重線部1の文法問題に答えよ。

1 品詞名 基本形 活用形 文法的意味

五 口語訳

親不孝であることはこの話一つで万事にわたり想像できようもの、この人は陸奥の宇都宮というところに住んでいた漆屋武太夫という商人であるが、最初はほそぼそと硫黄や灯心を肩にかついで田舎を行商して生計を立てていたのだが、わずか四、五年でにわか成金となり、世間の人も不思議がった。けれどもこの男は、普段はこれといって悪事を働く者でもなかったのだ、それほど人も疑うことをせず「大黒様の袋を拾ったか、狐福がついたのか」と噂をした。人の幸運というものは、わからないものなのだ。

2 段解答

- 一 1 みちのく 2 うるしや 3 ぶだゆう 4 あきんど 5 いおう 6 とうしん 7 やまが 8 できぶげん 9 さい 10 だいこくでん 11 さた
- 二 1 山中にある家。 2 暮らす。 3 不都合。 4 論議。
- 三 1 この風呂の話。 2 (1) 「俄かにたのしければ」 (2) 大隈川で固まった漆を取った

四 1 助動詞 き 連体形 過去

3 段

しかれども分限に品々あり。1 世間にかはらず、その身相応な衣類を1着て、朝夕も折ふしの魚鳥を味はひ、貧なる親類を取り立て、下々を憐れみ、神を祭り、仏の道を願ひ、親に楽しみをあたへ、他人の義理をかず、万事、直にして、富貴なるは、天の恵みふかく、ひとの本意なり。

語釈

一 次の語の読みを現代仮名遣いで記せ。

1 分限 2 魚鳥 3 下々 4 憐れみ 5 直 6 富貴

二 次の語の意味を辞書で調べよ。

1 分限

2 下々

3 富貴

三 傍線部1の問いに答えよ。

(1) どういうことか。

(2) 具体的に言っている個所を抜き出せ。

四 二重線部1の文法問題に答えよ。

1 品詞名 基本形 活用形 活用の種類

五 口語訳

けれども金持ちにもさまざまな生きようがある。世間と変わらず分相応な着物を着て、朝夕の食事も季節季節の魚や鳥を食べ、貧しい親類を盛り立て、使用人たちに憐れみをかけ、神を祀り、仏の道を願ひ、親に娯樂を与え、他人との付き合いも義理を欠かさず、万事につけ正直を通してしかも裕福であるのは天の恩恵の深い人で、人間としての本意になつてゐる。

3 段解答

一 1 ぶげん 2 ぎよてう 3 したじた 4 あわ 5 すなお 6 ふうき

二 1 身の程。②金持ち。2 身分の低い人々。3 財産があり地位が高いこと。

三 (1) 世間並みに暮らす。(2) 「その身相応な……人の本意なり」

四 1 動詞 着る 連用形 力行上二段活用

4 段

世の有様を1見るに、1まこと有りて世上に住む人、稀なり。それは、当分家栄へても、滅亡するに程なし。ただ、正直にしてなりはひに一生を送らんは、心の取り置きひとつなり。此の武太夫、俄にたのしければ昔を忘れ、時得て我ままを振舞へば、所に憎み立てられ、人のつきあひ絶へて、我が内の竈將軍、寒ひも暑いも知らず暮らし2ぬ。

語釈

一 次の語の読みを現代仮名遣いで記せ。

1 世上 2 稀に 3 当分 4 此の 5 俄に 6 竈

二 次の語の意味を辞書で調べよ。

1 まこと

2 世上

3 稀

4 なりはひ

5 たのし

三 傍線部1の問いに答えよ。

1 具体的にどうい人か。

四 二重線部1の文法問題に答えよ。

1 品詞名 基本形 活用形 活用の種類

2 品詞名 基本形 活用形 文法的意味

五 口語訳

世の中のありさまを見てみるに、誠実であつて裕福であるという人はまれである。不誠実な人は当分の間は家が栄えても遠からず破綻してしまうものである。ひたすら正直を通して家業に一生を送ろうとすることは心の持ちようひとつでできるものである。この武太夫は急に裕福になったので、昔のことを忘れ、今が裕福なのにまかせて我が儘にふるまうので、土地の人たちから憎まれ、人との付き合いも途絶えながらも、わが家の中の寵將軍となつて暑さも寒さも知らずぜいたくに暮らした。

4 段解答

一 1せじよう 2まれに 3とうぶん 4この 5にわかに 6かまど

二 1誠実。 2 世の中。 3 めったにない。 4 職業。 5 1楽しい。②豊かだ。

三 1誠実で裕福な人

四 1動詞 見る 連体形 マ行上二段活用 2 助動詞 ぬ 終止形 完了

5 段

そもそも、有徳になりけるは、山里に通ふ時、6大隈川の水上みに、細き枝えだ河の続き、その流れの元は、谷ふかく、岩組みするどにして、落ちかかる滝の音に、耳をとどろかし1ぬ。木立茂みて、陰くらく、葉ず多に白玉砕き、不断、時雨のごとし。水底、夏さへ氷を破り2ぬ。

6 1この川に、7江鮭の魚住みけるに、武太夫、水練をえて、これに入り、手どらへにして、たびたび、人をもてなしける。

注 6大隈川―福島県西白河郡西郷村の大熊川（阿武隈川）か。7江鮭の魚―サケ科の淡水魚。ビワマス。

語釈

一 次の語の読みを現代仮名遣いで記せ。

1有徳 2大隈川 3水上 4木立 5陰く 6白玉 7時雨 8水底 9江鮭

二 次の語の意味を辞書で調べよ。

1 有徳

2 水練

三 傍線部1の問いに答えよ。

1 指示内容ををせ。

四 二重線部 1・2 の文法問題に答えよ。

- 1 品詞名 基本形 活用形 文法的意味
2 品詞名 基本形 活用形 活用の種類

五 口語訳

そもそも裕福になったのは、山里を行商していたとき、大隈川の川上に細い支流が流れ込んでいるが、その支流を遡った水源は谷が深く、岩の組みようも鋭く、落ちかかる滝の音は耳に

とどろきわたるほどである。木立は茂つてその陰は暗く、滝は葉末に砕けて白玉を散らし、そのあたりはいつも時雨が降るようであった。水底は夏さえ氷を割るほどの冷たさである。この川には鱒が住んでいたのだが、武太夫は得意の泳ぎで水に入り、鱒を手づかみに捕らえてはたびたび人をもてなした。

5 段解答

一 1 うとく 2 おほくまがわ 3 みなかみ 4 こだち 5 くら 6 しらたま 7 しぐれ

8 みなそこ 9 あめ

二 1 1 徳があること。 ② 金持ち。三 大隈川

四 1・2 助動詞 ぬ 終止形 完了

6 段

ある時、淵と思ふ所を捜しけるに、1 黒き物、山のごとく1 見えけるを、一つかみ、取りあげれば、峰より、年々流れ込みて、かたまりし2 漆なれば、忍びて器をこしらへ、我が宝にして、8 取りて帰り、これを商売するにぞ、只取る金銀、後には、3 置き所もなかりし。人みな4 気を付けければ、なほ欲心深きたくみして、細工の上手に、5 竜をつくらせ、水中に沈め置きしに、さながら、「生きて動くごとく、日数ふりて、これを見るに、口を動かし、尾を延べ、9 剣を縮め」、6 それとは知りながら、2 恐ろし。

注 8 取りて帰り―漆の密採取は禁じられていた。9 剣―竜の爪。

語釈

一 次の語の読みを現代仮名遣いで記せ。

1 峰 2 器 3 細工 4 竜 5 動く

二 次の語の意味を辞書で調べよ。

1 忍ぶ

三 傍線部 1～6 の問いに答えよ。

- 1 何か。
- 2 何故こうしたか。
- 3 何がか。
- 4 誰に。
- 5 なぜこうしたか。
- 6 何と知っているのか。
- 「」の部分はヨーロッパの例で言うとな何になるか。
- 四 二重線部1・2の文法問題に答えよ。
- 1 品詞名 基本形 活用形 活用の種類
- 2 品詞名 基本形 活用形 活用の種類
- 五 口語訳

ある時、淵と見えるところに鱒を求めると、黒い物が山のように見えたので、それをつかみ取って水から上がると、それは峰から毎年毎年流れ込んで固まった漆であつたので、武太夫はこつそり器をこしらえ、宝物として取って帰り、これを商売にすると、ただでもうける金や銀、後にはその金銀を置く場所もなくなつた。世間の人が自分に注意を向けているので、さらに欲深いたくらみをして、上手な細工師に竜を作らせ、水中に沈めて置いたところ、あたかも生きて動いているようで、しばらくたつてこれを見ると、口を動かし尾を伸ばし、剣を縮めなどするので、細工物とは知りながら恐ろしく感じる。

6 段解答

- 一 1 みね 2 うつもの 3 さいく 4 りよう 5 はたら
- 二 1 こつそり 三 1 漆 2 漆は免許制で、密採取になるから。 3 金銀。 4 武太夫に
- 5 漆を守るため。 6 細工物とは知りながら。「」ピノッキオ

四 1 動詞 見ゆ 連用形 ヤ行下二段活用

7 段

この事、宿に帰り、親に語れば、「されば、人間は、欲に限りなし。この上の願ひ、何かあるべし。平に止めよ」と、さまざま異見せしに、かへつて、親に仇をなし、己が一子に、武助といひし、十四になるを、引き連れて、かの淵に行きて、次第を語り聞かせ、「我がごとく、取りならへ」と、親子とも入りしに、1 最前の竜に精ありて、2 武助をくはへて、振るとみえしを、かなしく、藻屑の下に、3 身を沈め、二人ともに、息1絶えて、二十四時を過ぎて、4 骸の上がりけるぞ、見る人、親の恥なりと憎み、哀れと云ふ者なし。

語釈

一 次の語の読みを現代仮名遣いで記せ。

1 平に 2 止めよ 3 異見 4 仇 5 己が 6 竜 7 藻屑
8 二十四時 9 骸

二 次の語の意味を辞書で調べよ。

1 仇

2 次第

三 傍線部 1～4 の問いに答えよ。

1 何か。

2 なぜこうしたか。

3 主語を記せ。

4 何か。

四 二重線部 1 の文法問題に答えよ。

1 品詞名 基本形 活用形 活用の種類

五 口語訳

このことを家に帰って親に話したところ、親は「なるほど人の欲には限りがない。

これ以上の望みをして何があるというのか、なにとぞもうやめてくれ」ときまざまに諷めたが、かえって親を邪険にし、一人息子の武助という十四になる者を連れて、例の淵に出かけ、事の次第を語って聞かせ、「俺がするように取れ」といつて親子一緒に川に入ったのだが、作らせた竜に魂が入って、武助をくわえて振り回すと見えたのを、武太夫はあまりの悲しみに気を失い川の藻屑の下に沈んでしまい、親子共に息絶えて、丸二日を過ぎて遺体が浮かび上がったのだが、それを見る人は親の恥までさらした不孝者だと蔑んで、可哀想だと言う人はいなかった。

7 段解答

一 1 ひらに 2 やめよ 3 いけん 4 あた 5 おのが 6 りよう 7 もくず

8 にじゅうよんどき 9 からだ

二 1 敵。 2 1 順序 ② 事情 三 1 細工の竜。 2 漆を盗みに来たと思って。 3 武太夫。

4 二人の死骸。

四 1 動詞 絶ゆ 連用形 ヤ行下二段活用

8 段

この事、頭はれ、「数年、かやうの事を、押領せし科」とて、1 この家、10 闕所せられて、親は所を立退き漸々、命を助かり、悲しき浮世に住みぬ。女は、親類とてもなき者な128ば、

そのまま乞食となりて、恥を顧みず、人の門に、たち1ぬれども、「姑につらく当たりし者」とて、すたり行く水をもやらず、程なく、2飢_レ死ににあひぬ。

注 10 闕所―家財を没収される刑罰。

語釈

一次の語の読みを現代仮名遣いで記せ。

1 頭はれ 2 数年 3 科 4 闕所 5 立退き 6 漸々

7 乞食 8 人の門 9 姑 10 程なく 11 飢_レ

二次の語の意味を辞書で調べよ。

1 頭はる

2 押領

3 科

4 浮世

5 乞食

6 姑

三 傍線部1の問いに答えよ。

1 指示内容を記せ。

四 二重線部1の文法問題に答えよ。

1 品詞名 基本形 活用形 活用の種類

2 品詞名 基本形 活用形 活用の種類

五 口語訳

この事件がおおやけになり、「数年もの間このように横領した罪」として、この家は家財を没収され、親はここを立ち退いて、命は何とか助かったが悲しい浮世を過ごすことになった。妻女は親類もない身の上であつたので、そのまま乞食となつて、恥も顧みず他人の家の門に立つて物乞いをしたけれども、「姑につらく当たつた者」というので皆が憎み、捨てる水さえ恵んでやらなかつたので間もなく飢えて死んでしまった。

8 段解答

一 1 あらはれ 2 すねん 3 とが 4 けつしよ 5 たちのき 6 ようよう 7 こつじき

8 ひとのかど 9 しゅうとめ 10 ほどなく 11 うえ

二 1 人に知られる。 2 横領。 3 1 過失 ② 罪。 4 辛いこの世の中。 5 こじき。

6 夫または妻の母。 三 1 武太夫の家。 1 助動詞 ぬ 已然形 完了 2 動詞 飢う 連用

形 ワ行下二段活用

段	時・場所	
1	12月 13日 宇都宮	「新湯は体に毒。親父を入れろ」
2	家 四、五年	硫黄・燈心の行商
3	世間	成り金
4		急に裕福になる。我がままに贅
5	大隈川 支流	沢に暮らす。 鱒を手づかみし、人にあげる。
6	ある時	漆のかたまりを見つけた大金 持ちになる。
7	淵 家 て 暫くし	竜を作らせる。 恐れる ↓ 親に話す 連れて行く 「おれのように漆を取れ」↓
8	後	沈む 二人死ぬ 横領罪
		妻「いい湯加減だ」
		裕福でも質素がいい
		細工師 竜Ⅱ生きているよう
		親「欲に限りはない。やめろ。」 武助（子一四歳） 武助Ⅱ竜に食われる
		家財没収 親Ⅱたちのき 妻Ⅱ乞食 餓死

主題 親不孝は身を滅ぼす。

文学史

作品 本朝二十不孝浮世草子。一六八六（貞享三）年刊。徹底した親不孝者が、この世でその罪の報いを受けるという二十の短編から成る。孝道奨励の時代の風潮にのりつつ、不孝という行為に注目して当世の人の心を活写した。本話は巻三の第三話。漆を発見して一人占めにしようとする竜の作りものをした話は、昔話『米良の上漆』など各地の伝説として伝えられている。

作者

井原西鶴一六四二（寛永十九）年～一六九三（元禄六）年本名・平山藤五。大阪の裕福な町家に生まれる。初め俳諧に志し、西山宗因の門に入って活躍した。その後、浮世草子へと転じ、多くの傑作を発表した。西鶴の作品は好色物、武家物、町人物、雑話物に分類されるが、いきいきとした当代語を自由奔放に操り、色と欲とにうごめく世の人心を凝視した作品を残した。代表作に『好色一代男』『世間胸算用』など。

前文

㊦ 八犬士の一人、犬飼現八は、日光二荒山に向かう途中、下野国真壁郡網苧（足尾）の里に足を止め、里はずれの茶店で休んだ。店先に鉄砲や弓が掛けてあったので不審に思い、亭主の

賜平（もずへい）に尋ねたところ、おおよそ次のような答えであった。——ここから五、六里の庚申山まで人はほとんど住んでおらず、山賊や猛獣が出没して物騒なために用意している。そして庚申山は大変険しく、奥の院を見たという者はいなかった。ところが、ここに武芸の達人で赤岩一角という者がおり、それでは自分が登ってみせようと、妖怪が出るからという弟子達の制止も聞かず山に入った。案の定行方不明になったが、妻が泣き崩れ門人達がおろると救援策を探しあぐねていた二日目になって、ひよつこりと帰って来た。これは十七年も前のことだが、山の麓で人が行方不明になったりすることは今でも変わりが無い。その一角も山から帰ってきてから人が変わったようになり、息子角太郎を虐待して先妻の兄犬村氏のもとに養子に出し、養父母が死ぬと財産だけを取り上げ息子夫婦はまた放り出すというひどい仕打ちをするようになった。しかし、孝心の篤い角太郎は一切逆わず、草庵を結んでわび住まいをしている。——

現八は、気の毒な話もあるものだと思いつつ、念のために弓矢を買って先を急いだ。ところがやがて日は暮れ、闇の中で道に迷ってしまった。そのうちに、「胎内くぐり」（庚申山第一の石門）らしい所まで来たのでここで一夜を明かすことにした。

*登場人物を全て○で囲み、中心となる語を□で囲め。

1段

丑三にやと思ふ比、東のかたより忽然と1螢火可の火光、閃々として両三点、こなたを投て来る如く、いとも幽に見え1しかば、現八ふかく怪みて、「彼は鬼火か、2しからずば、天狗火にもやあらんずらん。要3こそあれ。」と遽しく、1半弓拿て、胎内竇を、出て傍の樹陰を、2盾柴にしつゝうかがひ4をり。

注

1 半弓——普通よりも短い弓。座って射ることができる。2 盾柴——「射翳」とも書く。待ち伏せして射るために身を隠しておく設備。

語釈

一 次の語の読みを現代仮名遣いで記せ。

1 丑三に 2 比 3 可 4 閃々 5 両三点 6 投て 7 幽に 8 彼

9 遽しく 10 胎内竇 11 傍の 12 樹陰 13 盾柴

二 次の語の意味を辞書で調べよ。

1 忽然

三 傍線部1の問いに答えよ。

1 何か。

四 二重線部1～4の文法問題に答えよ。

1 品詞名 基本形 活用形 文法的意味

2 品詞分解 口語訳

3 結びの語 基本形 活用形

4 品詞名 基本形 活用形 活用の種類

五 口語訳

丑三つ（午前二時ごろ）であろうかと思う頃合い、東の方から忽然と螢ほどの光がちらちらと二つ三つこちらに向けてやって来るように、とてもかすかに見えたので、現人は深くあやしんで、「あれは鬼火か、でなければ天狗火かもしれない。用心が必要だ」と気ぜわしく、半弓を取って胎内くぐりを抜けて、かたわらの木陰を盾柴にして様子をうかがっていた。

1 段解答

一 1 みつ 2 ころ 3 ばかり 4 ちらちら 5 ふたつみつ 6 さし 7 かすか 8 あれ

9 いそがわ 10 たいないくぐり 11 かたえ 12 このかげ 13 まふし

二 1 突然

三 1 妖怪の両眼 四 1 助動詞 き 已然形 過去 2 しから ラ変動詞 しかり 未然形

ず 助動詞 ず 連用形 打消し ば 係助詞 そうでなかえらば

3 あれ ラ変動詞 あり 已然敬 4 ラ変動詞 をり 終止形

2段

さる程に1件の火は、近づく随1大きうなりて、そがあたりを燭すこと、炬火に異ならず。既にしてその間、四五3反ばかりになるまでに、現八はなほよく見んとて、瞬もせでありけるに、怪しむべしその火の光は、4地狗・天狗の所為にはあらで、えもえしれぬ妖怪の、両眼の耀れるなり。且その模様を譬ていはゞ、面は暴たる虎の如く、口は左右の耳まで裂さけて、鮮血を盛れる盆より赤く、又その牙は真白にして、剣を倒に裁たる如く、幾千根の長き髯は、雪に閉たる柳の糸の、風に紊れて戦ぐに似たり。しかれども2そが形体は、宛人に異ならず。腰には両口の太刀を横佩たへて、5くりげのこまに跨たるが、その馬も亦異形にして、全身すべて枯木の如く、処々に苔生して、四つの足は樹枝なるべく、その尾は芒の生ひたるなり。左右に従ふ若党あり。一箇はその面藍より青く、一箇はその色6赭石に似て、頭髮さへにいと赤く、画る7諸天に彷彿たり。かくてこの妖怪主従、徐々に馬を歩せつゝ、何事やらん相譚々々、或は高く笑ひなどして、胎内寶のかたに2来にけり。

注

3反―一反は約十・八メートル。4地狗―キツネ。5駒―赤茶色の毛の馬。6赭石―赤い色の石。7諸天―「天」は仏教語で、世を護る神。

語釈

一 次の語の読みを現代仮名遣いで記せ。

1件 2随に 3燭す 4炬火 5間 6反 7瞬 8所為 9両眼 10耀れる

11且 12譬へて 13暴たる 14裂て 15鮮血 16裁たる 17髯

18紊れて 19戦ぐ 20形体 21宛 22両口 23佩て 24跨たる

25異形 26全身 27処々 28苔生して 29樹枝 30芒

31一箇 32面藍 33赭石 34彷彿たり 35徐々に 36歩せつゝ 37相譚

二 次の語の意味を辞書で調べよ。

1 異形

三 傍線部1・2の問いに答えよ。

1 指示内容を記せ。

2 指示内容を記せ。

四 二重線部1・2の文法問題に答えよ。

1 音便の種類 元の形

2 品詞分解 口語訳

五 口語訳

そうするうちに、例の火は近づくにつれ大きくなって、あたりを松明のように明るく照らした。既に光との間合いがわずか四五反ほどになるまでに、現八はさらによく見ようとしてまばたきもしないでいたのだが、不思議なことにその火の光は、狐や天狗の仕業ではなくて、正体不明の妖怪の二つの眼が光っていたのであった。ともあれその有様をたとえていうならば、顔は凶暴な虎のようで口は左右の耳まで裂けて、鮮血をたたえた盆よりも赤く、またその牙は真つ白で剣を逆さまに植えたようであり、幾千本もの長い髯は雪に覆われた柳の糸が風に乱れてそよいでいるようである。けれどもその姿はまるで人間と同じである。腰には二振りの太刀を横に差し、栗毛の馬にまたがっているが、

その馬もまた異形であつて、全身すべて枯れ木のようで、ところどころは苔むして、四本の脚はまるで木の枝で、尾はすすきが生えたようである。その左右に付き従う若党がいる。一人はその顔が藍よりも青く、一人はその顔が赭石のように真つ赤であり、髪の色さえも赤く、仏画の諸天にそっくりである。こうしてこの妖怪主従は、ゆっくり馬を歩ませながら、何事かを語らい合つて、あるいは高笑いなどして胎内くぐりの方にやってきた。

2段解答

一 1くだん 2まま 3てら 4たいまつ 5あわい 6たん 7またたき 8わざ

9ふたつまなこ 10ひか 11まず 12たとえ 13あれ 14さけ

15ちしお 16うえ 17ひげ 18みだ 19そよ 20 かたち

21sながら 22ふたふり 23たへ 24のり 25 いぎよう 26みのうち

27ところどころ 28こけむし 29きのえだ 30 すすき 31ひとり

32つらあい 33しやせき 34 sもに 35 しずか 36うた

37かたり

二 1普通と異なる様子

三1螢火ばかりの光 2妖怪

四 1ウ音便 大きく 2来 カ変動詞 来 連用形 に 助動詞 連用形 完了
けり 助動詞 けり 過去 終止形 過去 やつてきた

3段

現人は彼為体を、はや見定めてなかくに、些も騒ぐ気色なく、心の中に思ふやう、「彼の馬に

騎たるこそ、妖王なるべけれ。18 先にすれば物を征し、後るときは征せらる。2 彼奴をだに射て落さば、3 その余は必逃亡なん。よしや怨みを復さんとて、これ彼斉うち逆ふとも、そは怕るゝに足るものなら1じ。」と早速の尋思は、勇士の大胆、両条の箭は腰にあり。半弓左手に突立て、窃に4 件の樹に攀登るに、その神速はやくこと猿猴の如く、程よき枝に足踏留めて、弓に箭つがふて彎固めつゝ、霎時矢比を張けり。さりけれど妖怪等は、5 かくとは思ひかけざりけん、心のどけくうち相譚て、胎内竇に近きつ、進み入らんとする程に、ねらい済すませし現人が、矢声も猛く発はなつ箭に、件の騎馬なる妖怪は、左の眼を篋深に射られて、一ア声「苦」と叫びもあへず、馬よりどうと墜おちしかば、「吐嗟」と騒ぐ両箇ふたりの妖物ばけもの、手負の手を取り肩に引かけ、一箇は馬を牽ひきつゝも、旧来しかたへ逃亡にげうせけり。

注

8 先にすれば物を征し、後るときは征せらる―『史記』項羽本紀「先即制人、後則為人所制」を踏まえている。

語釈

一次の語の読みを現代仮名遣いで記せ。

1 彼為体	2 些も	3 彼の	4 騎のりたる	5 妖王	6 後るゝ	7 彼奴	8 必逃亡
9 怨うらみ	1 0 復さん	1 1 斉一	1 2 逆ふ	1 3 怕るゝ	1 4 尋思	1 5 両条	
1 6 箭	1 7 左手	1 8 窃に	1 9 攀登る	2 0 神速こと	2 1 猿猴	2 2 踏留めて	
2 3 彎固めつゝ	2 4 霎時	2 5 張	2 6 相譚て	2 7 近きつ	2 8 猛く	2 9 発つ	
3 0 篋深	3 1 苦	3 2 墜しかば	3 3 吐嗟	3 4 両箇の妖物	3 5 手負3	6 一箇	
3 7 牽ひきつつ	3 8 旧来しかた	3 9 逃亡					

二次の語の意味を辞書で調べよ。

1 なかなか

2 気色

3 これかれ

- 4 左手
- 5 猿猴
- 6 矢声
- 7 手負いひ
- 三 傍線部1～5の問いに答えよ。
- 1 具体的に言うかどうか。
- 2 誰のことか。
- 3 誰のことか。
- 4 指示内容を記せ。
- 5 指示内容を記せ。
- 四 二重線部1の文法問題に答えよ。
- 1 品詞名 基本形 活用形 文法的意味
- 五 口語訳

現八は彼らの姿様子をいち早く見定めて、かえって少しもうろたえる様子もなく、心の中で思うことには、「あの馬に乗っている者が妖怪の王に違いない。先んずれば物を制し、後るれば制せられる。あいつをさえ射落とせば、その他は必ず逃げて行くだろう。たとい報復しようとして、それらが一斉に向かってきても、恐るるには足るまい」と早速考えを巡らすのは勇士の大胆さゆえ、二本の矢は腰にある。半弓を左手に突き立てるようにして持ち、こっそり隠れていた木によじ登るのだが、よじ登る速さときたらまるで猿のようであり、具合の良い枝に足場を定めて、弓に矢をつがえて引き絞り、少しの間矢を射る頃合いをうかが

った。けれども妖怪たちはこんなことになっているとは思っても寄らなかったのだろうか、のんびりと語らい合って、胎内ぐりに近づいて、進み入ろうとする時に、狙い澄ました現八が、矢音も激しく放った矢に、例の馬に乗った妖怪は左の眼を真深く射られて、ひと声「ああつ」と叫ぶこともできず、馬からどおっと落ちたので、「あれえ」と騒ぐ二人の妖怪は、傷を負った妖怪の手を取って肩に掛け、一人は馬を引きながら、もと来た方へ逃げ帰った。

3 段解答

- 一 1 かのていたらく 2 ちつと 3 かの 4 にりたる 5 ばけもののおう 6 おく
- 7 あやつ 8 かならずにげうせ 9 うりみ 10 かせ 11 ひとしく 12 むか
- 13 おそ 14 しあん 15 ふたすじ 16 や 17 ゆんで 18 ひそか
- 19 よじのぼ 20 はや 21 ましら 22 ふみとど 23 ひきかた 24 しぼし
- 25 うかが 26 かたる 27 ちかず 28 け 29 はな 30 のぶか 31 あつ
- 32 おち 33 あなや 34 ふたりばけもの 35 ておい 36 ひとり 37 ひき

38 もとき 39 にげうせ
二1 なまじつか 2 かえつて 3 あれやこれや 4 左手 5 猿の古名
6 「や」とか「えい」とかうかけ声 7 負傷
三1 妖王をまず倒すということ 2 妖王 3 若党ふたり 4 胎内寶の傍らの木
5 現人にねらわれていること
四1 助動詞 じ 終止形 打消し推量
構成

段	時・場所	現人	他
1	午前二時 ごろ 胎内竇 木	こちらに来る。 「鬼火か天狗火か？」 半弓を取る。出る。 身を隠す。	二三の光
2	距離50m	よく見よう。	光Ⅱ大きくなる。 光Ⅱ妖怪の両目 妖怪の様子 面Ⅱ虎 口Ⅱ裂ける 牙Ⅱ劍 髯Ⅱ柳 妖怪Ⅱ人 腰に太刀 馬に乗る 枯れ木のよう 苔 四足は枝 尾―芒
3	木	「馬に乗るやつを倒せば 他は逃げる。」 木に登る。 矢を射る。	妖怪たち 知らない。 左右に家来 妖怪 左目 「あつ。」 左右の家来「あれえ。」 三人逃げていく。

後文

この後、赤岩一角の亡霊が現われ、今現八が射たのが庚申山に棲む化猫であり、それが自分を殺して一角になりすましている、と告げる。また一子角太郎に助力して仇を討たせてやってくれと頼んだ。一方、傷ついた化猫は角太郎の妻雛衣に迫るが、玉の霊験と雛衣の犠牲的な愛と現八の助力によってついに倒れる。こうして、「礼」の玉の持主犬村角太郎と「信」の玉の持主犬飼現八が義兄弟の縁を結ぶことになったのだった。

文学史

南総里見八犬伝（なんそうさとみはつけんでん）読本。一八二四（文化十一）年から一八四二（天保十三）年まで二十八年にわたって書き継がれた全九十八巻の大長編。中国の『水滸伝』の構想を参考に、仁義礼智忠信孝悌という儒教的な八つの徳目を体現する八犬士が大活躍する話で、全編を勧善懲悪思想が貫いている。

作者

滝沢馬琴一七六七（明和四）年～一八四八（嘉永元）年江戸生まれ。松平家に仕える武士の家に生まれる。山東京伝に入門し黄表紙作者として出発し、読本作者となった。歴史上の出来事に題材を求め、整然とした構成の中に勧善懲悪、因果応報の姿勢を示す作品を残す。その構想の雄大さ、波瀾万丈の展開など、他の作家の追隨を許さなかった。代表作に『南総里見八犬伝』『椿説弓張月』など。

1段

1 1 車は馳はせ、景は移り、2 境は転じ、客は改まれど、貫一は変わらざるその憂鬱を抱きて、やる方なき2 五時間の独りに倦うみ疲れつつ、始めて西那須野の駅に1 下車せり。

(注)

1 車は馳せ―汽車は速く走り。2 境は転じ―場所はどんどん変わってゆき。

一 次の語の読みを記せ。

1 馳せ 2 憂鬱 3 倦み

二 次の語の意味を調べよ。

1 夜叉

三 傍線部1・2の問いに答えよ。

1 何か。

2 どういうことか。

四 二重線部1の文法問題に答えよ。

1 品詞分解 口語訳

1段解答

一 1は 2ゆうつ 3う

二 1恐ろしい姿をし強い力を持っているといわれる鬼神。

三 1汽車 2五時間汽車に乗っていた。

四 1下車 名刺 せ サ変動詞 す 未然形 り 助動詞 完了 り 終止形

2段

直ちに西北に向いて、今尚茫々たるいにしえの那須野原に1入れば、天はひろく、地は遙かに、ただ3平蕪の迷い、4断雲の飛ぶのみにして、5三里の担途たんと、6一帯の重巒、塩原はそこぞと見えて、行くほどに路は窮まらず、ようやく千本松を過ぎ、進みて関谷村に至れば、人家の1尽くる所に7淙々の響きありて、これに架かれるを入勝橋となす。

すなわち橋を渡りてわずかに行けば、日光暗く、山厚く畳み、8嵐気冷やかに谷深く陥りて、9幾廻りせるつづら折りの、後ろには10密樹に11声々の鳥呼び、前には12幽草13歩々の花を開き、いよいよ登れば、遙かに木隠れの音のみ聞こえし流れの水上は浅く露れて、14すわや、ここに15空山の雷白光を放ちて崩れ落ちたるかとすさまじかり。道の右は16山をきりて長壁となし、17石幽は苔碧うして、幾条とも白糸を乱し懸けたる細瀑小瀑ほそたきこたきの18珊々として注げるは、嶺上の19松の調べも、定めて20この緒よりやと見捨て難し。

(注)

3平蕪―雑草の生い茂っている平野。4断雲―ちぎれ雲。5三里の担途―三里の平らかな道。一里は約四キロメートル。6一帯の重巒―ひとつづきの重なった山々。7淙々の響き―水の流れる音。8嵐気―山中に立つもや。9幾廻りせるつづら折りの―何度もうねうねとまがりくねった坂道であつて。10密樹―すきまのないほど立てこんだ樹木。11声々の鳥呼び―さまざまの鳥の鳴き声が聞こえ。12幽草―深く生い茂った草。13歩々の花を開き―一步一步進むとともに開いた花を見て。14すわや―さては。15空山―人氣のない山。16山をきりて長壁となし―きり立ったがけとなつて長く続いており。17石幽は苔碧うして―岩石も古び、その苔も青くて。18珊々として―さらさらと。19松の調べ―松を吹く風の音。20この緒よりや―この糸(「細滝小滝」を弦楽器の糸に見立てている。)から出ている音であろうかと思われて。

一 次の語の読みを記せ。

- | | | | | | |
|---------|----------|------|--------|---------|-------|
| 1 茫々たる | 2 平蕪 | 3 重巒 | 4 窮まらず | 5 嵐気 | 6 声々 |
| 7 木隠れ | 8 水上 | 9 雷 | 10 石幽 | 11 碧うして | 12 幾条 |
| 13 細瀑小瀑 | 14 珊々として | | | | |

二 次の語の意味を調べよ。

- 1 いにしえ
- 2 つづら折り
- 三 傍線部1の問いに答えよ。
- 1 主語を記せ。

四 二重線部1の文法問題に答えよ。

1 品詞名 終止形 活用形 活用の種類

2 段解答

1 1 ぼうぼう 2 へいぶ 3 ちようらん 4 きわ 5 らんき 6 せいせい
7 こがく 8 みなかみ 9 いかずち 10 せきゆう 11 あお 12 いくす
じ 13 ほそたきこたき 14 さんさん

二 1 ずっと昔 2 幾重にも曲がりくねった道。

三 1 間貫一

四 1 動詞 尽く 連体形 力行上井段活用

3 段

1 21 車を駆りて白羽坂を越えてより、回顧橋に三十尺の 22 飛瀑をふみて、山中の景は始めて奇なり。これより行きて道あれば水あり、水あれば必ず橋あり、全溪にして三十橋。山あれば岩あり、岩あれば必ず瀑あり。全嶺にして七十瀑。地あれば泉あり、泉あれば必ず熱あり、全村にして四十五湯。なお数うれば十二勝、十六名所、 23 七不思議、誰か一々探り得べき。

そもそも塩原の地形たる、塩谷郡の南より群峯の間を分けて深く西北に入り、綿々として箒川の流れにさかのぼる 24 片そばの、四里に岐れ、十一里にわたりて、至る所 25 巉巖の 26 水をはさまざるなきは、さながら青銅の 27 葉研に 28 瑠璃末を砕くに似たり。

まず大網の湯を過ぐれば、根本山、魚止滝、児ヶ淵、 29 左靱の険は古りて、白雲洞は朗らかに、布滝、竜ヶ鼻、材木石、五色石、船岩などと眺め行けば、鳥井戸、 30 前山の翠衣に染みて、福渡ふくわたの里に入るなり。

道すがら向かいの崖の所々につつじの残り、山藤のかかれるが、はなはだ興ありと目留まれ

ば、またこのあたり、殊に谷浅く、水澄みて、大いなる古鏡の沈めるごとく、深く覆える岸樹は 31 陰々として眠るに似たり。貫一は覺えず踏みとどまりぬ。

(注)

1 21 車を駆りて—人力車を走らせて。に案内されたれど、内には入らで、始めより滝に向える欄干に倚りて、たまたま人を迷いたりし子の母の親にも逢いけんように、しばしはその傍らを離れ得ざるなりき。 22 飛瀑をふみて—回顧橋から眼下に三十尺もの高い所から落ちる滝をながめつつ、そこを通りすぎて。 23 七不思議—逆杉、片葉の葦、一夜竹などがある。 24 片そば—切り立ったような険しいがけ。 25 巉巖—険しくそびえ立っている大岩。 26 水をはさまざるなき—どの岩にも滝がかかっているやまを言った。 27 葉研 142 漢方

菓をつくる際、菓種をくだいて粉にする舟形の器具。²⁸ 瑠璃末——るりは青色の宝石。瑠璃末はその粉末。ここでは滝の飛沫が太陽の光に映じて美しくきらめいているさまを形容。

²⁹ 左靱の陰——陰しくそそり立つ左靱。³⁰ 前山の翠衣しみて——樹木におおわれた前山の緑によつて自分の衣服も青く染まろうとするくらいに。³¹ 陰々——うす暗くものさびしいさま。

一 次の語の読みを記せ。

- | | | | | | | |
|-------|--------|--------|--------|--------|------|------|
| 1 駆りて | 2 回顧橋 | 3 飛瀑 | 4 全溪 | 5 瀑 | 6 岐れ | 7 巉巖 |
| 8 菓研 | 9 瑠璃 | 10 根本山 | 11 魚止滝 | 12 兎ヶ渚 | | |
| 13 左靱 | 14 古りて | 15 布滝 | 16 五色石 | 17 前山 | | |
| 18 翠 | 19 福渡 | 20 岸樹 | | | | |

二 次の語の意味を調べよ。

- 1 綿々
- 2 さながら
- 3 道すがら

三 傍線部1の問いに答えよ。

- 1 何か。

四 二重線部1の文法問題に答えよ。

- | | | | |
|-------|-----|-----|-------|
| 1 品詞名 | 終止形 | 活用形 | 文法的意味 |
|-------|-----|-----|-------|

3 段解答

- | | | | | | |
|----------|--------------|--------|----------|------------|------|
| 一 1 か | 2 みかえりばし | 3 ひばく | 4 ぜんけい | 5 たき | 6 わか |
| 7 ざんがん | 8 やげん | 9 るり | 10 ねもとやま | 11 うおどめのたき | |
| 12 ちごがふち | 13 左靱のひだりうつば | 14 ふ | 15 ぬのだき | | |
| 16 じしきせき | 17 まえやま | 18 みどり | 19 ふくわた | 20 がんじゅ | |
- 二 1 長く続いて絶えないさま。 2 そつくるそのまま。まるで。 3 途中。

三 1 人力車

- | | | | |
|---------|---|-----|----|
| 四 1 助動詞 | ぬ | 終止形 | 完了 |
|---------|---|-----|----|

(中略)

4 段

一村十二戸、温泉は五箇所に湧きて、五軒の宿あり。ここに清琴楼と呼べるは、南にあたりて箒川の緩く廻れる河原に臨み、1 俯しては、水石の 32 りん々りんたるを弄び、仰げば西に、33 富士、喜十六の 34 翠巒と対して、清風座に満ち、袖の沢を落ち来る流れは二十丈の絶壁にかかりて、35 練絹を垂れたるごとき吉井滝あり。東北は山また山を重ねて、36 琅かんの玉簾ぎ深く 37 夏日の畏るべきをさえぎりたれば、四 38 面遊目に足りて 39 丘壑きゆうがくの富をほしいままにし、40 林泉の奢りを窮め、またある 1 まじき 41 清福自在の別境なり。

(注)

32々―水が清くすきとおって石のみえるさま。33 富士、喜十六―それぞれ、塩原西南にある山。34 翠巒―緑につつまれた山。35 練絹―白いきぬ。36 琅の玉簾―琅は寶石に似た美しい石。玉簾は美しいすだれの意。ここでは、うつそうたる樹木の緑をたとえたもの。37 夏日の畏るべき―夏の太陽の強烈な光。38 四面遊目に足りて―四方ともこの地に遊ぶ人々の目を満足させて。39 丘壑の富をほしいままにし―丘壑は丘と谷。山水の美しい景色を我がものとして思う存分眺めること。40 林泉の奢りを窮め―林泉は木立と泉水のある庭自然の景色の美しさを我がものとする。41 清福自在の別境―清らかな幸福を思うがまま味わい得る別天地。

一 次の語の読みを記せ。

1 弄び 2 翠巒 3 玉簾 4 丘壑

二 次の語の意味を調べよ。

1 俯す

2 仰ぐ

1 の問いに答えよ。

1 修辞法を記せ。

四 二重線部 1 の文法問題に答えよ。

1 品詞名 終止形 活用形 文法的意味

4 段解答

一 1 もてあそ 2 すいらん 3 きよくれん 4 きゆうがく

二 1 下を向く。 2 上を向く。 三 1 対句 四 1 助動詞 まじ 連体形 打消し推量

(中略)

5段

性来多く山水の美に親しまざりし貫一は、殊に心こころの往く所を知らざるばかりに1愛で喜びて、清琴楼の二階座敷に案内されたれど、内には入らで、始めより滝に向える欄干に倚りて、1たまたま人中を迷いたりし子の母の親にも逢ひけんように、しばしはその傍らを離れ得ざるなり。

(注)

心こころの往く所を知らざるばかりに愛で喜びて―どうしてよいかわからない程、夢中になつて喜んで。

一 一次の語の読みを記せ。

1 往く 2 愛で 3 欄干 4 傍ら

二 二次の語の意味を調べよ。

1 愛づ

三 傍線部1の問いに答えよ。

(1) 修辞法を記せ。

(2) この様子を説明せよ。

四 二重線部1の文法問題に答えよ。

1 品詞名 終止形 活用形 活用の種類

5段解答

一 1ゆ 2め 3らんかん 4 かたわ

二 1氣に入る。 三 (1) 比喩法 (2) 滝を見て憂鬱を慰める。

四 1 動詞 愛づ ダ行下に段 連用形

構成

段	景色	間 貫一
1	汽車 上野駅→西那須野駅 五時間	憂鬱 乗る。
2	那須野原 千本末 関谷 入勝橋	移動
3	人力車 白羽坂 回顧橋 滝 塩原 箒川	乗る。
4	大網の湯 福渡の里 崖のつつじ 山藤 清琴楼 箒川の側	目がとまる。踏みとどまる。 着く。
5	山水の美 滝	無関心 見とれる。

主題 塩原の溪谷への感動

文学史

『金色夜叉』

明治三十年から読売新聞に断続連載。紅葉死去のため未完のまま中絶。婚約者鳴沢宮しぎさわみやを、金のために奪われた間貫一はざまかんいちが、高利貸となり宮や世間に復讐しようとする。本県塩原が舞台となるのは終末の「続続金色夜叉」の冒頭部分。貫一は宮への煩惱と悔恨を胸に旅をする。

作者

尾崎紅葉 一八六七（慶応三）年→一九〇三（明治三十六）年東京生まれ。明治十八年山田美妙らと「硯友社」を結成、機関誌『我楽多文庫』創刊。西鶴の写実的手法に影響されつつ、心理描写にも力を入れた作品を発表した。主な作品に『二人比丘尼色懺悔ににんびくにいろざんげ』、『多情多恨』、『心の闇』（宇都宮が舞台）などがある。

(参考)

金色夜叉 (こんじきやしや)

尾崎紅葉が書いた明治時代の代表的な小説。読売新聞に1897年(明治30年)1月1日・1902年(明治35年)5月11日まで連載された。前編、中編、後編、続金色夜叉、続続金色夜叉、新続金色夜叉の6編からなっている。執筆中に作者が死亡したため未完成である。紅葉門下の小栗風葉が1909年(明治42年)に「終編金色夜叉」を書き継いだ[1]。昭和に入って、度々、映画、ドラマ化されるようになった。

あらすじ

高等中学校の学生の間貫一(はざま かんいち)の許婚であるお宮(鳴沢宮、しぎさわ みや)は、結婚を間近にして、富豪の富山唯継のところへ嫁ぐ。それに激怒した貫一は、熱海で宮を問い詰めるが、宮は本心を明かさない。貫一は宮を蹴り飛ばし、復讐のために、高利貸しになる。一方、お宮も幸せに暮らせずにいた。

お宮を貫一が蹴り飛ばす、熱海での場面(前編 第8章)[2]は有名である。寛一のセリフとして「来年の今月今夜のこの月を僕の涙で曇らせてみせる」が広く知られているが、これは舞台・映画でもっとも簡略化したセリフに基づいたものである。

前文

「自分」は、いいなずけの女性と自分に思いを寄せる別の女性とをめぐる家族や親類の干渉をうるさく思つて東京の家を出る。北へ向かう途中、ポン引きの長蔵のいうままに坑夫になることにし、前橋らしき駅から汽車に乗る。夕刻汽車を降りてから長蔵が誘つた「1 赤毛布あかげつ」と「小僧」とともに足尾銅山に向かう。山中のわらじ屋の熊さんの小屋に一泊して、翌日四人は銅山に着いた。

注 1 赤毛布―昔は田舎の人が赤毛布などを肩から掛けて防寒用にした。田舎者のことをそう呼んでいるのだろう。

1段

1 山の中の山を越えて、雲の中の雲を通り抜けて、突然新しい町へ出たんだから、眼をこすつて視覚をたしかめたい位驚いた。それも昔の宿しゆくとか里とかいう2 旧幕時代に縁のある様な町なら、まだしもだが、新しい銀行があつたり、新しい郵便局があつたり、新しい料理屋があつたり、凡すべてが苔の生えない、新しづくめの上に、白粉おしろいをつけた新しい女までいるんだから、全く夢の様な気持ちで、不審が顔に出る暇もないうちに通り越しちまつた。すると橋へ出た。長蔵さんは橋の上へ立って、ちよつと水の色をみたが、「是れが入り口だよ。いよいよ着いたんだからそのつもりでいなくっちゃ、いけない。」と注意を与えた。しかし自分には、どんなつもりでいなくっちゃいけないんだか、ちつとも分からなかったから、黙つて橋の上へ立って、入り口から奥の方を見ていた。左が山である。右も山である。そうして、所々に家うちが見える。矢つ張り木造の色が新しい。中には白壁だか、ペンキ塗だか分らないのがある。これも新しい、古ぼけて坑 夫夏目漱石 3 禿げてるのは山ばかりだった。なんだか又現実世界に引き摺り込まれる様な気がして、少しく失望した。長蔵さんは自分が黙つて橋の向こうを覗き込んでるのを見て、「いいかね、4 御前さん、大丈夫かい」と又聞き直したから、自分は、「いいです」と明瞭に答えたが、内心あまりよくはなかった。何故なせだかしらないが、長蔵さんは只自分にだけ懸念ねんがある様子であつた。赤毛布あかげつと小僧には「いいかね」とも「大丈夫かい」とも聞かなかつた。頭から5 此の兩人ふたりは過去の因果で、坑夫になって、6 銅山のうちに天命を終るべきものと認定している様な気色がありありと見えた。して見ると不信用なのは自分だけで、大分長蔵さんから此奴こいつは危ないかと睨まれていたのかも知れない。いい面つらの皮だ。

一 次の語の読みを記せ。

- | | | | | | | | | | | | |
|---|-----|---|-----|---|----|---|----|---|----|---|----|
| 1 | 苔 | 2 | 凡て | 3 | 白粉 | 4 | 不審 | 5 | 何故 | 6 | 懸念 |
| 7 | 赤毛布 | 8 | 面の皮 | | | | | | | | |

二 次の語の意味を調べよ。

- 1 まだしも
- 2 不審
- 3 内心
- 4 懸念
- 5 因果
- 6 面の皮

三 傍線部1～6の問いに答えよ。

- 1 修辭法は何か。
- 2 いつのことか。
- 3 なぜか。
- 4 誰のことか。
- 5 指示内容を記せ。
- 6 どういうことか。

1 段解答

- 一 1 こけ 2 すべ 3 おしろい 4 ふしん 5 なぜ 6 けねん 7 あかげつと
8 つら かわ
- 二 1 まだそうでないが。 2 疑わしいこと。 3 心の内。 4 心配。 5 原因と結果。
6 顔の皮。ずうずうしい意味で使う。
- 三 1 対句。 2 江戸時代 3 鋤毒で木が枯れた。 4 自分 5 赤毛布と小僧
6 銅山で働いて死ぬ。

2 段

それから四人揃って、橋を渡って行くと、右手に見える家うちには中々立派なのがある。そのうちで一番いかめしい奴を指さして、あれが所長の家うちだと長蔵さんが教えてくれた。ついでに左の方を見ながら「こつちが2 シキだよ、おまえさん、いいかね」と言う。自分はシキという言葉がこの時初めて聞いた。よっぽど聞き返そうかと思つたが、大方これがシキなんだろうと思つて黙つていた。あとから自分もこのシキという言葉を明瞭に理解しなければならぬ身分になつたが、矢つ張始めにぼんやり考へついた定義とさした違いもなかった。そのうち左へ折れていよいよシキの方へ入る事になつた。鉄軌について段々上のぼって行くと、そこそこ粗末な小さい家うちが沢山ある。これは坑夫の住んでる所だと聞いて、自分も今日から、1 こんな所で暮すのかと思つたが、それは間違ひであらう。

この小屋はどれも六畳と三畳二間ふたまで、みんな坑夫の住んでる所には違いないが、家族のあるものに限って貸してくれる規定であるから、自分の様な一人ものは入りたくたって入れないんだった。

一 一次の語の読みを記せ。

1 揃って 2 指して 3 鉄軌

二 二次の語の意味を調べよ。

1 いかめしい

三 傍線部1の問いに答えよ。

(1) 指示内容を記せ。

(2) これは間違っていたが、正しいのはどれか。

2段解答

一 1そろ 2さ 3レール

二 1 壮大だ。

三 (1) 小さい家 (2) 長屋

3段

こういう小屋の間を縫って、飽きずに上って行くと、今度は石崖の下に細長い横幅ばかりの長屋が見える。そうして、その長屋が沢山ある。始めは僅か二三軒かと思ったら、登るに従って続々あらわれて来た。大きさも長さも似たもんで、みんな崖下にあるんだから位置にも変りはないが、向きだけはめいめい違ってる。山坂を利用して、なけなしの地面へ建てることだから、東だとか西だとか贅沢は言っていられない。やっとの思いで、ならした地面へ否応なしに、方角のお構い かまい なく建てて仕舞ったんだから不規則なものだ。それに、第一、登って行く道がくねっている。あの長屋の右を歩いてるなと思うと、いつの間にかその長屋の前へ出て来る。あれは、すぐ頭の上だがと心待ちに待っていると、急に路が外れて遠くへ持たれて仕舞う。丸で見当が付かない。その上1この細長い家から顔が出ている。家うちから顔が出ているのが珍しい事もないんだが、その顔がただの顔じゃない。どれも、これも、出来ていない上に、色が悪い。その悪さ加減が又、尋常でない。2青くって、黒くって、しかも茶色で、到底都会に居ては想像のつかない色だから困る。病院の患者などとは丸で比較にならない。自分が山路を登りながら、初めてこの顔を見た時は、シキという意味をよく了解しないくせに、なるほどシキだなと感じた。然しいくらシキでも、こういう顔は沢山あるまいと思って、登って行くと、長屋を通る150んび

に顔が出ていて、その顔がみんな同じである。仕舞にはシキとは恐ろしい所だと思ふまで、
3 いやな顔を沢山見せられて、また4 自分の顔を沢山見られて―長屋から出ている顔はき
つと自分等を見ていた。一種獰悪な眼付きで見ていた。―とうとう午後の一時に飯場へ着
いた。

注 2 シキ―鉱山の坑内をさすことば。鉱山の職場内で通用していた言葉であろう。

一 次の語の読みを記せ。

- | | | | | | | | | | | | |
|---|-------|---|------|---|----|----|----|---|----|---|------|
| 1 | 縫って | 2 | 飽きずに | 3 | 長屋 | 4 | 沢山 | 5 | 僅か | 6 | 否応なし |
| 7 | お構いなく | 8 | 外れて | 9 | 獰悪 | 10 | 飯場 | | | | |

二 次の語の意味を調べよ。

- 1 なけなし
- 2 否応なし
- 3 獰悪
- 4 飯場

三 傍線部1～4の問いに答えよ。

- 1 何か。
- 2 なぜこうなのか。
- 3 どういうことか。
- 4 どういうことか。

3 段解答

- 一 1ぬ 2あ 3ながや 4たくさん 5わず 6いやおう 7かま 8そ 9どうあく
10 はんば

二1あるのかないのか分からないくらい僅かな程度。2いやという返事と宜しいと言う返事。

3性質が凶悪で強いこと。 4土木工事や鉱山の現場にある労働者の合宿所。

三1長屋 2行動に入っているから。 3長屋の沢山の顔が出ているので。

4長屋の沢山の顔に見られた。

構成

段	時 場 所	自 分	ほ か
前文	東京く銅山	着いた	四人 着いた
1	入口	「いいです。」	長蔵さん「大丈夫か？」 二人に無関心
2	禿山 立派な家 小さい家	ここに入る 顔を見る	所長の家 家族者の家 一人者の家
3	長屋 続く長屋 一時 飯場	顔を見る 顔を見られる 着いた。	顔を見る

主題 銅山に到着し働く。

作品 坑夫 明治四十一年一月から四月まで朝日新聞に連載。作者を訪ねてきた一人の青年が足尾銅山で坑夫として働いた経験談をもとに執筆された作品。

作者 夏目漱石一八六七（慶応三）年～一九一六（大正五）年東京生まれ。明治三十八年、『吾輩は猫である』により小説家として出発。高い教養と鋭い批判精神で近代的知識人の自我の問題を追究した。主な作品に『坊っちゃん』『三四郎』『それから』『門』『行人』『こころ』『道草』などがある。

参考

『坑夫』(こうぶ)

夏目漱石の長編小説で、1908年(明治41年)の元日から、東京の『朝日新聞』に91回にわたって、大阪の『朝日新聞』に36回にわたって、掲載された。『虞美人草』について、漱石が職業作家として書いた二作目の作品。

あらすじ

恋愛関係のもつれから着の身着のまま東京を飛び出した、相当な地位を有つ家の子である19歳の青年。行く宛なく松林をさまよううちにポン引きの長蔵と出会う。自暴自棄になっていた青年は誘われるまま、半ば自殺するつもりで鉱山で坑夫として働くことを承諾する。道すがら奇妙な赤毛布や小僧も加わって四人は鉱山町の飯場に到着する。異様な風体の坑夫たちに絡まれたり、青年を案ずる飯場頭や坑夫の安さんの、東京に帰った方がいいという忠告に感謝しつつも、青年は改めて坑夫になる決心をして、深い坑内へと降りてゆく。そして、物語の結末は唐突に訪れる。坑道に深く降りたつた翌日、診療所で健康診断を受けた若者は気管支炎と診断され、坑夫として働けないことが判明する。結局、青年は飯場頭と相談して飯場の帳簿付の仕事を五ヶ月間やり遂げた後、東京へ帰ることになる。

解説

ある日突然「三、漱石のもとに荒井某という若者が現れて「自分の身の上にこういう材料があるが小説に書いて下さらんか。その報酬を頂いて実は信州へ行きたいのです」という話を持ちかける出来事が起きる。漱石は当初、個人の事情を小説として書きたくないという思いから、むしろ君自身が小説化した方がいいと本人に進める。しかし、時を同じくして、1908年(明治41年)の元日から『朝日新聞』に掲載予定だった島崎藤村の『春』の執筆がはかどらず、急遽漱石がその穴を埋める事となる。そこで漱石は若者の申し出を受け入れ、漱石作品としては異色と言える実在の人物の経験を素材としたルポルタージュ的な作品が生まれる。漱石の代表作として名が上がることは稀だが、作品の研究論文は現在に至るまで多数存在する。

足尾銅山

1550年(天文19年)に発見と伝えられているが、1610年(慶長15年)百姓二人が鉱床を発見、幕府直轄の鉱山として本格的に採掘が開始されることになった。足尾に幕府は鑄銭座を設け、銅山は大いに栄え、足尾の町は「足尾千軒」と言われるような発展を見せ、当時の代表的な通貨である寛永通宝が鑄造されたこともある。江戸時代にはピーク時で年間1,200トンもの銅を産出していた。その後一時採掘量が極度に減少し、幕末から明治時代初期にかけてはほぼ閉山状態となっていた。明治4年(1871年)には民営化されたが銅の産出量は年間150トンにまで落ち込んでいた。

足尾銅山の将来性に悲観的な意見が多い中、1877年（明治10年）に古河市兵衛は足尾銅山の経営に着手、数年間は全く成果が出なかったが、1881年（明治14年）に待望の有望鉱脈を発見。その後探鉱技術の進歩によって次々と有望鉱脈が発見された。古河市兵衛の死後、明治38年3月に会社としての古河鉱業の経営となった。当時の明治政府の富国強兵政策を背景に、銅山経営は久原財閥の日立鉱山、住友家の別子銅山とともに急速な発展を遂げた。20世紀初頭には日本の銅産出量の40%ほどの生産を上げる大銅山に成長した。しかしこの鉱山開発と製錬事業の発展の裏では、足尾山地の樹木が坑木・燃料のために伐採され、掘り出した鉱石を製錬工場から排出される大気汚染による環境汚染を引き起こしていた。荒廃した山地を水源とする渡良瀬川は洪水を頻発し、製錬による廃棄物を流し、足尾山地を流れくだった流域の平地に流れ込み、水質・土壌汚染をもたらし、広範囲な環境汚染を引き起こした。いわゆる、足尾鉱毒事件である。1891年（明治24年）田中正造による国会での発言で大きな政治問題となった。1890年代より鉱毒予防工事や渡良瀬川の改修工事は行われたものの、鉱害よりも銅の生産を優先し、技術的に未熟なこともあって、鉱毒被害は収まらなかった。

1973年（昭和48年）2月28日をもって採鉱を停止し、銅山発見以来360余年の銅山を閉じた。その後、現在は足尾銅山観光などの観光地となっている。閉山後も輸入鉱石による製錬事業は続けられたが、1989年（平成元年）にJR足尾線の貨物輸送が廃止されて以降は鉱石からの製錬事業を事実上停止し、2008年（平成20年）時点では、製錬施設を利用しての産業廃棄物（廃酸、廃アルカリなど）リサイクル事業を行っているのみである[1]。

2012年（平成24年）「足尾銅山・映像データベース研究会」が4年がかりで作成してきた「足尾銅山写真データベース」を、6月15日に（Webサイト）上で正式公開すると発表した。1883年から46年間に亘り現地を訪れ、当時の状況を記録していた小野崎一徳によって撮影された写真を中心に、銅山と人の営みを白黒写真で記録したもので、撮影時期・場所、説明などが付記されている。また柴岡信一郎による「足尾銅山の郷さと」――生きていく近代産業遺産――は足尾銅山の栄枯盛衰を記録したフォトアルバムで、日本一の銅産出量を誇り近代産業の発展に大きく貢献した栃木県足尾町（現日光市）の現状を記録すると共に、地域振興において近代産業遺産をどのように活用できるかを述べている。

足尾鉱毒事件

足尾鉱毒事件（あしおこうどくじけん）または足尾銅山鉱毒事件（あしおどうざんこうどくじけん）は、19世紀後半の明治時代初期から栃木県と群馬県の渡良瀬川周辺で起きた日本で初めてとなる足尾銅山での公害事件。原因企業は古河鉱業（現在の古河機械金属）。銅山の開発により排煙、鉱毒ガス、鉱毒水などの有害物質が周辺環境に著しい影響¹⁶⁴もた

らし、1890年代より栃木の政治家であった田中正造が中心となり国に問題提起するものの、精錬所は1980年代まで稼働し続け、2011年に発生した東北地方太平洋沖地震の影響で渡良瀬川下流から基準値を超える鉛が検出されるなど、21世紀となった現在でも影響が残っている。

現在の栃木県日光市足尾地区では江戸時代から銅が採掘されていたが、江戸時代前期をピークとして産出量はいったん低下し、幕末にはほとんど廃山の状態となって国有化された。明治維新後、民間に払い下げられ、1877年に古河市兵衛の経営となる。古河は採鉱事業の近代化を進め、1885年までに大鉱脈が発見された。さらに西欧の近代鉱山技術を導入した結果、足尾銅山は日本最大の鉱山となり、年間生産量数千トンをかぞえる東アジア一の銅の産地となる。当時銅は日本の主要輸出品のひとつであり、全国の産出量の1/4は足尾銅山が占めていた。しかし精錬時の燃料による排煙や、精製時に発生する鉱毒ガス（主成分は二酸化硫黄）、排水に含まれる鉱毒（主成分は銅イオンなどの金属イオン）は、付近の環境に多大な被害をもたらすこととなる。

田中正造

次に、渡良瀬川から取水する田園や、洪水後、足尾から流れた土砂が堆積した田園で、稲が立ち枯れるという被害が続出した。これに怒った農民らが数度にわたり蜂起した。田中正造はこのときの農民運動の中心人物として有名である。なお、この鉱毒被害の範囲は渡良瀬川流域だけにとどまらず、江戸川を経由し行徳方面、利根川を経由し霞ヶ浦方面まで拡大した。田畑への被害は、特に1890年8月と1896年7月21日、8月17日、9月8日の3度の大雨水で顕著となった。

1892年の古在由直らによる調査結果によれば、鉱毒の主成分は銅の化合物、亜酸化鉄、硫酸。

1901年には、足尾町に隣接する松木村が煙害のために廃村となった。このほか、松木村に隣接する久蔵村、仁田元村もこれに前後して同様に廃村となった。

閉山

1973年（昭和48年）までに足尾の銅は掘りつくされて閉山、公害は減少した。ただし、精錬所の操業は1980年代まで続き、鉱毒はその後も流されたとされる。1989年（平成元年）にJIR足尾線で貨物列車が廃止になると、原料鉱石の搬入量が減少し、鉱毒はさらに減少したとされる。

1 2 華厳の滝

大町桂月

1 段

日光に遊ぶこと、1 余はこれで四度目なるが、2 道別は、はじめてなり。神橋さん然として碧流に映ずるさま、いつ見ても眼さむるこちす。左岸は、東照宮の杉の並木、奥ぶかく、川上を見あぐれば、幾個の3 さん峰、弾丸をならべ立てたるごとく、うつ蒼として、天を刺し、黄葉その間にまじりて、山いよいよ鮮やかなり。「紅葉青山水急流」古句の妙なるを感じずんばあらず。輪王寺をへて、東照宮の前にいたる。道別は、好古の癖あり、美術の鑑識にも富めり。これは1 思ったよりも見事なりと感嘆す。見物は帰路にゆずらんと、立ち去りかねたる道別をうながし、二荒神社も、三代將軍の廟もただただそとより見たるのみにて1 立ち去りぬ。みちに一獵夫に逢う。銃を肩にし、背には鮮血したたらんばかりの鹿を負おえり。夏では見るを2 得べからざる光景なり。

(注)

1 余—私(自称の人称代名詞)。2 道別—松本道別。筆者の友人。3 さん峰(峰)—集まり重なった峰。

一 次の語の読みを記せ。

1 余 2 碧流 3 富めり 4 廟 5 獵夫 6 逢う 7 負えり

二 次の語の意味を調べよ。

1 妙なる
2 好古

三 傍線部1～6の問いに答えよ。

1 誰の感想か。

四 二重線部1・2の文法問題に答えよ。

1 品詞分解 口語訳

2 品詞名 終止形 活用形 活用の種類

1 段解答

一 1 よ 2 へきりゆ 3 と 4 びよう 5 りようふ 6 あ 7 お

二 1 上手である。2 昔の物事を好むこと。

三 1 道別

四 1 立ち去り ラ行四段活用 立ち去る 未然形 ぬ 助動詞 完了

ぬ 終止形 立ち去った 2 動詞 ア行下二段活用 得 終止形

2段

馬返しを過ぎて、深沢に至るまでは尋常一様の溪谷なり。見あぐる4屏風岩、はじめ山というもののにのぼりたる人には珍らしかるべけれど、さまで奇とすべきものにあらず。ことに五年前、すなわち明治三十五年の大洪水は、この深沢の溪流の美の一半を奪い去れり。その大洪水は、ただにこの深沢にたたりたるのみならず、5大日堂の園池を流し、6含満ヶ淵の石地蔵をこわし、7裏見瀑をしてその実なきようにならしめたるなり。山坂にとりつかんとするところに、8女人堂むなく存して、海老茶袴かるがるとのぼりゆく。

9 剣ヶ峰にいたれば、みちしばし平らかなり。この剣ヶ峰は、日光山中にて、1最も紅葉の美観きわむるところなりと称せらる。黄葉紅葉、谷を埋め、峰におよび、10方等、般若はの二瀑その間にかかる。されど瀑や小、溪流や微、谷や狭、峰や凡なり。箱庭的小景なり。中の茶店にいたれば、眼界ややひろく、左の華厳方面の溪谷を見おろし、はるかに阿含の小瀑を望む。11大平に至れば、その名のごとく、みち平らかなり。左折してゆくこと数十間、一軒の茶屋あり。五郎平茶屋という。星野五郎平という人、明治三十三年に、ここより華厳の滝壺におりるみちをひらき、2ここに茶店を設けたるなり。華厳瀑は、もと見るに不便なる瀑なりき。普通遊人は滝壺の上の懸崖をおり、滝の中央と相對するところにいたりて、のぞきこむだけにて、何となくもの足らぬ思いしたり1き。まれに陰をおかす人は、滝の上の流れをわたり、熊笹をおしわけゆきて、向う側のやや傾斜ある懸崖を石とともにすべりおりたりしが、こは少し危険なり。今や、五郎平氏のおかげにて、遊人ややすと滝壺におりるを得るようになれり、3山水の恩人とも言うべきなり。その上にも白雲瀑とて、長さ三十丈、幅九間もある大瀑を新たに発見せり。その七分目ぐらいのところに、12鵲橋をかけて、みちを通ず。橋上に立ちて、滝を見あげ、見おろす。湯本の湯瀑に似て、やや小なり。かかるところに、かかる大瀑あらんとは思ひもかけず。

(注)

4 屏風岩―馬返より右上方にそそりたつ約百メートルの広い岩。5 大日堂―日光市久次良町くじらまちにその旧跡がある。芭蕉も訪れたという。6 含満ヶ淵―大谷川が植物園に接するあたりにあり、化け地蔵で有名。7 裏見瀑―安良沢あらさわより約三・五キロメートルのところにある。芭蕉に「暫時しばらくは滝に籠こもるや夏げの初はじめ」の句がある。五十二ページ参照。8 女人堂―第一いろは坂の下部に現在赤いほこらがは思わざれど、酔うて耳熟したるからだを23きん中に横たうれば、いつしか、すやすや眠りぬ。『紅葉の旅・1』※この当時はまだ第二いろは坂が開通しておらず、上り下りとも現在の第一いろは坂を通行していた。残っている。男体山は女人禁制の山で、明治初年まで女性はこの男体山を遙拝したという。9 剣ヶ峰―第一いろは坂の下部で、道がやや平らになっているあたり。見晴らし所となっている。10 方等、般若―剣ヶ峰から見える二つの滝。11 大平―華厳の滝付近から第一いろは坂にさしかかるあたり。12 鵲橋―かささぎ橋。七157の夜

かささが天の川に翼を連れ二つの星（牽牛けんぎゅう・織女しよくじよ）を会わせたと
いう。

一 一次の語の読みを記せ。

1 尋常 2 屏風岩 3 含満ヶ渚 4 女人 5 海老茶袴

6 方等 7 般若 8 阿含 9 大平 10 懸崖 11 鵲橋

二 二次の語の意味を調べよ。

1 尋常

2 箱庭

3 懸崖

三 傍線部1～3の問いに答えよ。

1 わかりやすく言い換えよ。

2 指示内容を記せ。

3 誰のことか。

四 二重線部1の文法問題に答えよ。

1 品詞名 終止形 活用形 文法的意味

2 段解答

一 1 じんじよう 2 びようぶいわ 3 がんまんがふち 4 によにん

5 えびちやばかま 6 ほうとう 7 はんにや 8 あごん 9 おおだいら

10 けんがい 11 じやくきよう

二 1 ごく普通なこと。2 浅い箱に土砂を入れ、家・橋などの模型を置いたり小さい木を植
えたりして、山水の景色や庭園をかたどったもの。3 切り立ったような崖。

三 1 紅葉の美しさが最もすぐれたところ。2 左折して数十間行ったところ

3 星野五郎平

四 1 助動詞 過去 き 終止形

3段

思うに、中禅寺湖の水、地下をくぐりて、ここよりほとぼしり1出づるなるべし。華嚴の滝壺にいたれば、ここには茶屋あり。仰いで1大瀑の直下するを見る。その雄偉なるさまは、拙き筆にはつくされず。ただただ日本第一流の大瀑とのみに言いてやむべし。高さ七十五丈と称すれども、理学士矢田部梅吉氏の実測によれば、五十五間、すなわち三十三丈とのことなり。華嚴は、直下の点において、群を抜いて雄偉なり。されど、華嚴のみが瀑にあらず。山は必ずしも高きをととばず、瀑は必ずしも長大なるをととばず。日光にても、華嚴のほか、湯滝、龍頭滝、裏見滝、霧降滝、それぞれ趣きあり。なお13七滝、14真暗滝、15相生滝、日月滝、16慈観滝も、まんざら捨てたものにあらず。17数年前、藤村操という第一高等学校の一学生、18巖頭の感という文を草し、宇宙は不可解なりと叫びて、2身をこの華嚴に投ぜしより、それにならいて、3ここに身を投ずるもの、百余人の多きにおよべるは、明治の世の裏面を語る一の現象なり、ここに諸亡霊をとむらいて、短古一編を作る。

宇宙は解くべからず。我が身を殺すにしかず。少年秀才ひとたび19偈よを作る。続きて死者たちまち百人。世をあげて気骨なし。ただ一身のためにうれう。大瀑一条万古よりかかる。巖頭半夜20鬼しゅうしゅう。(原文は漢詩)

(注)

13七滝—稻荷川上流雲龍溪谷のY字峽の上にある七つの滝。14真暗滝—霧降滝上流にあり、玉簾すだれ滝ともいう。15相生滝—田母沢たもぎわ上流にある。10816慈観滝—裏見滝の上流にある。17数年前—明治三十六年五月十三日。18巖頭の感—「悠々たる哉天壤、遼々たる哉古今、五尺の小人、を以て此大をはからむとす。ホレーショの哲学、竟に何等のオーソリチーを価するものぞ。万有の真相は唯だ一言にして悉す。曰く『不可解』。我この恨を懷いて煩悶終に死を決するに至る。既に巖頭に立つに及んで胸中何等の不安あるなし。始めて知る大なる悲観は、大なる樂觀に一致するを。」19偈を作る—悪いことの糸口となる。20鬼しゅうしゅう(鬼啾啾)—鬼哭啾啾。死者の靈魂が悲しそうに泣くさま。

一 次の語の読みを記せ。

1 出づる	2 龍頭滝	3 裏見滝	4 霧降滝	5 趣	6 真暗滝
7 相生滝	8 藤村操	9 巖頭	10 偈を作る		

二 次の語の意味を調べよ。

1 雄偉

三 傍線部1～6の問いに答えよ。

1 指示内容を記せ。

2 誰の身か。

3 どういうことか。

四 二重線部1の文法問題に答えよ。

1 品詞分解 口語訳

3 段解答

一 1 いづる 2 りゆうずのたき 3 うらみのたき 4 きりふりのたき

5 おもむぎ 6 まつくらだき 7 あいおいだき 8 ふじむらみさお

9 がんばとう 10 とう

二 1 勇壯で偉大なこと。

三 1 華嚴の滝 2 藤村操 3 投身自殺

四 1 出づる 動詞 ダ行下に段活用 出づ 連体形

なる 助動詞 なり 連体形 断定 べし 助動詞 べし 終止形 推量

出るのだろう

4 段

さきに、1余は清滝村の途上、道別のナイフをかりて、自製の金剛杖をつくれり。華嚴よりの帰路、五郎平茶屋近くなりけるに、1あなた、それ、頂戴など、意気な、快濶な声に、思わずも、その杖を所望せられて、いやとも言えず、ああ、2あげようと、渡す手は赤黒く、受くる手は白く、3のぼる肩とくだる肩とすれあうばかりにて、おしろいの香、髪油の香、一種の女の香、鼻をかすめて去る。この女は女人堂のあたりにて、余らが石に腰かけて休みいたりしとき、過ぎゆきたる4四人づれのひとりなり。あかぬけしたる顔つきにて、髪は銀杏がえしにゆいたり。年は二十五六に1みゆ。年二十三に見えて、丸髷にゆいたるは、その妹とおぼしく、顔どこか似たれど、姉はやや細面にて、妹は丸ボチャなり。四十五六に2みゆる女は、この二人の母にや。四十歳以後の男は、この姉のほうの夫らしく、ひげさえありて、商人ともつかず、役人106ともつかず、骨格はたくましかれど、いたく21しやすいせるは、病後なるべし。今、再びこの一群の、おり来たるにあらう。老母先頭にあり。五六間へだたりて、姉妹あい連なる。妹、先にあり、杖を乞いたる姉、後にあり。それよりも二十間もへだたりて、男よぼよぼとはうようにくだり来160る。

活気は腹にある顔つきなれど、病には敵するあたわざるべしと、気の毒になり、杖は、この男に3与うべかりしをと、ふりかえれば、はや美人の影もみえず。いざりの夫を車にのせて箱根山にのぼりし女もあるに、このように、弱れる夫を助けもせで、5あらぬ男に臆面もなく6わがための杖をねだるは、いずれ芸者か茶屋女か、もしくは、それらの身の果てなるべく、平生、22鼻下長の紳士に着物をねだり、金時計ねだり、芝居をねだり、遠出をねだりつけたる畳の上の乞食、自製の杖などは、何とは思わざるべく、それを7病夫に与えんとは思わざるまでに、世人一般に軽薄になり、ずうずうしくならば、華厳に身を殺すものも絶え果てて、天下は太平なるべし。

(注)

21 しょうすい (憔悴) — やせおとろえる。 22 鼻下長 — 女に甘いこと。

一 次の語の読みを記せ。

1 金剛杖 2 快濶 3 所望 4 銀杏 5 丸髻 6 細面 7 臆面

8 平生 9 鼻下長 10 乞食

二 次の語の意味を調べよ。

1 所望
2 細面
3 臆面
4 平生
5 軽薄

三 傍線部1～7の問いに答えよ。

- 1 (1) 誰の言葉か。
(2) 「それ」 指示内容を記せ。
- 2 (1) 修辞法を記せ。
(2) 「手」はそれぞれ誰の手か。
- 3 修辞法を記せ。
- 4 抜き出せ。
- 5 誰のことか。
- 6 誰のことか。
- 7 誰のことか。

四 二重線部1、3の文法問題に答えよ。

- | | | | | |
|---|------|-----|-----|-------|
| 1 | 品詞名 | 終止形 | 活用形 | 活用の種類 |
| 2 | 品詞名 | 終止形 | 活用形 | 活用の種類 |
| 3 | 品詞分解 | 口語訳 | | |

4 段解答

- 一 1 こんごうづ 2 かいかつ 3 しょう 4 いちよう 5 まるまげ
6 ほそおもて 7 おくめん 8 へいぜい 9 びかちよう 10 こじき
二 1 望みとするもの。 2 ほつそりした感じの顔。 3 きおくれした様子。
4 ふだん。 5 あさはかで上滑りしているさま。

三 1 (1) この女。 (2) 金剛杖

- 2 (1) 対句 (2) 渡す手―作者 浮くる手―この女 3 対句

4 この女 妹 母 男 5 作者 6 この女 7 男

四 1 動詞 みゆ ヤ行下に段活用 終止形 2 動詞 みゆ ヤ行下に段活用 連体形

3 与う 動詞 与う 終止形 ヤ行下二段活用 べかり 助動詞 べし 連用形 義務

し 助動詞 き 連体形 過去 を 接続助詞 逆接

5 段

高山植物の林つきて、中禅寺湖をみる。霰をおびたる疾風、枯葉をまいて、山岳も動かんとす。日も暮れかかりたり。中宮祠下の一旅店に投宿す。風なおやまず。1 家動きて舟にあるが1ごとく、岸うつ波の音、山上の湖とは思わざれど、酔うて耳熟したるからだを2 3 きん中に横たうれば、いつしか、すやすや眠りぬ。

(注) 2 3 きん中 (衾中) 夜具の中

*この当時はまだ第二いろは坂が開通しておらず、上り下りとも現在の第一いろは坂を通行していた。

一 次の語の読みを記せ。

- 1 霰 2 疾風 3 中宮祠

二 次の語の意味を調べよ。

1 投宿

三 傍線部1の問いに答えよ。

1 なぜか。

四 二重線部1の文法問題に答えよ。

1 品詞名 終止形 活用形 文法的意味

5 段解答

一 1 あられ 2 しつぷう 3 ちゅうぐうし

二 1 旅館に泊まること

三 1 疾風が吹いたから。

四 1 助動詞 ごとし 連用形 比況

段	1	2	3	4	5
時 場 所	日光 神橋 東照宮 二荒神社	馬返し 屏風岩 明治三十五年 大洪水 剣ヶ峰 黄 葉紅葉 阿含の小滝 五郎茶屋	中禅寺湖の 水―華厳の 滝に至る。 数年前		中宮祠下 宿
作 者	四度目	五年前	山水の恩人	杖を作る。 杖を上げる。	すやすや眠る。
他	道別 はじめて 「これは見事。」 獵夫 鹿を負う		星野五郎平 茶店を立てる。 下りる道を作る。	藤村操 投身自殺 自殺の名所 四人連れ 女 「杖頂戴。」二十五六 細面 妹 丸ボチャ 母 四十五六 男 病後	

作品

華巖滝一九二九（大正四）年刊行『桂月文選』所収の紀行文『紅葉の旅』の冒頭の一編。

作者

大町桂月

一八六九（明治二）年～一九二五（大正十四）年高知県生まれ。詩人、随筆家、評論家。武島羽衣らとともに詞華集アンソロジー『美文韻文花紅葉』を著し、脚光を浴びた。雑誌『太陽』『文芸倶楽部』に文芸時評、評論、紀行文を発表し、硬派の評論家として高山樗牛と併称された。

前文

吾一は落ちぶれた士族、愛川の息子である。成績は一番だが、家が貧しいため、中学進級の望みがかなえられそうもない。そんなある日、近所の仲間と遊んでいるうちに、生来の負けず嫌いから、意地を張り、汽車が通る鉄橋のまくら木にぶらさがってみせるはめに陥る。

一 次 of 語 of 読み of 記せ。

1 生来

二 次 of 語 of 意味 of 調べよ。

1 生来

2 はめ

前文段 of 解答

一 せいらい 二 うまれつき 三 困った事態・場合。

1 段

場めんはふたたび、田川 of 鉄橋にもどる。まくら木にぶらさがっていた吾一は、停車場のほうに背なかを向けていたから、汽車 of 突進してくるさまは見えなかった。いや、停車場のほうを向いていたところで、なんでそんな1 恐ろしいものを見ることができよう。

ヴォーム！

レールがまくら木 of 上であうなっていた。うなりは、刻々はげしくなってきた。と、それがまくら木につたわって、太い材木まで、かすかな声を立てはじめた。声だけではない。太いまくら木が2 ぶるぶるふるえた。その震動が指の先に、腕に、胸に、……からだ全体に、3 びりびり感じてきた。ああ、もう、おしまいだ！彼はただ、4 ケムシのように、まくら木にしがみついていた。へばりついていた。いや、いや、しがみついているの、へばりついているのなんて、知覚さえも、感覚さえも、なくなっていた。

ポオーツ！

ポッ、ポオーツ！

非常警笛が絶えまなく鳴っていたが、もうそんなものは5 彼の鼓膜を驚かさなかった。鼓膜には響いていても、彼はなんにも感じなかった。やがて、あたまがねむたくなるように、しびれてきた。ジョリ、ジョリ、ジョリッ！サトウ屋 of 大きなシャベルで、ザ166 メを

しゃくくような音がしたと思った瞬間に、彼は全く意識を失ってしまった。

一 次の語の読みを記せ。

1 停車場 2 刻々

二 次の語の意味を調べよ。

1 刻々

三 傍線部1～5の問いに答えよ。

1 何か。

2 修辭法を記せ。

3 修辭法を記せ。

4 修辭法を記せ。

5 どういうことか。

1段の解答

一 1ていしゃば 2こつこく 二 1時を追って。

三 1汽車 2擬態語 3擬態語 4比喻法 5非常警笛を聞くところではない。

(中略)

2段

翌日、学校へ行くと、授業のすんだあとで、京造と吾一とは、教室に残されて、ひとりひとり次野先生にしかられた。駅長から学校にも、厳重な通告がきていたのである。京造のほうは割り合いに早くすんだが、吾一のほうはかなり長くかかった。

「いったい、おまえのようなできる生徒が、1こんなことをしてかすって法はないじゃないか。それは、おまえだけですむことじゃないんだよ。先生も世間に顔むけができないし、学校だって、どんなに困っているかしれやしないのだぞ。」「……………」「しかし、なんだって、こんな無鉄砲なことをやる気になったのだ。何かよつぽど、しゃくにさわることもあったのか。」「……………」「愛川。それを言いなさい。あんなことをするからには、よくよくのことがあったのだろう。——おまえは中学に行きたいと言っていたが、それが思うようにいかないで、やけ、になつていたのじゃないのかい。」吾一はうなだれていた顔を少しあげた。彼はあの時、どうもそんなことなぞ考えていたようにも思わないが、先生に言われてみると、いくらか2そういう気もしないではなかった。「ああ、そんな167だろ

う。——中学へ行けないんで、むしろに世の中がつまらなくなってしまうって、死んだってどうしたって、かまわないって気になったんだろう」先生のほうで3そうきめてしまおうと、「いいえ、それはそれほどじゃなかったのです。」とは、答えにくかった。吾一は涙ごえで、ちいさく「ええ。」と簡単に返事をしてしまった。

実際、なんでやったのだと言われても、あの時はただ、かつとなつて「やってみせるとも。」と言つて、やつてしまったので、今はっきりした理由なんか、ちつとも思い出せなかった。何よりも印象に残っているのは、おきぬの髪にさしてあった、花カンザシの赤いふさ、だが、無論、そんなことなんか、ここで言えることではない。が、考えてみると、先生が言うようなことも、まんざら、なかったわけでもないんだから、先生の言う通りにしておくのが、いちばん世話がない、と彼は思ったのである。

一 次の語の読みを記せ。

- 1 厳重 2 無鉄砲

二 次の語の意味を調べよ。

- 1 無鉄砲

- 2 やけになる

- 3 まんざら

三 傍線部1～3の問いに答えよ。

- 1 この後でどういつているか、抜き出せ。

- 2 どういう気か。

- 3 指示内容を記せ。

2段の解答

- 一 1 げんじゅう 2 むてっぼう

- 二 1 どのようなかを考えずに、一氣に進もうとすること。

- 2 思うようにことが運ばなくて前後のみさかしくもなく乱暴になること。

- 3 必ずしも。

三 1 「無鉄砲なこと」「無謀なこと」「むたやなこと」 2 中学に行けないのでやけになった。

3 「中学へ行けないんで、むしろに世の中がつまらなくなってしまうって、死んだってどうしたって、かまわないって気になったんだろう」

3段

「おまえの気もちを考えると、先生は大いに同情はするけれども、しかし、無謀なことをやったものだ。——」「……………」「中学へ行けないくらいのもので、そんな考えを起こすやつがあるものか。そんなちっぽけなことじゃ、けつして大きな人間にはなれやしないぞ。——愛川、おまえは自分の名まえを考えたことがあるか。」「……………」「ああ、自分の名まえはどういう意味を持っているのか、おまえは、わかっていないのじゃないのかい。」「……………」

「おそらく、吾一って名まえは、おとつあんが庄吾だから、その庄吾の『吾』と、最初にできた子どもなんで、『一』という字をつけたのだろうが、しかし、先生の考えじゃ、ただ、それだけとは思えないんだがね。——愛川、『吾』っていうのは、じつに、いい名まえなんだぞ。」

次野は熱心に語り続けた。

「おまえは作文にでも、習字にでも、自分の名まえだから書くんだって気もちで、たいして考えもせずに、ただ愛川吾一と書いているが、名は体をあらわすというくらい大事なもので、1吾一というのは、容易ならぬ名まえなんだよ。」「……………」「おまえの名まえは、おまえのおとつあんがつけたのか、ほかの人がつけたのか知らないが、とにかく、さつき言ったようないわれ、のほかに、もっと深い意味が含まれているのだ。名まえをつけた人に、そこまでの考えがあつたかどうか、それは今せんさくする必要はない。つけた人はどういう考えでつけたにしろ、そういう立派な名まえを持っているものは、その名まえを、立派に生かしていくようでなくては、名まえに対して申しわけがないではないか。」

「……………」「吾一というのはね、われはひとりなり、われはこの世にひとりしかないという意味だ。世界に、なん億の人間がいるかもしれないが、おまえというものは、いいかい、愛川。愛川吾一というものは、世界中に、たったひとりしかないんだ。どれだけ人間が集まっても、同じ顔の人は、ひとりもないと同じように、愛川吾一というものは、この広い世界に、たったひとりしかないのだ。そのたったひとりしかないものが、汽車のやってくる鉄橋にぶらさがるなんて、そんなむちゃなことをするってないじゃないか。」

「……………」「さいわいに、汽車のほうでとまってくれたから、よかったようなもの、もし、あのまま進行したら、おまえはどうなっていたと思う。愛川吾一ってものは、もうこの世にはいなくなっていたのだぜ。」「……………」「死んじまって中学校に行けるかい。」

おまえは中学へ行つて立派な人になりたいと思つているのだらう。それなのに、あんなバカなまねをやつてどうするのだ。よく世間では、このつき生まれ変わってきた時には、なんて言うけれども、人間は一度死んでしまったら、それっきりだ。愛川吾一ってものがひとりしかないように、一生つてももの、一度しかないのだぜ。」「……………」「おまえはまだ子どもだから、しかたがないと言えしかたがないが、鉄橋にぶらさがるなんてこ

べつに勇ましいことでも、大胆なことでもないんだよ。そんなのは匹夫の勇というものだ。
——死ぬことはなあ、愛川。おじいさんか、おばあさんにまかせておけばいいのだ。人生は死ぬことじゃない。生きることだ。これからのものは、何よりも生きなくてはいけない。自分自身を生かさなくってはいけない。たったひとりしかない自分を、たった一度しかない一生を、ほんとうに生かさなかつたら人間、生まれてきたかいないじゃないか。」「……」「わかつたか、愛川。先生は、おまえに見どころがあると思えばこそ、こんなに言っているのだ。おまえは自分の名にかけて、是非とも自分を生かさなくってはならない。おまえってものは、世界中にひとりしかないんだから。——いいか、このことばを忘れるんじゃないぞ。」

一 次 of 語 of 読みを記せ。

1 無謀 2 匹夫 3 奉公

二 次 of 語 of 意味を調べよ。

1 名は体を表す

2 詮索

3 匹夫の勇

三 傍線部 1～6 の問いに答えよ。

1 (1) どういうことか、抜き出せ。

(2) (1) の抜き出しを發展させた考えを一文で抜き出せ。

3 段解答

一 1 むぼう 2 ひつぶ 3 ほうこう

二 1 名はそのものの性質や中身などをうまく現わしている場合が多いことを言う。

2 手を尽くして尋ね求めること。 3 思慮分別が無くただ血気にはやる勇。

三 1 (1) 「吾」というのはね、われはひとりなり、われはこの世にひとりしかないという意味だ。」

(2) 「たったひとりしかない自分を、たった一度しかない一生を、ほんとうに生かさなかつたら人間、生まれてきたかいないじゃないか。」

後文

吾一は小学校卒業後、近所の呉服屋へ奉公に出されるが、母の死を契機に上京する。東京でいろいろな人や出来事に接し、自分でみつけた印刷所で働くようになる。文士をめざして上京していた次野先生とも出会い、夜学に通いはじめる。こうして吾一が次第に成長してゆく所で終わる。(未完)

一 次の語の読みを記せ。

1 夜学

二 次の語の意味を調べよ。

1 夜学

後文解答

一 1 やがく 二 1 夜、授業を行う学校。

構成

段	時 場 所	前 文	1	2	3	後 文
吾一	士族 成績一番 貧乏 中学進級できない まくら木にぶらさがる ふるえる 意識を失う	田川の鉄橋 汽車 非常警報	翌日 教室			小学校 東京
他	先生「なぜあんなことをした。中学にけなくてやけになったのか。」 先生「吾はいい名で、吾一は世界に一人だ。」 「二人しかない自分を生かせ。」 母 死去 次野先生 文士を目指して上京する 出会う。					卒業 上京 印刷屋で働く。 夜学に通う。

主題 吾一の自立

作品

路傍の石一九三七（昭和十二）年「朝日新聞」に連載。第一部まで書かれたが、当時の軍部支配強化の時局により中断した。その後雑誌『主婦の友』に舞台を移して書き直されて連載されたが、作品内容に対する軍部の圧力もあり、再び中断、未完に終わった。栃木での幼少期に、家の事情で東京浅草に奉公に出された作者の生活体験などが、主人公吾一の描写に投影されている。

作者

山本有三二八八七（明治二十）年～一九七四（昭和四十九）年栃木市生まれ。一九一四（大正三）年芥川龍之介らと第三次『新思潮』をおこした。劇作家として出発し、のちに小説家としても活躍した。現実と理想の相克を多くの作品でテーマにしている。主な作品に『女の一生』、『真実一路』、戯曲『米百俵』などがある。